

大阪市平野区

# 長原・瓜破遺跡発掘調査報告

## I

1981年度大阪市長吉瓜破地区  
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1989. 3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市平野区

# 長原・瓜破遺跡発掘調査報告

## I

1981年度大阪市長吉瓜破地区  
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1989. 3

財団法人 大阪市文化財協会

『大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告 I』 正誤表

頁	行	誤	正
111	2	44号墳	45号墳
8	18	25（横向き写植の剥がれ）	（削除）
115	17	齊藤清秀	西藤清秀
122	15	伊藤 純1984	伊藤 純1987
126	表10	（追加）	27号墳の埴輪は〔大阪文化財セキ-1978〕より再トレス
130	下1	埼玉県政	埼玉県県政
132	21	第1項	第1節

大阪市平野区

# 長原・瓜破遺跡発掘調査報告

I

1981年度大阪市長吉瓜破地区  
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1989. 3

財団法人 大阪市文化財協会



45号墳出土の武人形埴輪

## 序 文

大阪市の「長吉瓜破地区土地区画整理事業」に伴う長原遺跡の発掘調査が始まって8年目を迎えた。本書はその初年度の調査成果を収めたものであり、報告の中心は地下に埋もれていた古墳である。

長原古墳群が発見されて、はや14年になる。その間、発見された古墳の数は年を追って増え続け、数年後には200基を越すほど、古墳群は規模・範囲ともに拡大してきた。南に古市古墳群、北に古代河内湖をひかえた中河内の一帯に、かくも多数の埋没古墳が存在するとは、予想だにされることであった。しかも、それらの大多数が小規模な方形墳であることも、古墳時代の河内、ひいては畿内の古代政権を研究するに際して、無視できない重要な事実を提供する。また、長原古墳群は古墳の研究にあたっても、地表に現存するものだけでは必ずしも十分ではないという注意を喚起し、学史上、記憶されることであろう。

長原古墳群については、いまだ、まとまった発掘報告がなされておらず、その重要性を知る関係者からは、報告書公刊の強い要望が出されている。今回、調査成果の一端を明らかにすることになったが、本書を通じて、古代の中河内の重要性が再認識されたとすれば、望外の喜びである。

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 佐治敬三

## 例　　言

- 一、本書は1981年度 大阪市都市再開発局（現、大阪市建設局長吉瓜破区画整理事務所）施行の大阪市平野区長吉川辺2丁目における土地区画整理事業施行に伴う発掘調査（NG81-2次）の報告書である。
- 一、発掘調査の現場作業は1981年7月20日から1982年2月22日まで、（財）大阪市文化財協会調査課長代理（当時）永島暉臣慎の指導のもとに、同課調査員植木 久・田中清美があたり、同黒田慶一がこれを助けた。また発掘調査は第I章第1節に記したような経緯から、必要個所を拡張調査したため、発掘対象面積は2900m<sup>2</sup>に及んだ。
- 一、現場調査および報告書作成の費用は、大阪市都市再開発局（機構改革により1982年度以降都市整備局になり、1988年度からは建設局に編入）および、同市水道局・同市下水道局・日本電信電話公社（現在は日本電信電話株式会社）・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。
- 一、本書は、当協会調査課長永島を編集責任者とし、同課の植木・田中・黒田・京嶋覚・積山洋が討議の上、分担・執筆を行った。執筆者名は担当個所の最後に記し、文責を明らかにした。なお、第I章第1節は大阪市教育委員会文化財保護課主任学芸員長山雅一氏に原稿をいただいた。資料の整理・図表の作成には多くの補助員諸氏の援助を得た。ここに記して謝意を表する。  
また、以下の方々から有益なご教示を賜った。記して感謝する次第である。（順不同）  
田辺昭三、中村 浩、田中和弘、柳本照男、森村健一、天野末喜、岩瀬 透、白神典之、森岡秀人、笠井敏光、神谷正弘、田上雅則、上田 雄、安村俊史、坂 端、下村豊良男、
- 一、遺構は、溝(S D)・井戸(S E)・水田畦畔(S R)・その他(S X)の記号の後に、本報告書独自の通し番号を01から順に付し、名称とした。ただし、古墳に関しては、当協会『長原遺跡発掘調査報告』IIで決定し、その後改定した号数を用いた。
- 一、調査時の測量は都市再開発局の基準点・水準点を用い、後に都市整備局の資料にもとづいて国土座標値（第VI系）に換算しなおした。したがって方位は座標北を示す。レベル数値はT.P.+値（東京湾平均海水面を基準とする）を用いた（本書内ではT P +と略称する）。
- 一、本書に使用した写真は、遺物については徳永國治氏が、遺構は（財）大阪都市協会および当協会調査員が撮影したものである。
- 一、発掘調査で得られた資料はすべて当協会が保管しており、出土遺物もまた、現在保管・管理中である。

# 本文目次

## 序文

## 例言

第Ⅰ章 調査の経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の経過.....	6
第Ⅱ章 長原遺跡の立地と概要.....	11
第1節 長原遺跡の立地.....	11
第2節 古墳時代長原遺跡の概要.....	14
第Ⅲ章 調査の結果.....	21
第1節 調査地の基本層序と遺物.....	21
1) 長原遺跡南部沖積層上層部.....	21
2) 長原遺跡南部沖積層下層部.....	27
3) 遺物.....	27
第2節 古墳時代の遺構と遺物 .....	30
1) 44号墳.....	30
2) 45号墳.....	37
3) 46号墳.....	56
4) 47号墳.....	56
5) 48号墳.....	59
6) 49号墳.....	59
7) 50号墳.....	62
8) 51号墳.....	71
9) 52号墳.....	72
10) 53号墳.....	74

11) 54号墳	76
12) 55号墳	81
13) 56号墳	81
14) 57号墳	81
15) 58号墳	94
<b>第3節 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物</b>	<b>97</b>
1) 水田	97
2) 溝	100
<b>第4節 平安時代の遺構と遺物</b>	<b>104</b>
1) S E 401	104
2) S X 401	106
3) S X 402	108
<b>第IV章 まとめ</b>	<b>111</b>
<b>第1節 57号墳の造出しについて</b>	<b>111</b>
<b>第2節 長原古墳群の形象埴輪</b>	<b>117</b>
<b>第3節 円筒埴輪の検討</b>	<b>123</b>
<b>あとがき</b>	<b>132</b>

# 卷頭写真

44号墳出土の武人形埴輪

## 図版目次

- 1 I区全景  
上：I区全景（東から）  
下：I区全景（西から）
- 2 44号墳と45号墳  
上：44号墳全景（西から）  
下：45号墳全景（東から）
- 3 45号墳と46号墳  
上：45号墳全景（北東から）  
下：46号墳全景（北から）
- 4 47号墳と48号墳  
上：47号墳全景（北から）  
下：48号墳全景（北西から）
- 5 49号墳と50号墳  
上：49号墳全景（北から）  
下：50号墳全景（南西から）
- 6 50号墳と51号墳  
上：50号墳全景（南から）  
下：51号墳全景（南から）
- 7 51号墳と52号墳  
上：51号墳全景（東から）  
下：52号墳全景（南から）
- 8 53号墳  
上：53号墳全景（東から）  
下：53号墳全景（南から）
- 9 54号墳  
上：54号墳全景（南東から）  
下：54号墳全景（南から）
- 10 56号墳  
上：56号墳全景（西から）  
下：56号墳全景（東から）
- 11 57号墳  
上：57号墳全景（西から）  
下：57号墳造出し遺物出土状況（西から）
- 12 57号墳  
上：57号墳造出し遺物出土状況（東から）
- 13 57号墳と58号墳  
上：57号墳造出し南側遺物出土状況  
下：58号墳全景（西から）
- 14 58号墳とNG第6A層上面検出水田畦畔  
上：58号墳円筒埴輪出土状況（北から）  
下：II区南トレンチNG第6A層上面検出水田畦畔（西から）
- 15 NG第6A層上面検出水田畦畔  
上：NG第6A層上面検出水田畦畔S R01断面  
(南から)  
下：NG第6A層上面検出水田畦畔S R02と  
50号墳（南から）
- 16 平安時代の遺構  
上：平安時代井戸E401全景（北から）  
下：平安時代火葬墓S X401全景（南から）
- 17 包含層出土遺物
- 18 44号墳出土遺物
- 19 45号墳出土須恵器
- 20 45号墳出土須恵器
- 21 45号墳出土武人形埴輪
- 22 45号墳出土形象埴輪
- 23 45号墳出土形象埴輪
- 24 45号墳出土円筒埴輪
- 25 45号墳出土朝顔形埴輪
- 26 47号墳出土土器
- 27 47・49・52号墳出土遺物
- 28 50号墳出土円筒埴輪
- 29 50号墳出土円筒・朝顔形埴輪
- 30 53号墳出土円筒・朝顔形埴輪
- 31 54・57号墳出土土器
- 32 57号墳出土須恵器
- 33 57号墳出土須恵器
- 34 57号墳出土須恵器
- 35 57号墳出土須恵器

- 36 57・58号墳出土遺物  
 37 57・58号墳出土形象・円筒埴輪  
 38 平安時代遺構出土土器

## 挿 図 目 次

1 長原地区の字名	3	35 50号墳出土土器実測図	65
2 長原・瓜破地区土地整理事業計画図	5	36 50号墳出土円筒埴輪実測図	67
3 調査地区配置図	7	37 50号墳出土円筒埴輪実測図	68
4 長原遺跡周辺遺跡分布図	12	38 50号墳出土朝顔形埴輪実測図	69
5 長原遺跡周辺の地形環境	14	39 50号墳出土土器実測図	70
6 長原遺跡の地区割と古墳分布	16	40 51号墳実測図	71
7 I~IV区古墳位置図	18	41 51号墳出土土器実測図	72
8 I~IV区地層断面実測図	25・26	42 52号墳実測図	73
9 包含層出土土遺物実測図	29	43 52号墳出土土器、円筒埴輪実測図	74
10 包含層出土石築実測図	30	44 53号墳実測図	75
11 I・II区古墳配置図	31・32	45 53号墳出土土器、円筒・朝顔形埴輪実測図	77
12 44号墳実測図	33・34	46 54号墳実測図	78
13 44号墳周辺出土土器実測図	35	47 54号墳出土土器、円筒・朝顔形埴輪実測図	80
14 44号墳出土土形象埴輪実測図	36	48 56号墳実測図	82
15 44号墳出土円筒埴輪実測図	36	49 57号墳実測図	83
16 45号墳実測図	39・40	50 57号墳出土土器実測図	85
17 45号墳出土土器実測図	41	51 57号墳出土土器実測図	87
18 45号墳出土土器実測図	43	52 57号墳出土土器実測図	89
19 45号墳出土土器実測図	44	53 57号墳出土土器実測図	90
20 45号墳出土武人形埴輪実測図（正面）	46	54 57号墳出土形象埴輪実測図	92
21 45号墳出土武人形埴輪実測図 （側面および断面）	47	55 57号墳出土円筒埴輪実測図	93
22 45号墳出土形象埴輪実測図	49	56 58号墳実測図	95
23 45号墳出土形象埴輪実測図	50	57 58号墳出土土器、円筒埴輪実測図	96
24 45号墳出土円筒埴輪実測図	51	58 II区NG第6A層出土土器実測図	97
25 45号墳出土円筒埴輪実測図	52	59 NG第6A層上面検出水田畦畔分布図	98
26 45号墳出土朝顔形埴輪実測図	54	60 II区東半NG第6A層上面検出水田畦畔実測図	101
27 45号墳出土朝顔形埴輪実測図	55	61 II・III・IV区NG第6A層上面検出水田畦畔 実測図	102
28 46号墳実測図	57	62 長原遺跡 NG第6A層上面検出水田畦畔 分布図	103
29 47号墳実測図	58	63 平安時代遺構配置図（II区）	105
30 47号墳出土土器実測図	59	64 井戸（S E 401）実測図	106
31 48号墳実測図	60	65 井戸（S E 401）出土土器実測図	107
32 49号墳実測図	61		
33 49号墳出土土器実測図	62		
34 50号墳実測図	63・64		

66 火葬墓（S X401）実測図	108	70 長原古墳群内造出し付古墳実測図	113
67 火葬墓（S X401）出土土器実測図	108	71 長原100号墳出土土器、円筒埴輪実測図 ([大阪文化センター1986]より)	124
68 土器埋納ビット（S X402）実測図	109		
69 土器埋納ビット（S X402）出土土器実測図	109		

## 表 目 次

1 遺跡名一覧表	13	6 I~IV区検出古墳および長原古墳群内 造出し付古墳一覧表	112
2 長原追跡南部の層序	22	7 形象埴輪を出土する古墳数	119
3 層序対照表	23	8 墳丘規模別の古墳数	120
4 N G第6A層上面検出水田畦畔一覧表	99	9 形象埴輪出土古墳一覧表	121
5 N G第6層下面検出溝一覧表	104	10 長原古墳群出土 外面クテハケ（小型）の 円筒埴輪	126

## 写 真 目 次

1 航空写真（都市建設局提供） 1979年11~12月	2	5 45号墳出土朝顔形埴輪（115）の 口縁部外面	53
2 造構保護のための山砂埋戻し	9	6 45号墳出土朝顔形埴輪（121）の肩部	55
3 45号墳出土武人形埴輪頭部	45	7 50号墳出土土器	66
4 45号墳出土円筒埴輪（101）のヘラ記号	53		

## 第Ⅰ章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査にいたる経緯

長原遺跡と瓜破遺跡がある大阪市平野区で区画整理事業を行うとして、都市計画決定がなされたのは、1964年のことであった。そして1975年以降に再三の計画変更を経て、1977年8月事業計画の決定・告示が行われた。

1973年、地下鉄谷町線の延伸工事に伴い、長吉長原の府道中央環状線内で埋蔵文化財の試掘調査が(財)大阪文化財センターによって実施された。結果は弥生時代と古墳時代の遺構・遺物の検出により、新しく長原遺跡が発見された。遺跡の発見により、大阪市教育委員会は大阪府教育委員会の指導により、長原遺跡調査会を設立し、地下鉄工事に伴う発掘調査に取り組んだ。その結果、弥生時代の集落跡や削平された古墳、古墳時代の水田跡などの遺構が、広範囲に存在することがわかった。そして、長原遺跡は河内平野における大規模な複合遺跡として有名になった。

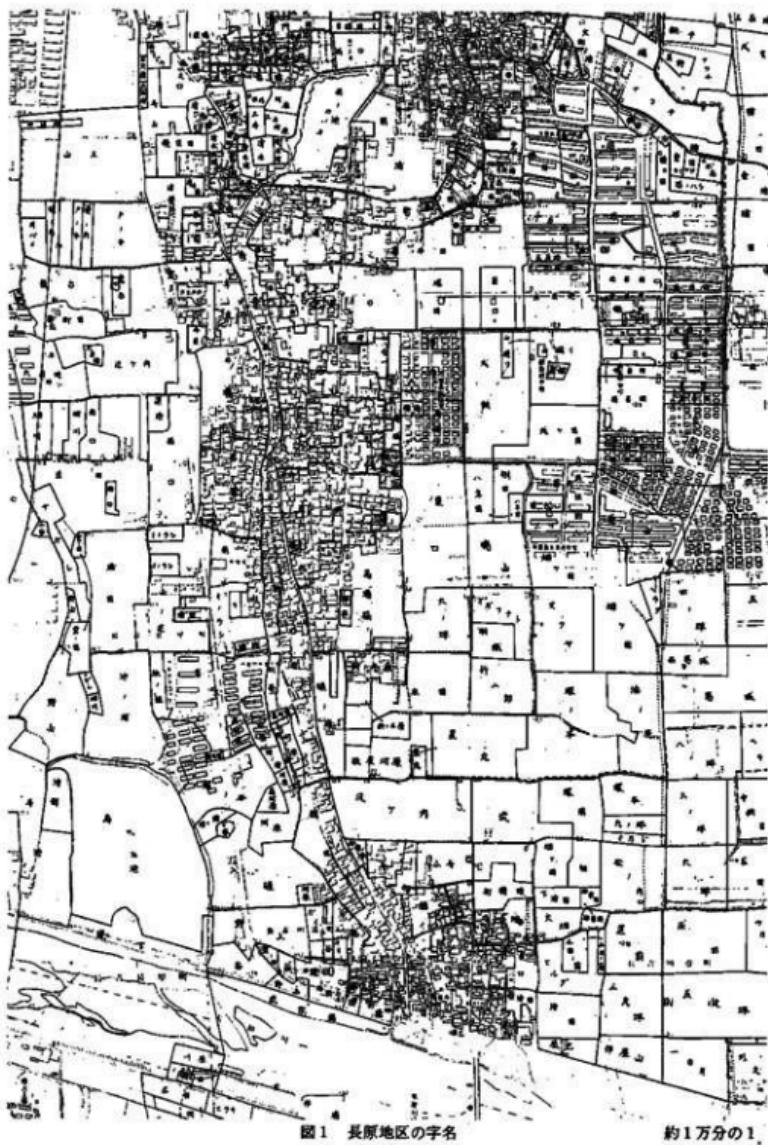
また、同地区的地上観察を行うと、水田面には条里遺構がきわめて整然と残っていることもわかった。小字名の調査を行ったところ、条里呼称の「〇の坪」の他、中世から古代にまで遡る字名も存在した。さらに削平された古墳を復原する格好の材料となる塚名のある小字名も存在することがわかつてきただ。

発掘調査は中央環状線を離れて、八尾市への線路部や検車場部分へも拡大した。一方、長原遺跡に隣接する八尾南駅の予定地においても遺跡が確認された。中央環状線上に建設が予定されている近畿自動車道の橋脚位置の調査も行われた。発掘調査は、大阪市域の地下鉄予定地を長原遺跡調査会が、八尾南駅予定地は八尾南遺跡調査会（八尾市）が、近畿自動車道は(財)大阪文化財センターが、それぞれ行った。

これらの結果、長原地域一帯の遺跡は旧石器時代から中世に至るもので、各時代それぞれに重要であることが判明してきた。区画整理事業の計画が具体化しつつあったのは、ちょうど、これらの調査によって遺跡の重要性が明らかにされつつあるのと平行していたと



写真1 航空写真（都市建設局提供）1979年11～12月



いえよう。

1977年8月18日、大阪市は区画整理事業の計画決定を行い告示した。その範囲は図2の範囲内140.4haであった。当時の写真（写真1）を見ると、区画整理対象地から除外された旧村の長吉長原と長吉川辺の地域を除くと、学校など公共施設のほか、小規模な公営住宅が目立つ程度で、広範囲に農地が存在している。

したがって、区画整理事業は「今後宅地化がますます進展する地域であり、早急な公共施設の整備が必要とされてい」と現状認識をし、「良好な生活環境の整備、安全なまちづくり、地域社会の育成を考えながら、当地区的公共施設の整備改善と環境整備のための基盤整備をはかるもの」との目的で実施するものであった（註1）。そして、対象地域140.4haの中に、都市計画道路と区画整理道路をあわせて32.7haも築造し、公園・広場等を4.75ha設ける予定になっていた。

ところが、当時の長原遺跡の範囲は長吉長原と長吉川辺の村を結ぶ大和川付替え以前の東除川の旧堤防上の道を西限とし、瓜破遺跡は北から南下する阪和貨物線をそのまま大和川の堤防へ結ぶ線を東限としていた。したがって、長原遺跡と瓜破遺跡の間に埋蔵文化財包蔵地に該当しない空白地帯が存在した。その部分を除き、すでに地下鉄・近畿自動車道で調査が終った地域を除くと、道路建設予定面積は14haの広さに相当した。

本来であれば、区画整理地域の全域を発掘調査すべきであるとの考え方もあるが、まずは区画整理の工事で遺跡が破壊される部分を調査対象とすると、道路建設の14haがその対象となる。道路は単にアスファルトで舗装し、車を通すとどまらない。その地下には下水・水道・ガス・電気・電話など埋設物が埋め込まれる予定である。道路工事は大きな掘削工事を伴い、重要な遺構・遺物が破壊されることが明らかであるためである。

そこで、大阪市教育委員会は1980年秋の土地区画整理審議会での仮換地指定の諮問と答申までに、大阪市都市再開発局（機構改革により1982年度以降、都市整備局になり、1988年度より建設局に編入）と埋蔵文化財の取扱いについて、方針を決めるべく協議を実施した。

都市再開発局と教育委員会はここでの問題以前に、1971年頃から森之宮地区の戦災復興に伴う区画整理事業との関連で、難波宮跡の周辺において遺跡の保存と発掘調査をめぐって交渉をもっていた。その経験と実績に基き、ここでの協議は比較的スムーズに進み、お互いに充分な理解のもとに協力関係が得られた。その間、埋蔵文化財について都市再開発局職員の自発的な勉強会や遺跡見学会も催された。

このような中で、具体的にどのように発掘調査に取り組むか、区画整理事業費の中で調査経費を国庫補助事業として、どう位置づけるか等の検討も行った。1979年7月には長原遺跡調査会等、大阪市の遺跡調査組織が発展した（財）大阪市文化財協会（理事長 佐治敬三）が設立されていたので、発掘調査は協会が委託をうけて実施することとした。

具体的に発掘に着手する1981年度を前に、道路部分を中心とする発掘調査の実施方法について、その前年に文化庁の指導を受け、次のような方針を得た。①発掘調査は道路予定地の全線全幅を原則とするが、既設道路もあるので、調査は可能な範囲にとどめることも

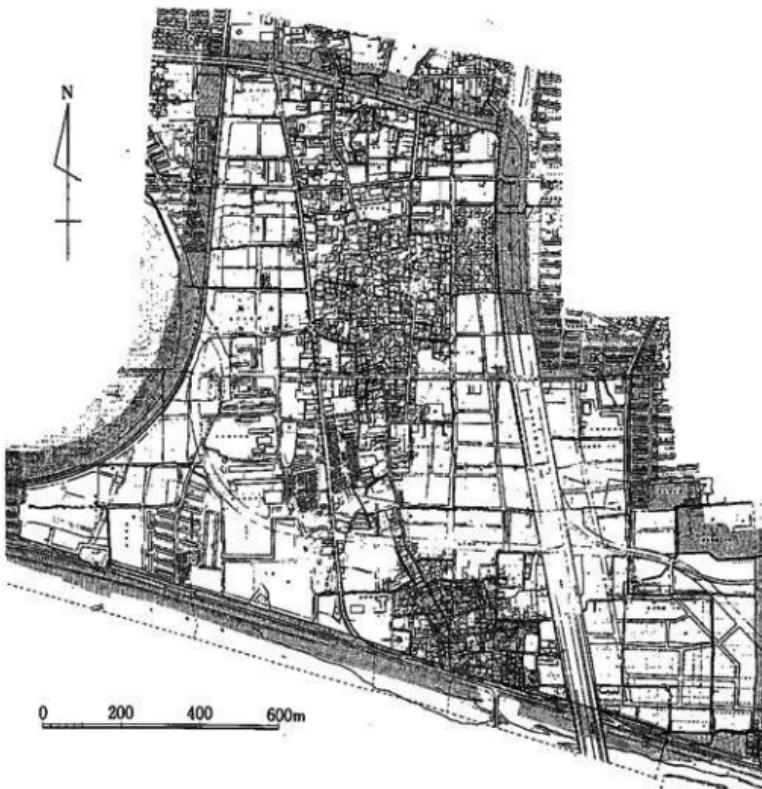


図2 長原・瓜破地区土地区画整理事業計画図

ありうる。②発掘調査によって出土した遺構は、可能な限り設計変更あるいは工法変更をして、現地保存をはかる。③発掘調査は遺構面の浅いところでは全幅で行うが、遺構が深いところでは、工事の深さが最も深い下水道の箇所を幅2~3mで実施し、重要な遺構が出土したときは必要な範囲を拡張する。

以上のような原則をもとに1981年7月より、区画整理事業に伴う第1回の発掘調査にとりかかった。

この間、実に多くの関係機関の方々の御理解と御協力があった。発掘調査にあたっても長吉瓜破区画整理事務所との関係等で、御協力いただいた方々は数限りない。また1987年度からは、従来の調査成果をまとめて報告書を作成するための費用の予算化をしていただいた。本報告書はその力添えによるものである。このことにも多大のご苦労があったと聞いている。関係者の労苦に対し深く感謝する次第である。

(長山雅一)

#### 長吉瓜破区画整理事務所の担当者名

調査当時：清水土朗（所長）、橋 漸（主幹）、藤井 茂・吉川正敏（主査）、男山倫夫  
報告書作成時：橋井啓一・木村昌彦（所長）、村上五郎（副所長）、木村陵雄（係長）、米田敏夫  
・杉原秀雄（主査）、松原洋司・西村城志

（註1）『長吉瓜破地区土地区画整理事業』（パンフレット） 1984年11月刊行

（補註）直接事業担当者として埋蔵文化財の調査との調整にあたられた、森田 弘氏（現、建設局西部方面土地区画整理事務所主査）による「土地区画整理事業施行に伴う文化財調査とその保護」【大阪市都市整備局 1985 「土地区画整理事業施行30周年記念論文集】と題する報告がある。

#### 第2節 調査の経過

本報告書に収める調査の対象となる地域は、大阪市平野区長吉川辺二丁目の北半部を東西に横切る出戸川辺線（幅員22m）の東側2/3にあたる約220mと、これに直交し北に延びる長吉3号線（幅員16m）の南端部約90m、さらにこれより西に延びる長吉2号線（幅

員12m) の東半部約100mの範囲である。

本調査は、前節に述べたように大阪市教育委員会と同市都市再開発局(当時)との協議にもとづき、以下のような方法で行うこととなった。まず、工事による掘削深度の最も深い下水道管の配管個所について、幅2mでトレチ調査を行う。これにより重要遺構の検出された場合は、道路敷内に限り調査範囲を拡張する、というものであった。

下水道管の埋設は、出戸川辺線については道路中央部に8mの間隔をあけ2本を並行に、また長吉3号線および2号線については道路中央部に単独で埋設される計画であった。

調査は出戸川辺線の東半部から開始することとなったが、同路線の東端部に建てられていた倉庫の撤去が未着手のままであったため、この個所の調査は後回しとなった。また、同路線の中央やや東よりに、駐車場として使用されていた幅15mにわたる用地が未買収のまま残されていたため、この個所は今年度の調査からは除外することとなった。

以下、記述の便宜上、出戸川辺線の東半部をI区、西半部をII区と呼称し、これより北

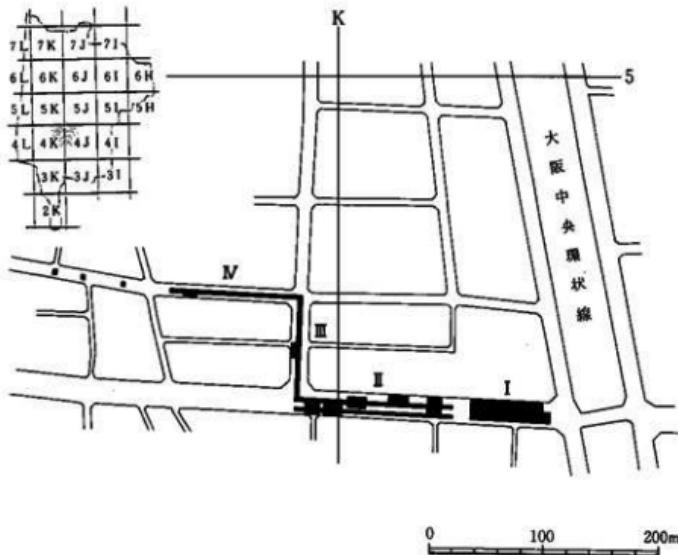


図3 調査地区配置図

に延びる長吉3号線の調査範囲をIII区、西方に延びる長吉2号線をIV区と呼称する。

以上のような経緯をふまえ、1981年7月20日よりI区について調査を開始した。

水田として利用されていた道路用地の排水・草刈を行い、調査範囲を明示した後、第1層である現代耕土の除去にかかった。同層は層厚15~20cm程度であったため重機は使用せず、すべて人力によった。

NG第1層下面、NG第2層下面、およびNG第3層下面で順次遺構検出・実測を行ったが、これらの面で検出された遺構は、耕作痕跡と思われる南北方向の素掘り小溝群のみであった。その後、8月3日よりNG第4層の掘削を開始した。数個所で古墳の墳丘が削平された痕跡が見られたため、8月12日より墳丘を検出する作業に移った。8月21日からは古墳の周溝を明らかにするため、地山上面まで掘下げる作業を開始。これと併行して、II区の調査範囲を明示した後、現代耕土の掘削を開始し、I区と同様の手順で調査を進めた。9月1日頃、I区で検出されていた古墳をほぼ検出し終える。II区の東半部では第6層の上面で水田畦畔が良好に検出された。また古墳の墳丘が数個所で確認された。

I区では5基の古墳が密集して検出されたため、市教委と市都市再開発局間で協議がもたれ、現在も生活道路として使用されている南端部を除き、道路敷全域について調査範囲を拡張することとなった。その際、トレンチ部での調査の結果、第3層下面までに検出された遺構は耕作痕跡と思われる素掘り小溝群のみであり、また出土遺物も少量であったため、同層までは重機により掘削することとしたが9月14日、重機による掘削を開始。この頃II区は全域でNG第6層の水田遺構を検出し終えた。9月26日、I区の重機掘削終了。ベルトコンベアを搬入し、残土処分を行いつつ古墳の全景を検出する作業に移る。10月17日、I区の遺構検出を終え、実測を開始する。10月25日、写真撮影。11月18日、50号墳の拡張を行う。11月20日、倉庫の撤去が完了したI区東端部の拡張を開始し、併行して、51号墳・54号墳の拡張を行う。11月22日、52・53号墳の拡張を行う。11月30日、II区で検出された古墳の実測を開始する。12月8日、III区の重機掘削を開始する。これまでの調査結果を見ても、NG第1層からNG第3層の間は特に顕著な遺構は検出されていないため、III区についてもNG第3層の下面までを重機により一度に掘削した。12月10・11日、II区の写真撮影を行う。12月12日、I区およびII区の現地説明会を行う。参加者約150名。12月15日、53・54号墳の写真撮影。12月16日、50号墳々丘の断ち割りを行う。また、I区調査地は遺構面保護の目的で、全面を山砂で覆った後埋めもどした。12月18日、III区のNG第6層上面で水田畦畔の検出を終える。12月21日、III区56号墳の拡張。12月23日、III区の

実測を終了する。12月26日、III区土層団の実測、およびI区東端部44号墳の実測終了。

1982年1月9日、IV区の調査を開始。電柱の移設を行った後、重機による掘削を行う。IV区は河川の氾濫による堆積が厚いため、この層上面までを重機により除去する。1月16日、57号墳周辺を拡張する。1月18日、58号墳の南側を拡張する。1月26日、57・58号墳の実測を開始。2月1日、57号墳の写真撮影を終える。2月4日、57号墳々丘の断ち割りを行う。2月10日、IV区の調査を終了。

(植木 久)



写真2 遺構保護のための山砂埋戻し



## 第II章 長原遺跡の立地と概要

### 第1節 長原遺跡の立地（図4・5）

長原遺跡は河内台地の北端部、「瓜破台地」と呼称される台地の東部およびその北東縁辺部にひろがる大複合遺跡である。台地の北東部はなだらかに平野部に移行し、河内平野が展開する。旧大和川は奈良盆地から生駒・葛城山系を分割して西流し、石川との合流地点から複数の流路に分かれて、放射状に河内平野を分流する。これらの流路は一定せず、時代ごとに流路を変えており、多様な地形環境を生み出している。河内平野低地部での調査成果によれば、古墳時代中期後半以後には、低地部も安定し、現地形から復原されている玉串川・長瀬川・平野川などの前身となる流路が固定化していくようだ〔亀島重則・阪田育功1984〕。

河内平野南部地域において、長原遺跡は、北を平野川・長瀬川に、南を羽曳野丘陵・河内台地によって区画された地域にあり、国府遺跡・船橋遺跡などと同様に平野を望む丘陵・台地の縁辺部に位置する遺跡群の一つと言える。また、旧大和川水系とは異なって、羽曳野丘陵からの水を集めて北に流れる流路も存在していたであろう。東除川は、大和川が付け替えられる1704年（宝永元年）まで遺跡中央部を南北に流れていることが現地形から復原されている。この位置を流れている旧東除川から供給されたとみられる堆積層は7世紀以後のものであり、その時期には河内台地の高所に位置し、台地東斜面を潤していたであろう。このことから台地東半部の水田開発を目的として、現在の松原市一津屋付近から方向を変えて、6世紀後半から末頃開削された人工的な河川であると推定されている〔木原克司1982A・B〕。古墳時代以前の古東除川については長原遺跡・瓜破遺跡を分断する開析谷（図5-A）を流れているとする考えもあるが〔木原1982A・B〕、一津屋付近から複数の小流路となって東寄りに北流し、長原遺跡の東方にその中心をおいて、平野川水系の流路と合流するルートがある、沖積層下部層が構成する凹地に埋積するNG第11～8層を供給したと考えることもできよう。こうした観点に立てば、縄文時代から古墳時代にかけ

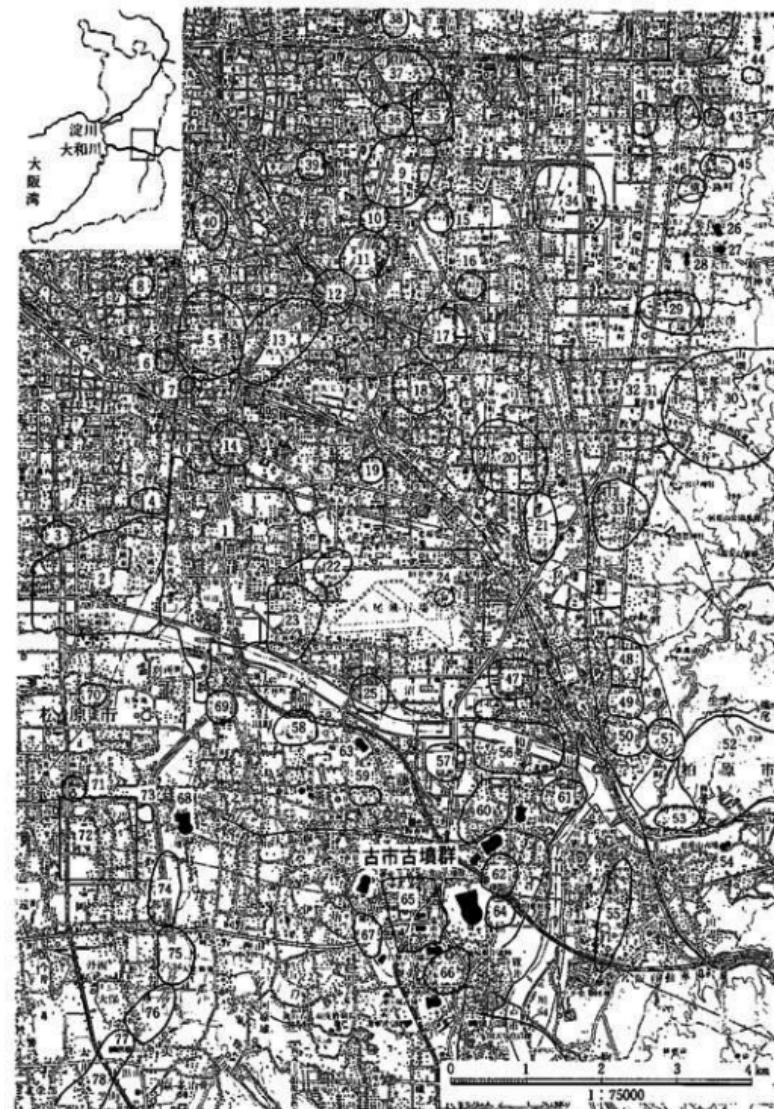


図4 長原遺跡周辺遺跡分布図

(国土地理院5万分の1図幅「大阪東南部」使用)

表1 遺跡名一覽表

けての長原遺跡は、このような分散した小流路としての古東除川によって形成された地形上に立地しているといつていいだろ。

また、瓜破台地は遺跡内での標高が最高TP +13m程度の低い高まりである。平野川・長瀬川にはさまれた加美遺跡・久宝寺遺跡の古墳時代の標高がTP +5.5~6.0mぐらい[「大阪文化財センター1987」]、長瀬川・玉串川にはさまれた善闘遺跡・山賀遺跡でTP +

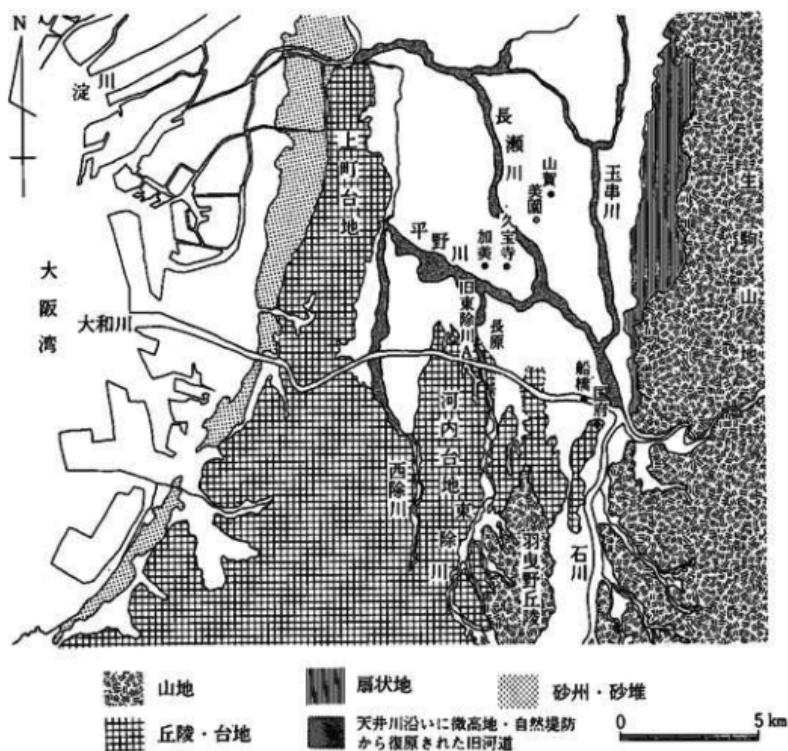


図5 長原遺跡周辺の地形環境  
(国土地理院2万5千分の1の「土地条件図」、[大文協1982]掲図2をもとに加筆。)

3.0~4.8m [大阪文化財センター1985・1986] ぐらいであるから、古墳時代において、台上地と平野低地部との比高差はせいぜい10m以内であった。しかし、上町台地北端部から河内湖 [市原実・梶山彦太郎1985] に入り、大和川水系を利用して奈良盆地に至る交通路を望む位置にあたっており、歴史的にも重要な地域であったと考えられる。

## 第2節 古墳時代長原遺跡の概要

既述のように長原遺跡は旧石器時代から中世に至るまでの複合遺跡である。概要について

ては既に〔大文協1982・1983〕において記述されており、また、今後の統刊でも再述されるであろう。第III章以下に記述しているように、本書での報告資料の大半は古墳時代のものであるため、本節では時代を古墳時代に限定して遺構・遺物を概観したい。なお、文章中に使用する地層名は長原遺跡南部の基本層序であり、これについては第III章第1節を参照していただきたい。また、地区的表記は〔大文協1983〕第1章第2節で設定された500mメッシュの地区割（図6）を使用する（註1）。

### 1. 集落の変遷（図6）

平野川に近い5・6 I区、5 J区東部、6・7 J区、7 K区の地域はNG第8層をベースにして、その上に当時の表土層と思われるNG第7層が堆積している。古墳時代の生活面はNG第7層であり、標高はTP + 8m以下である。上記の地区における調査ではNG第7層およびその下面で畿内第IV様式から初期須恵器・韓式系土器がみられるようになる古墳時代前半期までの遺構・遺物が出土しており、その間、集落が営まれていたと思われる。したがって、弥生時代中期後葉から古墳時代にかけて生活面の高さはそれほど大きく変化していないことがわかる。また、この地区的西方では後述する1・40・85号墳が築造され、須恵器が現れる頃に小型方墳の造営が始まる。一方、3・4・5 J区の西部、4・5・6 K区、4・5・6 L区はNG第13層をベースとし、その上にNG第7層が堆積している。標高はTP + 8~12mである。この地域では古墳時代前期以前の遺構・遺物はほとんど出土しておらず、その時期には安定した地形環境でありながら、居住に適していない地域と認識されていたことがわかる。この地域が開発されるのは5世紀後半である。瓜破遺跡と隣接する台地上にあたる5・6 K区西部、5・6 L区に居住域が開かれ、そこから北および東の沖積平野部に向けて、緩やかに傾斜していく平坦面に小型方墳が次々とつくれられるようになる（6 K・L区以北、4・5 J区西半部、4K区）。これと対照的に、前述の居住域は5世紀末頃からほとんど遺構・遺物が認められなくなる（註2）。

台地上に開かれた集落は6世紀後半まで営まれていたようであるが、長原遺跡のほぼ全体が水田化される7世紀以後の集落は4 I区、5 J区、7 L区で断片的に認められるものの、5・6世紀代の集落のようにまとまりあるものはない。だが、瓜破遺跡南東部にあたる台地上の4 M区では、7世紀前半から後半にかけての豪族の居館と思われる建物群が検出されており、長原遺跡における水田の開発・経営に主導的役割を果たしていたと推定されている〔南秀雄1987〕。

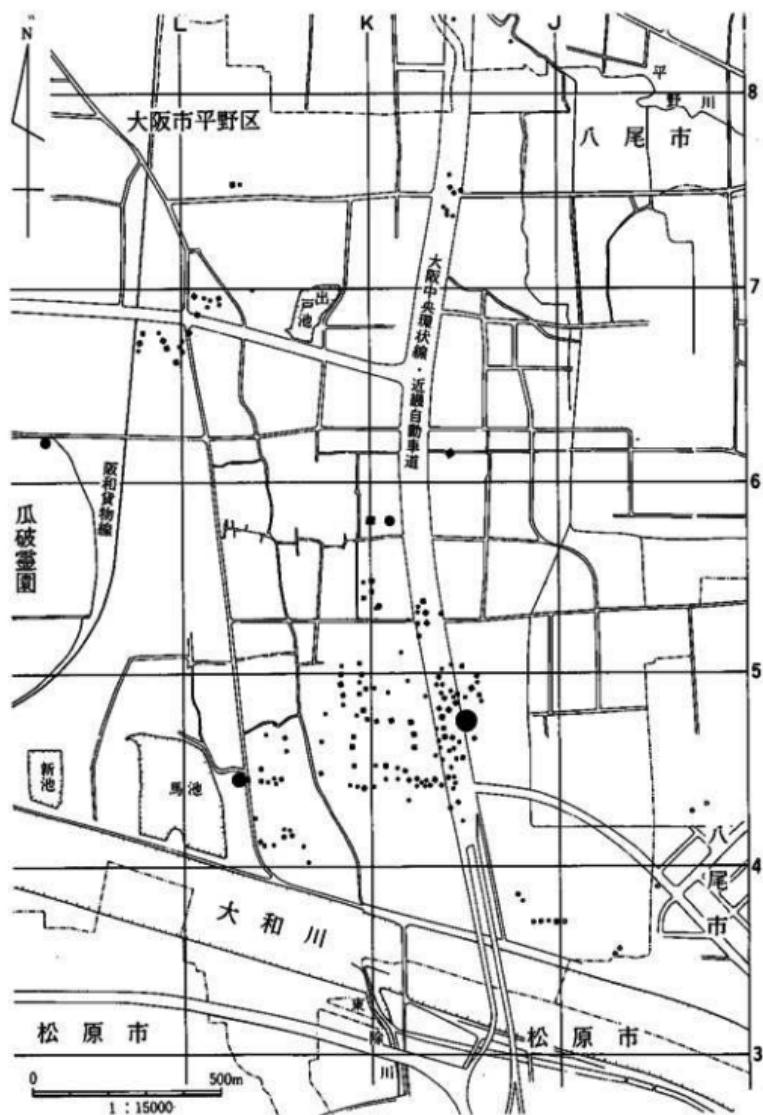


図6 長原遺跡の地区割と古墳分布

## 2. 長原古墳群の概要（図6・7）

長原古墳群は出土する埴輪・須恵器の編年観に基づき、3時期に区分して理解している〔京嶋覚1982〕。本節ではこの時期区分を使用し、最近の新資料を付加して、各時期の古墳群の特徴を概述したい（註3）。

長原遺跡における古墳群の形成は1号墳（塚ノ本古墳）の築造をもって始まった。この古墳は直径約55mと推定される円墳と思われ（註4）、黒斑を有する埴輪（註5）を出土している〔長原遺跡調査会1978〕。1号墳のように古墳から出土する埴輪に黒斑があり、須恵器を出土しない時期を1期としている。1号墳以外に全長45mと推定される帆立貝形古墳の85号墳（一ヶ塚古墳）〔積山洋1983〕、一辺の長さが20m以上の方墳と推定されている40号墳がある（註6）。1号墳は4J区北部、85号墳は4K区西部、40号墳は6J区南部とそれぞれ独立した立地を示している。

出土遺物に須恵器が含まれ、埴輪も窯窓焼成によるものになる2・3期には大型の古墳はつくられなくなり、小型方墳が群集してつくられるようになる。1986年現在までに、遺跡内で発見された168基の古墳のうち大半が小型方墳である。これらは3I・3J区、4J・5J・4K・5K区、6K・6L区、7J区の4地区に分布し、特に遺跡南部にあたる4・5J・K区に全体の9割が集中している。小型方墳の多くは埴輪を持ち、しかも10m前後の小古墳でありながら多様な形象埴輪をもっているものも少なくない〔桜井久之1987〕。副葬品が判明しているものでは耳環・鉄刀・鉄劍・鐵鎌・鍔留短甲・U字形鋤（鍔）先・鉄鎌・手鎌など鉄製品が中心である。小型方墳の群集墳的な造営は6世紀初頭まで続く。

1985年、5J区で発見された130号墳（七ノ坪古墳）は長原古墳群中唯一の横穴式石室を持つ前方後円墳で、全長24.4mを測る〔高井健司1986・1987〕。石室内には鉄刀・鉄劍・鉄鉢・馬具一式・玉・須恵器が副葬されていた。須恵器は6世紀前半の特徴をもっており、横穴式石室の出現と群集墳的な群形成の終焉をもって、この古墳以後を4期といつておきたい。130号墳の北に40m程離れて一辺約10mの方墳153号墳があり、6世紀後半の土器を出土している。今のところこの古墳が最も新しいもので、4期は6世紀前半から後半にかけての時期ということになる。既述のように、5世紀後半以後に遺跡西部に展開する集落の衰退期は6世紀後半と考えられ、古墳群の終焉期と一致するようだ。

本書で報告する調査地は4J・K区にまたがっており、4・5J・K区に密集する百数十基からなる古墳群内を東西に横断する位置にある。後述する15基の方墳は前記の古墳分布域のほぼ中央南部に立地するものである。

（京嶋 覚）

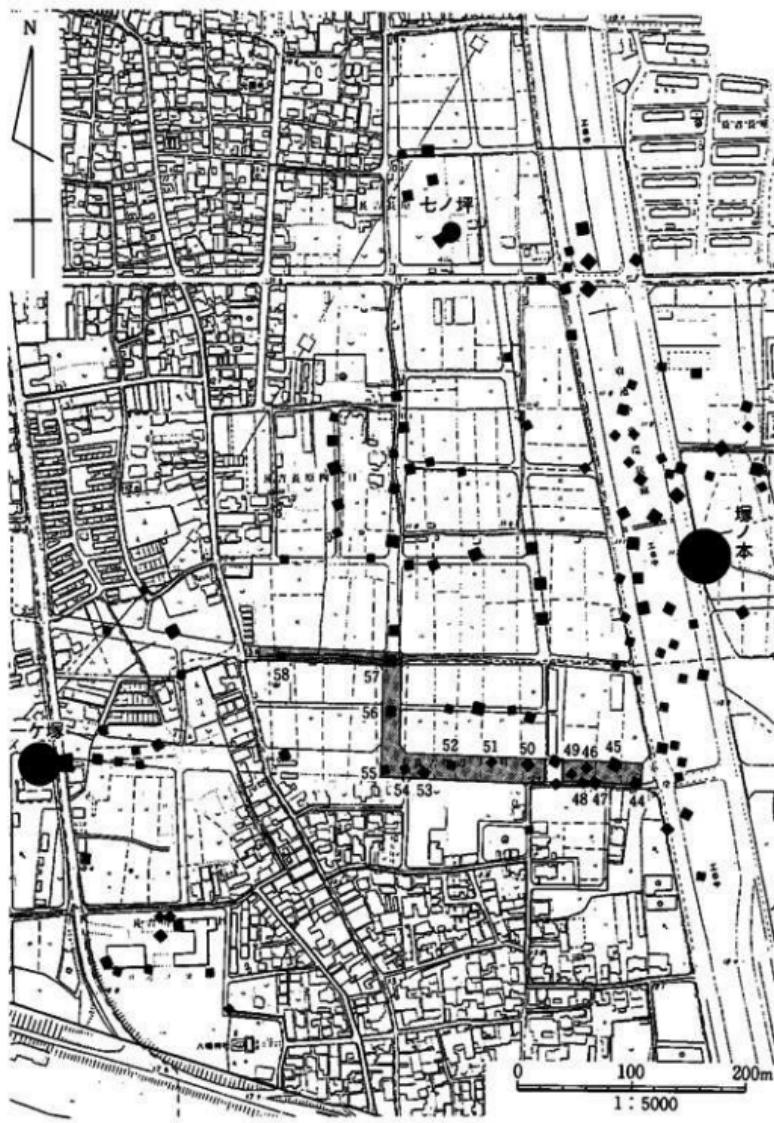


図7 1~IV区古墳位置図

(アミ部分が調査地)

(註)

- (1) 「長原報告Ⅲ」ではこの区画をさらに10分割して小区画を設定することを提起している。現在、各調査データをコンピュータ入力中であり、各調査の所属地区についても入力準備中であるため、今回は大地区表記にとどめ、統刊の報告書で補いたい。
- (2) 5世紀後半に集落を移動する例は八尾市美園遺跡や高石市大園遺跡でも見られ、5世紀後半～末頃に自然環境や社会環境になんらかの変化が生じたことが窺われる。遺跡北東部が5世紀後半以後どうなったのかが問題となるが、調査例が少ない地域であるだけに手がかりはいまのところない。
- (3) 長原古墳群の時期区分についてはこの他に【藤沢真依1978】、【田中清美1985】、【長山雅一1988】で試みられている。
- (4) 発見当初は墳丘西部のみが調査され、墳丘東側の地割りの乱れから前方後円墳と推定されたが、その後、周辺の調査が進み、後円部に匹敵する規模の前方部は存在しないことが明らかになった。造出し程度の施設が付設されている可能性はあるが、現状では円墳と考えるべきであろう。
- (5) 【川西安幸1978】では原ノ本古墳の埴輪をⅡ期としている(P.160)。
- (6) 40号墳の南70mに「落塚」の小字名があり、40号墳を「落塚古墳」と呼ぶことがあるが、40号墳の推定される規模からみてこれを「落塚古墳」の一部とみるべきではない。40号墳は小字「山廻り」に位置しており、しいていえば「山廻り古墳」というべきであろう。なお、『中河内都誌』によれば、小字「落塚」には高さ2間(約3.6m)、面積2畝7歩(約223.1m<sup>2</sup>、直徑約17m)の「城山」と呼ばれる円形の墳墓があったことが記されている【川口泰子1978】。この付近で船形埴輪の可能性がある埴輪片が探集されていることからも古墳の可能性が強いが、未調査のため確定できていない。

#### 参考文献

- ・市原 真・堀山恭太郎1985、古文物学研究会『續大阪平野発達史』
- ・大阪市文化財協会1982、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ  
1983、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ  
1984、『発掘された大阪』
- ・大阪文化財センター1985、『美園』  
1986、『山賀』その5・6  
1987、『久宝寺南』
- ・龟島重則・阪田育功1984、「河内平野開発の過程」：大阪文化財センター『友井東』その1
- ・川口泰子1978、「地図から見た長原遺跡の復原」：長原遺跡調査会『長原遺跡発掘調査報告』
- ・川西安幸1978、「円筒埴輪論述」：『考古学雑誌』第64巻第2号
- ・木原克司1982A、「長原遺跡の水田址をめぐる諸問題」：大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ  
1982B、「微地形復原の方法と課題」：『歴史地理学』第118号
- ・京崎 覚1982、「長原遺跡古墳群～まとめにかえて～」：大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- ・桜井久之1987、「埴輪と中・小規模古墳」：『季刊考古学』第20号
- ・松山 洋1983、「長吉瓜破地区土地区画整理事業に伴う長原遺跡発掘調査(N.G.82-27)速報」：『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第8回)資料』
- ・高井健司1986、「長原七ノ坪古墳とその馬具」：『薪火』創刊号

## 第二章 長原遺跡の立地と概要

- 1987、「城下マンション（仮称）建設工事に伴う長原遺跡発掘調査（NG85-23）略報」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- ・田中清美1985、「長原古墳群」：古市古墳群研究会編『古市古墳群とその周辺』
  - ・長原遺跡調査会1978、「長原遺跡発掘調査報告」
  - ・吳山雅一1988、「長原古墳群の性格について」：重木孝次郎先生古稀記念会『古代史論集』上
  - ・藤沢真依1978、「（一）古墳」：大阪文化財センター『長原』
  - ・南 秀雄1987、「瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群」：『葦火』8号

## 第III章 調査の結果

### 第1節 調査地の基本層序と遺物

調査個所は長原遺跡の南部に位置しており、調査当時の地表面の標高はTP+11.4~12.0mで西方のIV区から東方のI区にかけてわずかに傾斜した水田地帯であった。当該地も都市整備事業が進んで景観が大きく変わり、現在の地表面の標高はTP+11m前後を測り、ほぼ平坦な面をなしている。長原遺跡の基本層序についてはこれまでに〔大文協1982〕および〔大文協1983〕で報告されている。その後も長原遺跡では南部を中心に層位学的な資料が蓄積され、点から面へと各地層の広がりが追求されているが、現時点においては特に大きな変更や問題は生じていない(表2)。なお、1985年に調査個所の北方部において6世紀初頭の七ノ坪古墳の墳丘下より火山灰層が発見されたが、調査当時は火山灰については認識されておらず、当時長原地山と仮称していたNG第13層(灰白色~黄白色粘質シルト)以下については、II区の一部で旧石器確認のトレンチ調査を行ったのみで、火山灰についての情報は全く収集できなかった(註1)。ここではI~IV区の基本層序について、長原遺跡南部沖積層下部層(基本層序: NG第15層からNG第13層)および同沖積層上部層(同: NG第12層からNG第0層)〔大文協1983〕・〔趙哲済・田中清美・高井健司1987〕に対照しながら上位より順をおって述べることにする。

#### 1) 長原遺跡南部沖積層上層部(図8)

第1層: 黒色砂礫混りシルトは当地域の現代の水田耕作土である。上面の標高はTP+11.4~12.0m前後あり、調査地域の南西部から北東部に向かってわずかに傾斜して下っていく。近現代の陶磁器および瓦の細片を含む。なお、I区東端およびII区西端で検出された南北方向の現代の用水路は、下層の第2b層が堆積する江戸時代の坪境溝と位置がほぼ一致している。NG第1層に対比される。

第2層: 現代の水田の床土面を形成する第2a層(黄褐色シルト混じり砂礫)と水成層の第2b層(暗灰色砂礫混じり細粒砂)に二分され、層厚は前者が20cm前後、後者が20~30cmを

### 第三章 調査の概要

層序	地状様	層	厚	標高 (cm)	自然造物場	おもな遺構・遺物	C-14 x B.P.	時代
第 0 層	現代底土		—					現代
第 1 層	現代耕土		15~25					近代
第 2 層	灰褐色~褐色色・含鉄砂		8~24			日本製陶器 ↓小箱群・取扱		古代
第 3 層	赤褐色色・含鉄砂・シルト質粘土		12~20			瓦器・瓦質土器・陶器器 ↓小箱群・取扱・品島		近世
層	第 4 A 層	合鐵砂含砂粘土	8~15					中世
	第 I	暗褐色 砂質沙	約 20			黒色土器 瓦器	—水田面	中世
	4	砂質シルト	約 5			陶器器 土器器	↓小箱群・取扱 —水田面	中世
	B	合鐵砂 灰褐色	約 15			瓦器	—	中世
	総 II	(10~45)	砂質シルト	約 20		土器器	↓小箱群・取扱 —水田面	中世
	I	砂質シルト	約 20			瓦器	—水田面	中世
	総 III	にがい・褐色 シルト質沙	約 20			土器器	↓獨立柱跡物	中世
	第 5 A 層	砂・鐵	10~40			—	—	平安
	第 5 B 層	シルト質粘土砂層	2~8			—	—	平安
	第 6 A 层	暗褐色沙・粘土質シルト	約 20		タニシ	—	—	平安
層	第 6 B 層	中粒・細粒沙	約 5			—	—	平安
	I	褐色色・暗灰色 合沙・シルト質粘土	約 15		タニシ	—水田面	土器器・瓦器器	平安
	II	青褐色・泥質粘土	約 5			—	—	平安
	III	青褐色・泥質粘土	約 15			—	—	平安
	第 7 A 層	褐色色合沙シルト質粘土	約 15			—	—	平安
	7	暗褐色沙・粘土質粘土	約 15			—	—	平安
	第 7 B 層	褐色色沙・粘土質粘土	約 15			—	—	平安
	第 8 A 層	砂・鐵	約 40			—	—	平安
	第 8 B 層	暗褐色色シルト質粘土	約 10			—	—	平安
	第 8 C 層	シルト質粘土・砂	約 50			—	—	平安
層	第 9 A 层	灰色シルト・質粘土	約 10		一乾燥	—	—	室町中期
	第 9 A 层	褐色色シルト質粘土	約 15			—	—	室町中期
	第 9 B 层	粘土質粘土・土	約 40		一乾燥	—	—	室町中期
	第 9 C 层	深紫色 合沙・鐵・シルト質粘土	約 20		一乾燥	—	—	室町中期
	第 10 层	鐵質沙・砂質粘土・シルト	約 80		一乾燥	—	—	室町中期
	第 11 层	シルト質粘土	約 15		一乾燥	—	—	室町中期
	第 12 A 层	黑褐色色質粘土・シルト	約 15			—	中朝 ? 前秦 石器	中朝 ? 前秦 石器
	12	暗灰色細粒砂質シルト	約 20		一乾燥?	—	—	中朝 ? 前秦 石器
	第 12 B 层	暗褐色色質粘土・暗灰色 火成岩質粘土	約 10		—	六山城跡	—	中朝 ? 前秦 石器
	第 12 C 层	暗褐色色火成岩質シルト —砂糖	約 15		—	土器	繩文刀・石器	中朝 ? 前秦 石器
下	第 13 A 层	乳白・褐色シルト	約 10		—	—	石器附作所・ナイフ形石器・鋸片・石錐	縄文中期
	13 B 层	暗褐色色火成岩質粘土	約 10		—	—	鋸片・石錐	縄文中期
	第 13 C 层	暗褐色色火成岩質シルト —砂糖	12		—	大山城跡	—	後期
天	第 14 层	(暗青) 黃褐色 シルト質粘土	約 20		—	—	—	組石
	第 15 层	青褐色・合沙・鐵 粘土ーアーチー質砂	約 100		—不整合?	—	—	組石
底	底後丘地出露	褐灰色 砂質粘土・砂・粘土互層	約 200		—	—	—	—
					—	—	—	—

表2 長原遺跡南部の層序（〔越ほか 1987〕に一部加筆・訂正）

長原遺跡南部の層序(1987)		I ~ IV 区 基本層序	
長 原 遺 跡 南 部	第 0 層		
	第 1 層	黒褐色砂礫混じりシルト	第 1 層
	第 2 層	黄褐色シルト混じり砂礫	第 2 a・b 層
	第 3 层	黄褐色砂礫	第 2 b 層
	第 4 A 層	淡灰色砂礫混じりシルト	第 3 層
	I	黄褐色細粒砂	
	第 4 B 層	黄褐色砂礫混じりシルト	第 4 層
	II		
	I	茶褐色砂質シルト	
	第 5 A 層	黄褐色砂礫	第 5 層
	第 5 B 層	黄褐色シルト混じり細粒砂	
	I	灰色シルト質粘土	第 6 A 層
	II		
	第 6 B 層	綠灰色極細粒砂	第 6 B 層
	I	極細粒砂質シルト	
東 横 層 上 部 層	第 7 A 層	黒褐色粘土	第 7 A 層
	第 7 B 層	黑色シルト質粘土	第 7 B 層
	第 8 A 層		
	第 8 B 層		
	第 8 C 層		
	第 9 A' 層		
	第 9 A 层		
	第 9 B 层		
	第 9 C 层		
	第 10 层		
中部層	第 11 层		
	第 12 A 层		
	第 12 B 层		
	下部層		
天 然 層	第 13 A 层	灰白~黃白色粘質シルト	第 8 层
	第 13 B 层		
	第 13 C 层		
天 然 層	第 14 层		
	第 15 层		
低位段丘層相当層			

表3 層序対照表

測る。本層はII区西部からIII区にかけて層厚がやや厚くなり、III・IV区で検出された南北方向の坪境溝および流路の周辺では、第2b層(暗灰~黄褐色砂礫混じり細粒砂・砂礫)が厚さ80cm以上堆積していた。第2a・b層ともごく少量の鎌倉~室町時代の土師器や瓦器をはじめ、江戸時代の陶磁器・瓦の細片を含む。I・II区で第2a層の上面から耕作に伴う鉄あるいは鋤溝群が認められたほか、IV区では第2a層の下面より灌溉用とみられる野井戸が検出されている。NG第2層に対比される。

第3層: 淡灰褐色~淡茶灰色砂礫混じりシルトは層厚が10~20cmあり、鎌倉~室町時代の土師器・瓦器片などを含む。本層はII区以西では残りが悪く、I・II区の一部で、畦畔状の高まりや耕作痕跡が認められたのみである。上面の標高はTP+11.3m前後あり、ほぼ平坦な面をなす。室町時代以後の水田耕土層と思われる。NG第3層に対比される。

第4層: 黄褐色細粒砂および黄褐色砂礫混じりシルト・茶褐色砂質シルトなどから構成されており、層厚は10~30cmある。平安時代の土師器・黒色土器をはじめ、須恵器片を含む。本層の上面の標高はIII~IV区がTP

+11.3m前後で、II区西部からI区東部がTP+10.9~11.2mあり、調査個所の西部から東部にかけて徐々に低くなっている。今回の調査では、断面観察によってII~III区で茶褐色砂質シルトをベースとする水田跡が認められたほか、II区西部で下面から平安時代の土器埋納ビットや火葬墓かと思われる遺構が検出された。また第4層の直下より検出された15基の方墳は、当地区でも平安時代頃に水田や畑の開発に伴って古墳が破壊されたことを示している。NG第4層に対比される。

第5層：橙色シルト・黄橙色砂礫および黄褐色シルト混じり細粒砂・緑灰色極細粒砂などから構成されており、層厚は20~50cmを測る。本層は砂礫が主体の水成層であり、各所で砂粒やシルトのラミナが観察された。上面の標高はIV区がTP+11.5m前後で、I~III区がTP+10.7~11.2mあり、調査個所の西南部から北東部にかけて徐々に傾斜しながら広範囲に堆積している。古墳時代のローリングを受けた須恵器・埴輪をはじめ、奈良時代の須恵器・土師器などを含む。なお、第5層は古東除川の河道に近いIV区の西部に位置する南北方向の流路の周辺では厚さ80cm以上を測った。これは、IV区付近が第5層を運んだ洪水の中に近かったことを裏付けるものと思われる。NG第5層に対比される。

第6層：褐灰色あるいは灰色シルト質粘土および緑灰色極細粒砂・極細粒砂質シルトに細分され、前者がNG第6A層に、後者はNG第6B層に対比される。

第6A層は調査個所のほぼ全域に広がっており、II区以西のほぼ全域にわたって畦畔や溝・足跡などが検出された。本層上面の標高はTP+10.4~11mあり、古墳時代の須恵器・埴輪のほか、ごく少量の6~7世紀代の須恵器を含む。7~8世紀頃の水田耕土であろう。

第6B層は古墳の周溝内およびI・IV区の東部で確認されており、極細粒砂のラミナが顕著にみられるところから水成層と思われる。なお、IV区東部では第6B層に覆われたNG第7A層に対比される灰色ないし暗灰色粘土が分布しており、水田跡が存在した可能性がある。

第7層：黒~黒褐色粘土および黒紫色粘質シルトからなり、層厚は10cm前後ある。本層はこれまでに、水田耕土層であるNG第7A層と古墳時代以前の生活面を形成するNG第7B層に細分されているが、本調査では、両層の区分は古墳およびIV区の東部以外は明らかにできなかった。第7層上面の標高はTP+10.2~10.9m前後あり、調査個所の南西から北東にかけて徐々に傾斜している。上部から古墳時代の須恵器が出土したほか、I区の45号墳の周辺では縄文時代晚期および弥生時代に属する石器が出土した。なお、今回検出した古墳は全てNG第7B層をベースにして墳丘を築成しており、墳丘の断面観察を行った50・51・57号墳では盛土の直下に、古墳時代の旧地表とみられる有機物を含む黒色シルト

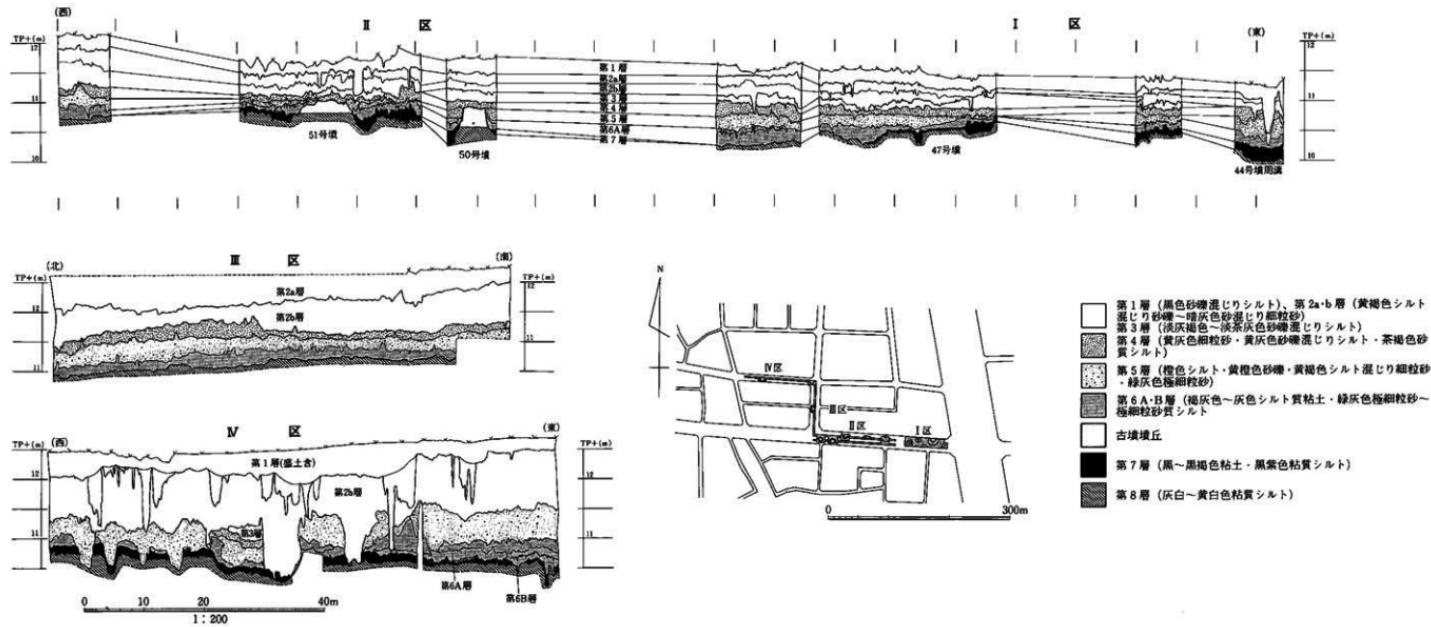


図8 I~IV区地層断面実測図

質粘土が認められた。

## 2) 長原遺跡南部沖積層下層部

第8層：灰白～黃白色粘質シルトで、上面の標高はTP+10.4～10.8mあり、調査箇所の南西から北東にかけてわずかに傾斜して下っていく。層厚は10cm前後あり、NG第13A層に対比される。本層の上面では、I・II・IV区において、南北方向の浅い流路状の落込みが検出されたが、遺構としては認定できなかった。また、遺物もI区の南西部から旧石器かとみられるサヌカイトフレークが2点出土したのみである。

次に各地層から出土した主な遺物について上層から順を追って述べる。

## 3) 遺物

### 第4層出土遺物（図9、図版17-下）

**土師器皿（1～16）** 土師器皿は口径8.8～9.8cm、器高1.5cm前後の1～4と口径13～14cm、器高2～2.7cmを測る5・6の大小に二分される。口縁部の形態は1・5・7が体部から水平に開き、2・6は体部から短く外反する。ともに口縁部をヨコナデ調整しており、底部の中央が上げ底状に凹む3以外は、扁平にユビオサエで整えている。ほかに口径12cm、器高2.3cmで、断面三角形の高台をもつ4がある。浅い体部から短くのびる口縁端部を丸くおさめており、底部のほぼ中央に焼成後に径約5mmの小孔を穿っている。

以上の土師器皿の色調は灰白色を基調とし、焼成は良好で、胎土中には石英・長石・金雲母・角閃石粒を含む。

**黒色土器椀（7・8）** 体部上半を欠損しているが、高台径6.5～8.5cmを測る黒色土器椀の底部である。ともに、両黒B類に属するものであり、高台の形状は7が断面三角形で、8はやや丸みをもつ長方形を呈する。焼成は良く、胎土中に石英・長石・角閃石粒を含む。

**土師器甌（9～11）** 口径19～19.5cmで、丸みをもつ体部の外面をユビナデによって整えており、口縁部が直立あるいはくの字状に外反する甌である。9・11は口縁端部をかるく面取り、10は丸くおさめている。色調は9・10がにぶい黄褐色で、11は灰白色を呈し、焼成は良く、胎土中に石英・長石・チャート・角閃石粒を含む。

**土師器高杯（13）** 八角形に面取りした高杯の脚部片で、内面をヘラ状用具で粗く抉り取る。色調は茶褐色を呈し、焼成は良く、胎土は金雲母を含み緻密である。

**須恵器甌（12）** 底部径約17cmの平底の甌で、体部の器面調整は外面が粗いヨコナデ、内面は縦方向の粗いユビナデで仕上げる。色調は灰白色を呈し、焼成は良く、胎土中に黑色粒・長石粒を少量含む。

以上の土器は土師器皿や黒色土器碗などからみて平安時代中期（10世紀後葉前後）に属するものと考えられる。

#### 第5層出土遺物（図9）

須恵器（14～16） 14は底径約12.7cmの高台を有する杯身で、15・16は口径12cm前後の口縁部の立ち上がりがやや内傾する杯身である。色調は灰白色を呈し、焼成は良く、胎土中にごく少量の長石粒を含む。14は平安時代、15・16は古墳時代後期の須恵器と思われる。

#### 第7層出土遺物（図9・10、図版17）

円筒埴輪（17～20） 17・20は円筒埴輪の口縁部、18・19は体部片である。器面の調整はいずれも外面が一次調整のやや粗いタテハケの後、二次調整として断続的なB種ヨコハケを施す。内面は一次調整のタテハケのみの19、タテハケの後に二次調整のユビナデを施す17・18・20などがある。

タガの形態は18・19ともに断面台形状を呈するが、突出度はやや低い。これらの色調は赤褐色ないし黄橙色を呈し、焼成は窯窓によっており、胎土中に石英・長石・金雲母粒を多く含む。なお、18・20の外面にはヘラ記号あるいは絵画の一部が認められるほか、18の器面にはペンガラが塗布されている。

朝顔形埴輪（21） 二段に開く口縁部片である。器面調整は内外面ともに一次調整のやや粗いタテハケの後、二次調整の斜め上方のハケを施す。口縁部下端の接合部をめぐるタガは断面台形状を呈し、端面に強いユビナデを加えている。色調・焼成・胎土は円筒埴輪と変わらない。

形象埴輪（22） 切妻の家形埴輪の破風の一部である。器表面を細いハケで整えているが、屋根および棟の上端には特に線刻などによる表現はない。色調は淡い黄色を呈し、焼成・胎土は上述した円筒埴輪と同じである。

#### 石鎧（23～26）

23は脚部を欠損するが、長さ2.79cm、幅1.56cm、厚さ0.46cmの石鎧である。裏面に素材の主要剥離面が残るが、身部の外縁は直線的で、尖端および身部を細かい押圧剥離によって整えている。

24は長さ4.31cm、幅2.2cm、厚さ0.45cmで、身部の形態が二等辺三角形を呈し、基部が大きく凹む凹基無基式の石鎧である。裏面には素材の主要剥離面が残るが、両外縁および基部を細かい押圧剥離によって仕上げており、身部表面の中央部に明瞭な鎧が通る。

25は長さ1.98cm、幅1.46cm、厚さ0.43cmで、身部の外縁がほぼ直線的にのびる凹基無形

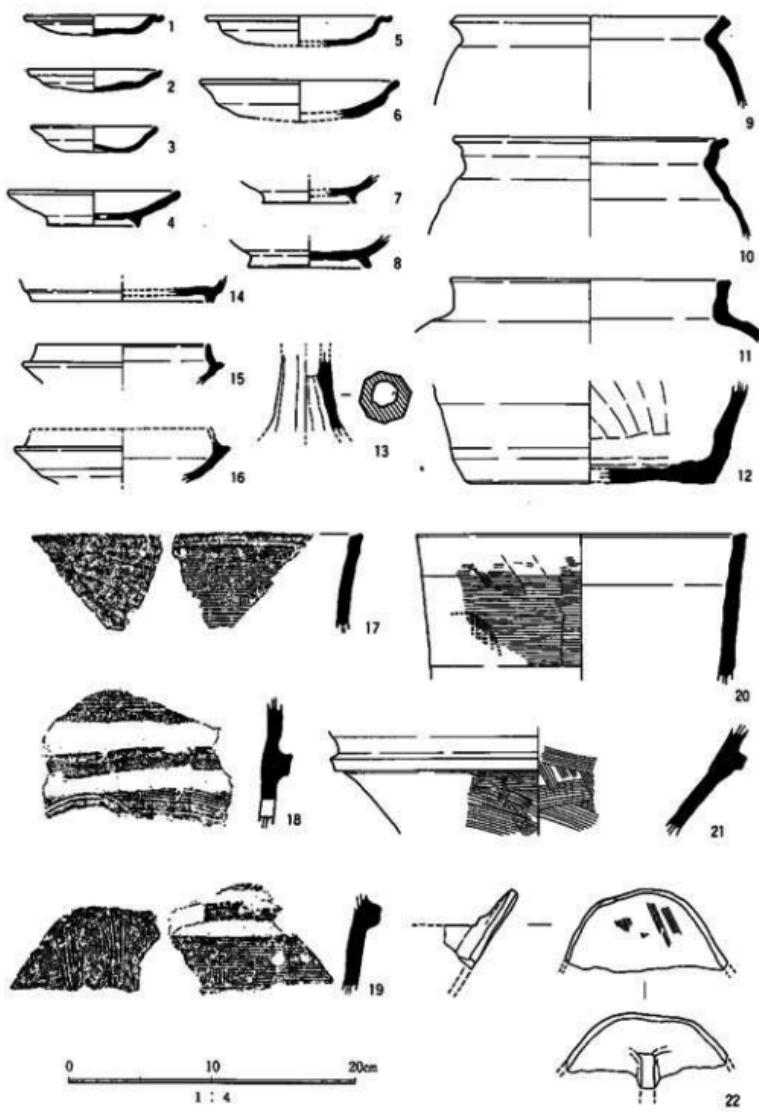


図9 包含層出土遺物実測図  
第4層(1~13)、第5層(14~16)、第7層(17~22)

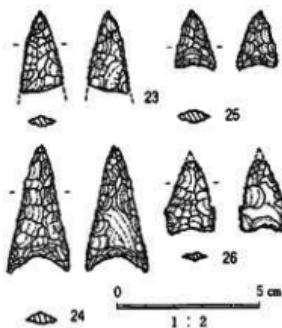


図10 包含層出土石器実測図  
第7層 (23~26)

式の石鎌である。身部の表裏面および外縁部を押圧剝離によって整えており、尖端は鋭い。

26は尖端を欠損するが、長さ2.45cm、幅1.75cm、厚さ0.32cmで、身部の中程にやや不明瞭な段が認められる。全体に扁平で薄く、身部の裏面には素材の主要剝離面が残り、外縁部はやや粗い押圧剝離によって仕上げている。

以上の石鎌は古墳時代の須恵器や埴輪に混入した状態で出土しており、時期については断定しがたいが、五角形を呈し、小型で全体に細部調整された25は縄文時代晩期に、大型で身部裏

面に素材の主要剝離面を残す23・24は弥生時代に属する石鎌と思われる。

(田中清美)

#### （註）

- （1）現在長原遺跡では南部地域を中心に3層準の火山灰層が確認されており、下位より、長原Ⅲ火山灰層・長原Ⅱ火山灰層・長原Ⅰ火山灰層と呼び、その噴出火山や起源についての調査が行われている。  
趙哲済ほか1987「大阪市長原遺跡の地層と火山灰層について」『－第22回埋蔵文化財研究集会－火山灰と考古学をめぐる諸問題－』埋蔵文化財研究会鹿児島集会実行委員会

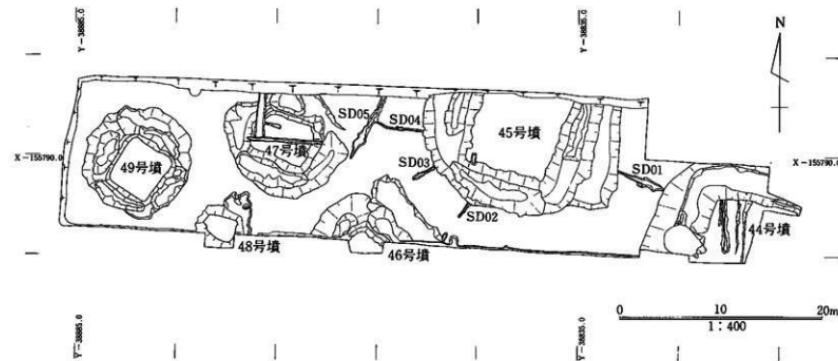
## 第2節 古墳時代の遺構と遺物

### 1) 44号墳

#### 遺構（図11・12、図版2一上）

I区東端部で検出された。当年度の調査では、西北部のみの検出に終わったが、83年度に墳丘東半部についてもトレンチでの調査を行っており、両調査を組合することにより東西方向の規模はおおむね知ることができる。これによれば、墳丘東西幅は基底部で11.8m、周溝も含めると21.6mとなる（図12）。南半部が調査範囲外に広がるため南北幅については明確でない。周溝の幅は墳丘西側で5.0m程度である。北側周溝については、中央部で

I区古墳配置図



II区古墳配置図

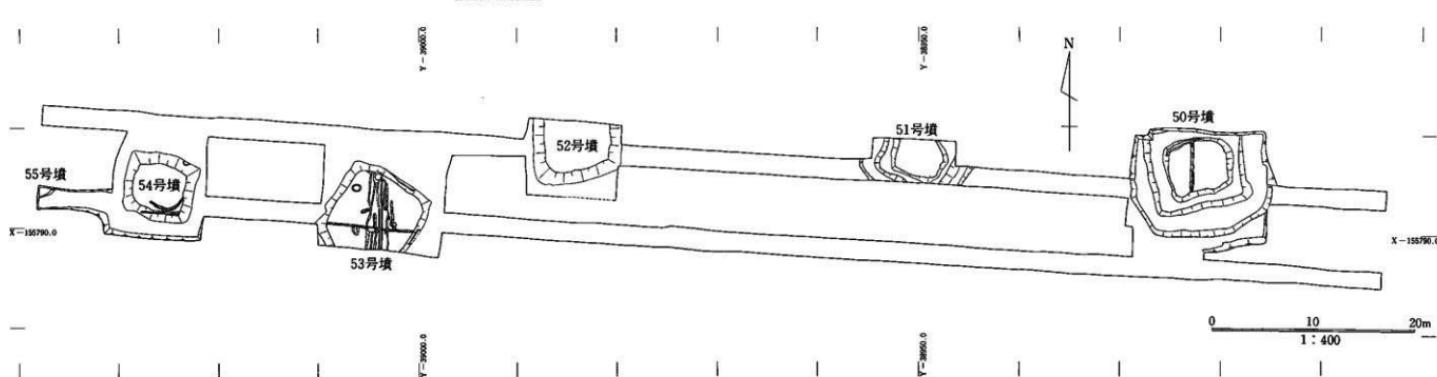


図11 I・II区古墳配置図

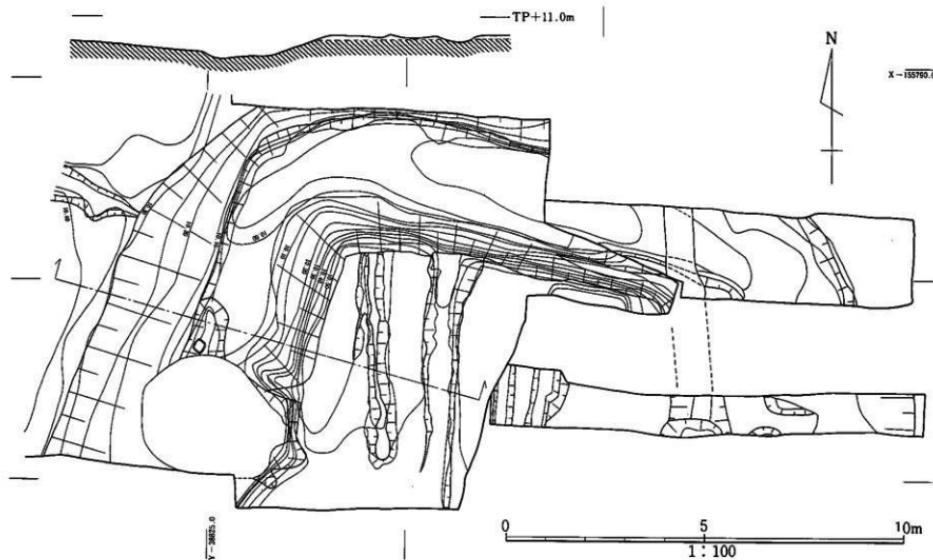


図12 44号墳実測図

最も深く端部に行くにつれて浅くなっている。西側周溝は中央部を後世の井戸により壊されているため、同様に周溝の端部が浅くなるという特徴があるかどうか明かでない。

墳丘には、黒褐色粘土（NG第7B層）をベースとして、周溝を掘った際に出されるこの黒褐色粘土と、その下層の黄白色粘土（NG第13層）をブロック状に積み上げている。これらの盛土部分は、飛鳥～奈良時代の水田耕作により基底部を周辺から削り取られ、その後、平安時代以降の開発により上半部は全体的に削平されたものと思われる。44号墳の場合も墳丘上面には南北方向の素掘りの溝が多數掘られるなど、耕作による凹凸が激しい。墳丘部分は高さ65～70cmが残されており、頂部には10cm程度の盛土も残存していたが、埋葬施設などは確認できなかった。墳丘の方位は北で約13° 東に振れている。

なお墳丘西側斜面から周溝底にかけて30・34・36が出土し、また墳丘直上から44が出土した。

(植木)

## 遺物

## 須恵器（図13、図版18-左上）

杯蓋（27）天井部に2列の櫛描きの列点文を施した杯蓋で、復元径は約12cm、天井部は約1/4残存している。原体の幅0.9cmを測る櫛で、0.4cm程、櫛目を描いて止めている。外面・断面とも灰白色で、内面は灰色を呈する。

樽形魁（28）体部外面に断面が三角形の2条一組の稜線を約2cmの間隔で配し、その間に原体の幅0.8cmの櫛で、波状文を描く須恵器片である。内面に剥離した痕跡がある。どのようなものを接合していたかは不明だが、実測図のように剥離部分が緩やかなカーブを描いて下降することから、杯部を受けていた可能性はある。上部内面はユビオサエといねいなヨコナデが施されており、下部内面は自然軸の剥離のためかもしれないが、荒れている。下端部は緩く外反していることから、縁辺部に近い部位とも思われる。器種は不明で、樽形魁のように円筒形を呈すると考えると、復元径28cmになる。外面は暗青灰色、内面は灰白色、断面は中央が赤灰色を呈する。

壺（29）口縁端部直下に断面三角形の凸帯を巡らせた口径21.5cm程の壺の口縁部である。外面・内面・断面とも明青灰色を呈する。

この他、図版18-317で示した樽形魁体部両端

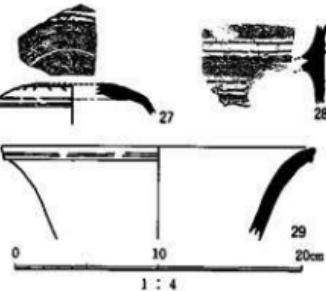


図13 44号墳周辺出土土器実測図

を閉塞する被蓋がある。直径約10.5cm、厚さ約0.8cmの円板で、内面にろくろ成形に伴う溝巻状の痕跡がみられ、外面にていねいなヘラケズリとナデがみられる。

いずれもTK73型式 [田辺昭三1981] に属すると考えられる。

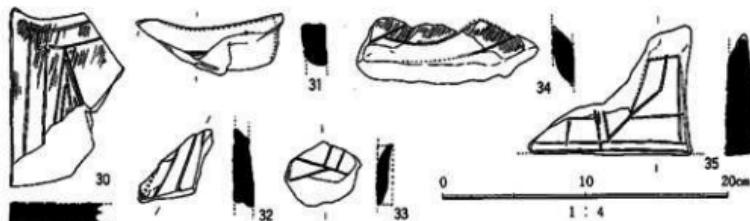


図14 44号墳出土形象埴輪実測図  
西斜面（30・34）、西周溝（31・32・33）、周辺（35）

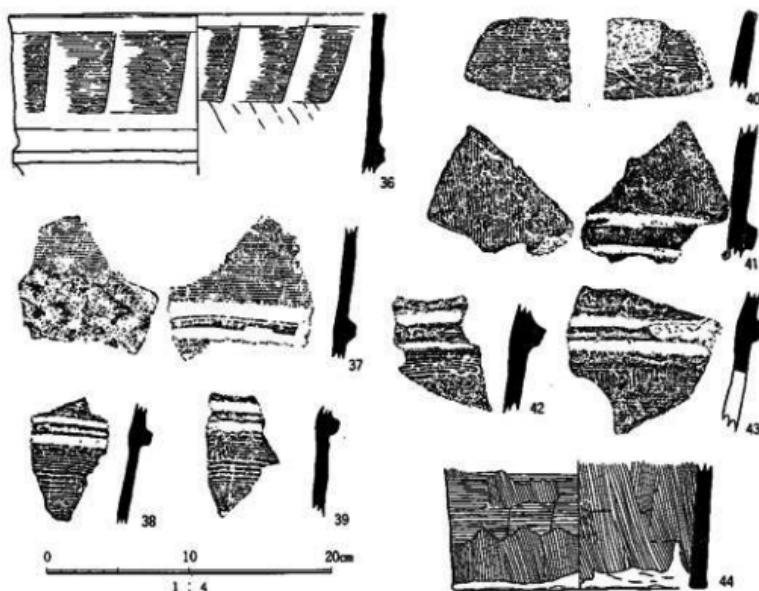


図15 44号墳出土円筒埴輪実測図  
墳丘上（44）、西斜面（36・39・43）、西周溝（37・40・42）、周辺（38・41）

## 形象埴輪（図14、図版18-左下）

いずれも盾形埴輪の一部と思われるが、34は初期埴輪になる可能性はある。鋸歯文を施すもの30・32、直弧文を施すもの34、直線を複雑に組み合わせたもの32・35があり、2個体以上になることは確実である。30・34は、細かいハケ（約12本/cm）調整の後、文様がヘラ書きされている。焼きは良好で、30～34は灰白色、35は浅黄橙色を呈し、全体的に白っぽい。1mm程度の赤色の粒を含む。

## 円筒埴輪（図15、図版18-右）

外面調整はa：タテハケの後、B種ヨコハケ〔川西宏幸1978〕を施す36～40・42～44と、b：タテハケのみを施したもの41がある。いずれもハケは（5～6本/cm）と粗い。タガはいずれも断面台形を呈するが、端面の幅が0.8cmのものと、幅が1.5cm程度になるものの2種類がある。

内面調整はユビオサエの後、タテやナナメのハケを施しており、36・37・40のように口縁部内面にヨコハケを施したものもみられる。

特殊なものとして44がある。44は長径約25cmの平面が梢円形を呈する底部破片である。焼きひずんだものと思われる。外面は基本的にタテハケの後、B種ヨコハケを施す。端部付近にヨコハケ後にタテハケを施した部分も見られる。内面調整は下から上へのタテハケである。底部端面には植物の葉や茎によると思われる圧痕がみられる。

以上の埴輪の焼成は良好で、すべて無黒斑である。36は淡橙色、37～40・42・43は灰白色、41は黄橙色、44は灰褐色を呈している。

（黒田慶一）

## 2) 45号墳

## 造構（図11・16、図版1・2-下・3-上）

I区の中央東よりで検出された。墳丘の東西幅は基底部で11.6m、南北幅については北端部が調査範囲外に広がるため明確でないが、検出した範囲で10.4mである。また残存する墳丘頂部では東西8.5m、南北8.6m以上であり、南北にやや長くなるようである。周溝を含めた大きさは東西19.0～20.7m、南北は12.8m以上である。残存する墳丘高は周溝最深部より60cm程度であるが、墳丘の盛土部分は後世の耕作による削平により厚さ5～10cm程度が残されているのみであった。周溝は浅い皿状の断面を呈し、墳丘東側で幅3.7～5.9m、西側で3.5m、南側で2.1～2.5mを測る。各辺の中央付近で最も深くなり、コーナー隅部では最深部に比較して20cm程度浅くなっている。

墳丘の方位は北で約17° 東に振れている。

本古墳では東・西周溝および南周溝内から須恵器・土師器・埴輪類などが多数出土した。これらは墳丘上から転落あるいは流入した状況を呈して検出されており、原位置を保つものはみられなかった。また、墳丘頂部や周溝の上面から出土した遺物については、古墳の周辺部からの混入とみられなくもないが、出土位置からみて本古墳に伴う可能性が強い。以下に出土状況を記す。

墳丘西侧の斜面から周溝底にかけて45・54・58・64・66・73の須恵器や60の韓式系土器と共に75~77・80・82~86・90・92~94・97~99などの形象埴輪がまとまって出土した。他に101の円筒、116・117の朝顔形埴輪も同位置から出土した。

一方、東側の周溝からは115・121の朝顔形埴輪、102・105・106・108・123の円筒埴輪が出土しており、他に62の須恵器が出土した。

南側の墳丘斜面から周溝底にかけては51・52・57・59・69・70の須恵器、103・107・112の円筒埴輪が出土した。また周溝の南東コーナーから117~120の朝顔形埴輪、102・104・109・110の円筒埴輪が出土した。

墳丘直上からは、48・50・53・55・56・61・63・65・67・68・71・82の須恵器、111・113の円筒埴輪が出土した。  
(植木)

#### 遺物

##### 須恵器 (図17~19、図版19・20)

杯蓋 (45・46) 口径12cm前後で、天井部と口縁部の境界に浅い凹線が巡り、稜線の端部はやや丸味をもつ。口縁部はやや外反ぎみに下がり、端部は丸くおさめる。天井部に中くぼみのつまみをもち、つまみの周囲に櫛描き列点文を二段に施す。天井部のほぼ全体をていねいな時計回りのヘラケズリで調整する。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好で、胎土中にごく少量の長石粒を含む。

杯身 (47~49) 口径11cm前後、器高4.5~5.5cmで、立ち上がりは短く内傾しており、口縁端部を47はやや平端に、48・49は丸くおさめる。48・49はいわゆる土釜形を呈しており、受け部は水平で、48は体部の1/3を、49はほぼ全体を不定方向の静止ヘラケズリで調整する。47の受け部はやや外上方に引き出されており、端部は鋭く、体部の4/5をていねいな時計回りのヘラケズリで調整する。色調は暗灰色ないしは青味がかった灰色を呈し、焼成は良好で、胎土中にごく少量の長石・黒色粒を含む。

高杯 (50・51) 50は口径約16cm、51は口径15cm、器高10.4cmを測る無蓋高杯で、口縁

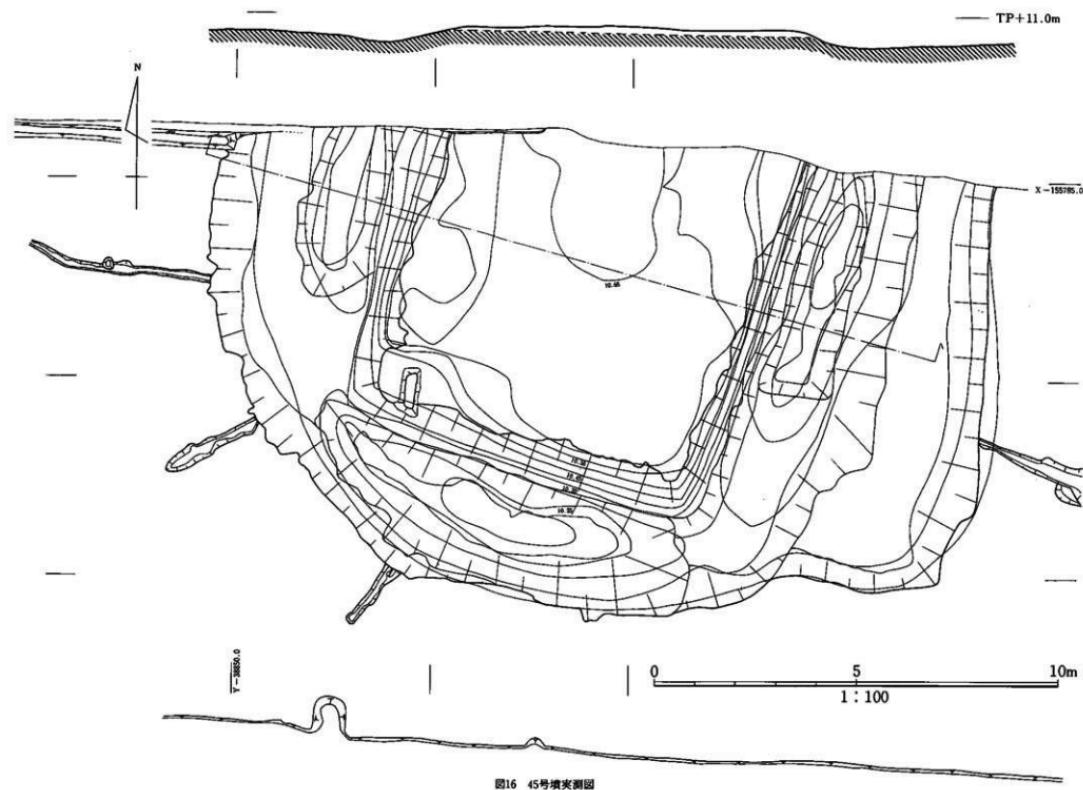


図16 45号墳実測図

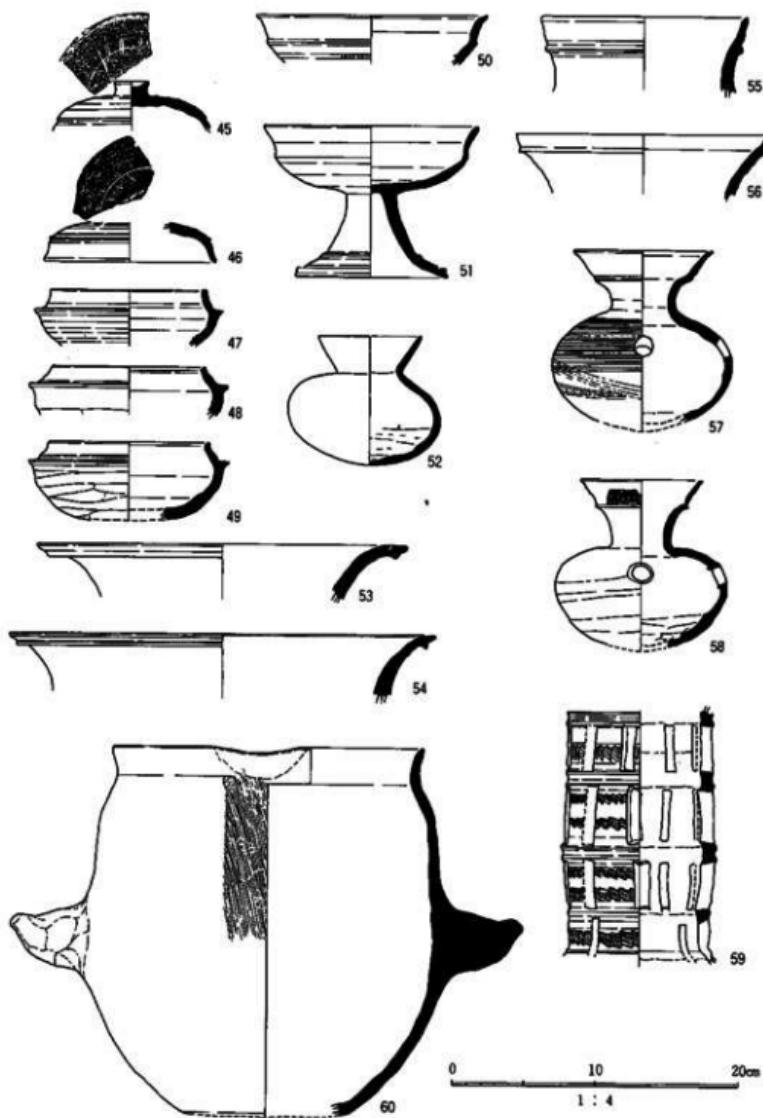


図17 45号墳出土土器実測図  
墳丘頂部 (48~50・53~56)、南周溝 (46・51・52・57・59)、西周溝 (47・54・58・60)

部は外上方に開き、端部を50は短く折り曲げており、51は丸くおさめる。口縁部と体部を界する稜線は鈍く、杯体部の器表面を50は細筋のハケの後にヨコナデ、51は2/3を時計回りにヘラケズリで調整する。51の脚部はやや外反ぎみに伸びる柱状部から裾部が開き、裾部および脚端部には鈍い断面三角形の凸帯が巡る。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好で、胎土中にごく少量の石英・長石・黒色粒を含む。

**甕 (53・54・56)** 53・54は口径約25.8~29.6cmで、口縁部はゆるやかなカーブを描いて外上方に伸び、端部の近くに断面三角形の凸帯が巡る。53・54ともに口縁端部を強くヨコナデして丸くおさめる。56は口径約17.6cmで、口縁部は直立ぎみに外上方に開き、端部の近くを強くヨコナデしてシャープな断面三角形の凸帯を貼り付ける。いずれも器面調整はていねいなヨコナデである。色調は53・54が黒灰色を呈し、56は青灰色である。焼成は良好で、53の口縁部内面には灰白色の自然釉が付着する。これらのほかにも図示しなかったが、器表面に1mm前後の正格子タタキが施され、内面の当て具痕をていねいにナデ消した甕の体部あるいは底部とみられる破片が出土している。

**甕 (57・58)** 57は口径9.7cm、器高12.4cmで、体部はやや丸味をもつ無花果形を呈する。底部は粘土紐を貼り付けた後、内面から棒状の用具で突き出して成形する。口縁部は外弯ぎみに立つ短い頸部から外上方へ開き、口頸部の境界には断面三角形の鈍い稜線を引き出す。体部の下半から頸部にかけてカキ目を施しており、最大腹径部上に円孔を穿つ。口縁部および頸部には文様はみられない。底部の中央部を穿孔している。

58は口径8.4cm、器高12cmで、体部は全体に肩の張った扁球形を呈する。口縁部は直立ぎみに伸びる頸部から外上方に開き、口頸部の境界にはシャープな断面三角形の凸帯が巡る。口縁部の外端面には9本一単位の櫛描き波状文を時計回りに施しており、最大腹径部上に円孔を穿つ。口縁部の大半を打ち欠き、底部の中央部を穿孔している。57・58ともに色調は暗灰色を呈し、焼成は良好で、口頸部の内面には灰白色の自然釉が付着する。胎土中にはごく少量の長石・黒色粒を含む。

**甕 (55)** 口径約14.4cmの直口壺で、口縁部は直立する頸部から短く上方に伸び、口頸部の境界に断面三角形のやや鈍い凸帯が巡る。色調は黒灰色を呈し、焼成は堅緻で、口頸部の内面には灰白色の自然釉が付着する。胎土中にごく少量の長石粒を含む。

**器台 (59・61~74)** 59は筒形器台の柱状部で、器表面を2条一単位の断面三角形の鈍い凸帯によって4区分する。各区画内には7~9本を一単位とする櫛描き波状文を施した後、長方形のスカシを穿つ。青灰色を呈し焼成は良好で、胎土中に少量の長石・石英粒を含む。

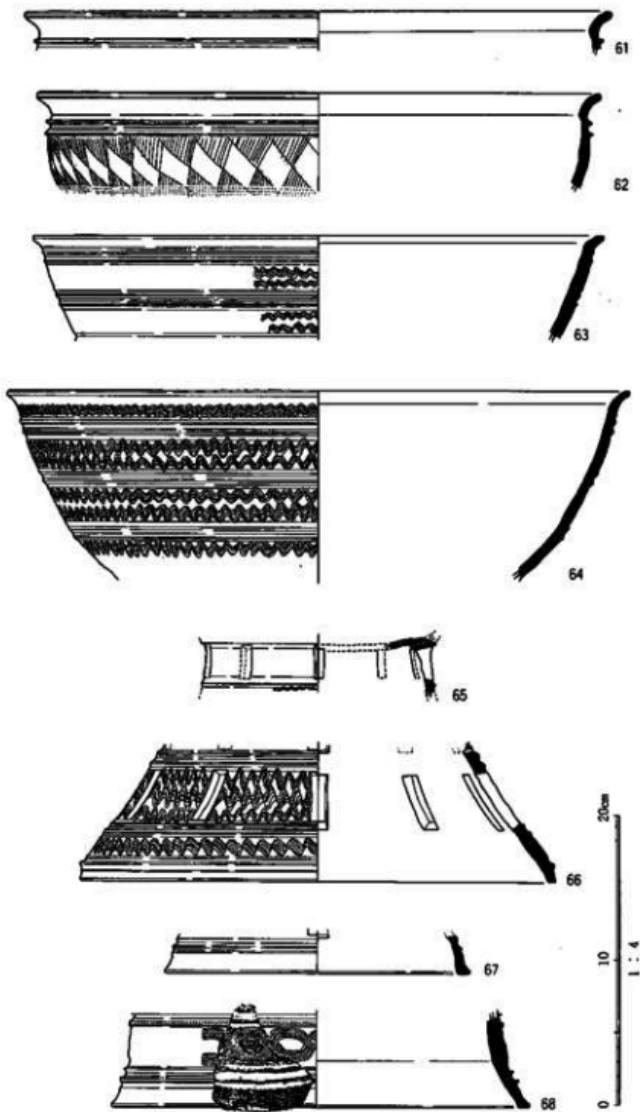


図18 45号墳出土土器実測図  
墳丘頂部 (61・63・65・67・68)、東周溝 (62)、西周溝 (64・66)

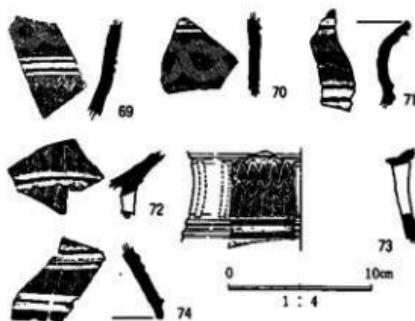


図19 45号墳出土土器実測図

61~64は口径39~43cmを測る高杯形器台の杯部、65~68・72~74は同脚部である。杯部の口縁部は、内弯しながら立つ体部からやや外弯ぎみに開く61・62・71と、短く屈折する63・64がある。口縁端部は丸くおさめる61・64と面取る62・71があり、71の端部直下にはシャープな凸帯が巡る。

口縁部から脚裾部までの間を2条

一単位の断面三角形の凸帯および7~9本一単位の櫛描き波状文で加飾する63・64・66・69~74をはじめ、体部にヘラ描きの複合鋸歯文を施した62などがある。

脚部は外反しながら裾へ広がり、裾がわずかに内弯する66・74と短く下方に開く68がある。66は脚端部の近くが丸みをもち、接地面をほぼ平端におさめる。66~68・74の裾部下端には1ないし2条のシャープな断面三角形の凸帯が巡り、脚端部の形態は面取る66・74と丸くおさめる67・68がある。いずれも脚部の外面を低くつまみだした断面三角形の凸帯によって3~4段に区分しており、各区画には7ないし9本一単位の櫛描き波状文を施す65・66・72~74のほか、6本一単位の櫛描き組紐文のみられる68がある。66・67は最下段を除きそれぞれ長方形のスカシを穿つ。なお、組紐文は69・70にも認められており、ともにていねいに施されている。これらの色調は紫灰~黒灰色を呈し、焼成は良好で、胎土中に少量の石英・長石・黒色粒を含み、多くのものに灰白色の自然釉が付着する。

#### 土師器（図17、図版19-中）

小型丸底壺（52） 口径7cm、器高8.9cmで、扁球形を呈する体部から短い口頭部が外上方に開く。体部の外面を細かいタテハケ、内面は下半部をヘラケズリで調整する。色調は淡い黄褐色を呈し、焼成はやや不良で、胎土中にごく少量の石英・長石・金雲母粒を含む。

#### 韓式系土器（図17）

鍋（60） 口径20.8cm、器高約25cmで、底部を欠損しているが、瓶あるいは鍋とみられる土器である。やや長胴の体部から片口状をなす口縁部が直立ぎみに開く。体部の調整は外面が粗いタテハケで、内面はユビナデかと思われる。最大腹径部に先端を尖らせた角状の把手を挿入する。色調は黄褐色を呈し、焼成はやや不良でもろく、胎土中に石英・長

石・チャート粒を含む。

以上の土器のなかで、須恵器の多くはTK73型式に対比されると考えられるが、45～47・56は若干時期が新しいかもしれない。また、土師器の小型丸底壺は船橋O-IあるいはO-II型式〔原口正三・田辺昭三・田中琢・佐原真1962〕に属するものであろう。

#### 形象埴輪（図20～23、図版21・22・23）

武人形埴輪（75） 墳丘北西部斜面から西周溝底にかけて、盾・駒形埴輪をはじめ鶴形埴輪などに混在して出土した。埴輪は高さ約73cm、厚さは1cm前後あり、粘土紐を積み上げて中空につくられている。器表面の調整は細いハケおよびナデであり、裏面はナデによって整える。眉庇付冑をかぶり、顔面に入墨をいたした頭部、頸甲・肩甲・短甲・草摺からなる体部、円筒部に区分され、手・足の表現はない。顔の表現がなければ甲冑形器財埴輪の範疇に含まれるものである。

眉庇付冑は眉庇を欠損するが、鉢の頂部に伏鉢をのせる小孔が穿たれており、これを中心に細長い長方板が線刻されている。鏡には斜辺約8cm、底辺6.5cmの線刻による三角板が表現されており、これの下端近くには覆輪かと思われる横方向の線刻がみられる。顔のはば中央に粘土を貼り付けた鼻があり、目・口は穿孔で表現されており、正面からみるとやや扁平な感じを受ける。入墨は鼻の左右から頬に翼形、頬から顎にかけて環状、眉の横に山形、喉に弧状と顔の周囲を中心にして浅い線刻によって表現されている（写真3）。

肩甲は頭部下に線刻された頸甲より左右になだらかなカーブを描いて伸び、先端を面取る。短甲は中央に線刻による引合板があり、引合板の中央部近くから左右にめぐる帶金の表現とみられる4条の沈線を界して斜辺8.5cm、底辺6cm前後を測る2段の三角板が表現されている。眉庇付冑やほかの伴出遺物の年代から三角板鋲留短甲を模倣したものと考えられる。草摺は、革製のものを模していると考えられ、3条一単位の縦線で四分割されており、各区画に3段の綾杉文を線刻する。円

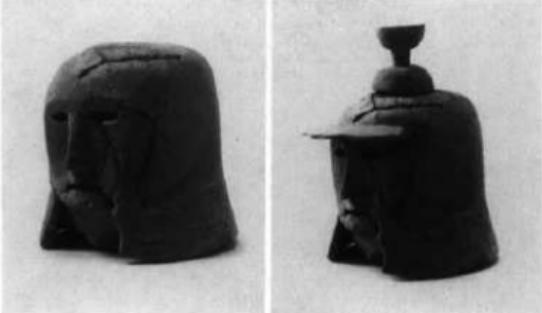


写真3 45号墳出土武人形埴輪頭部

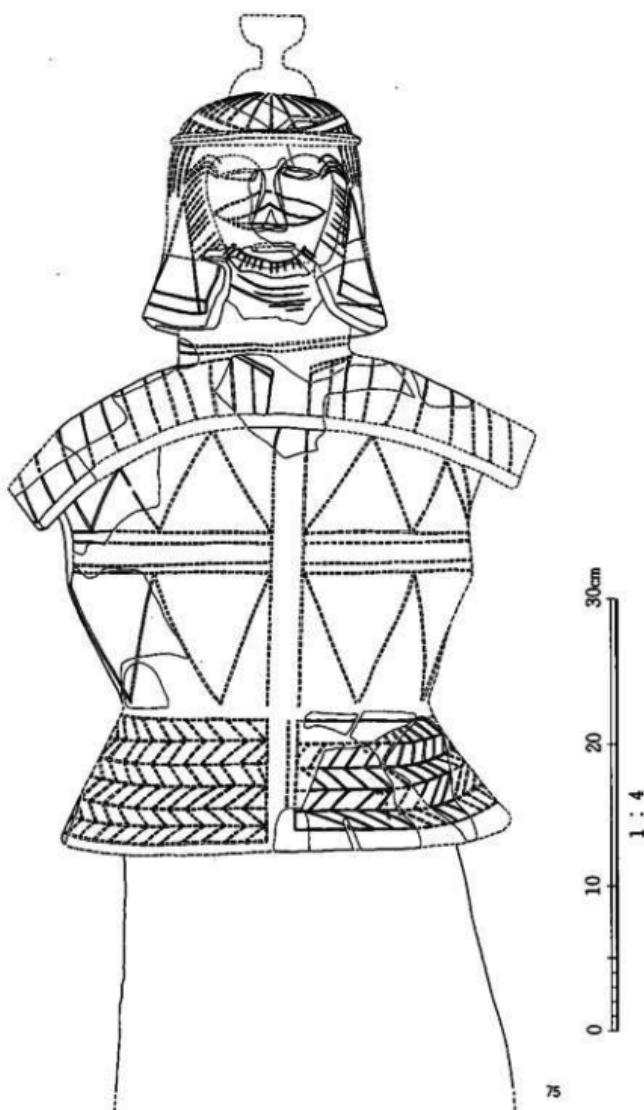
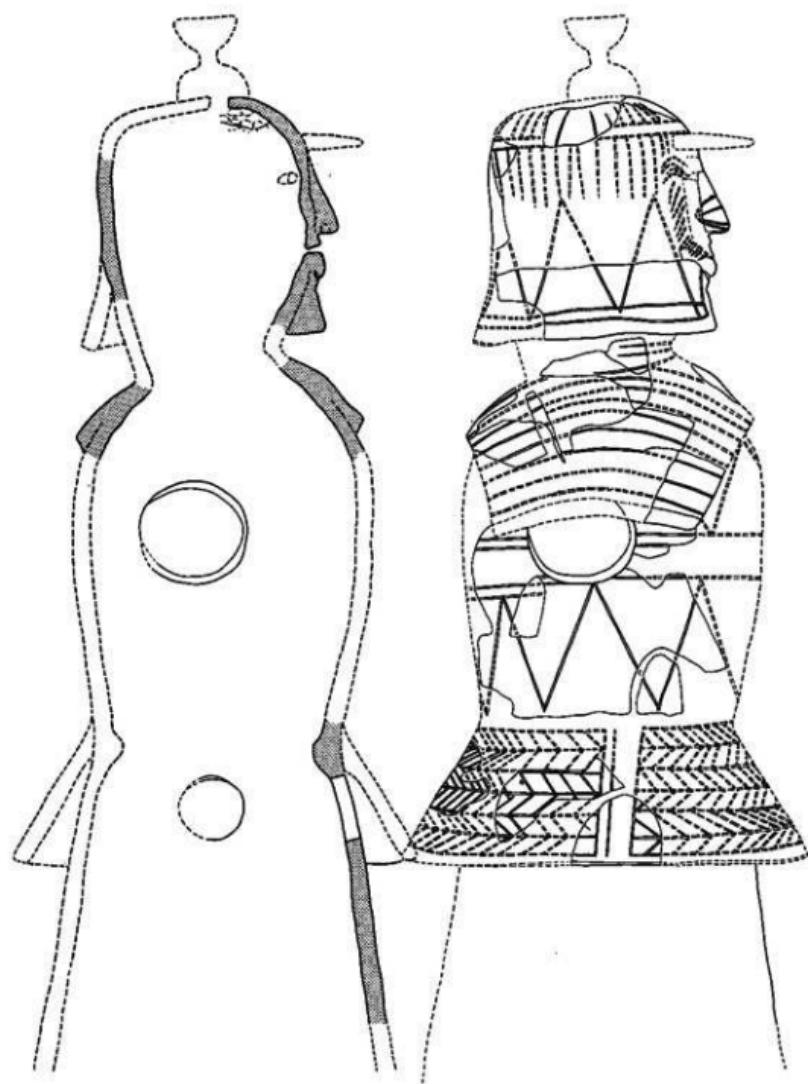


図20 45号墳出土武人形埴輪実測図（正面）



75

図21 45号墳出土武人形埴輪実測図（側面および断面）

筒部は径約24cmで、器表面を不定方向にナデ整える。色調は暗黄褐色ないし灰白色を呈し、焼成はあまり良くななく土師質である。胎土中に石英・長石・チャート・赤色粒を含む。

**鶏形埴輪（76～78）** 76は高さ16.3cmを測る鶏形埴輪の頭部である。高い鋸歯状の鶏冠および小円孔と小円孔を穿つ円形浮文によって目と耳が表現されている。嘴は先端を欠損するが鋭くつくられており、上方に一对の小孔がみられる。中空で、器表面を細かいハケで調整する。77はゆるやかに弯曲する翼の破片で、先端は丸味をもち器表面に弧状の線刻が施されており、78は尾の破片と思われる。76～78は色調が黄橙色を呈し、焼成は良好で、胎土中に石英・長石・チャート粒を含み、器面調整などから同一個体と考えられる。

**家形埴輪（79～82）** 全て小片のため、部位の復元は難しいが、79は切妻屋根の破風の一部とみられ、80・81は網代を線刻で表現した棟で、81には妻側に円形のスカシがある。82は器表面に細かいハケが施されており、棟の一部と思われる。色調および焼成や胎土は鶏形埴輪と変わらない。

**盾形埴輪（83～90）** 83はゆるやかな弧を描く盾形埴輪の上部、84・85・87は外縁部とみられる破片で、綾杉文および鋸歯文が線刻されており、83・84は外端面を面取る。86は直行する綾杉文の内側に菱形格子文と鋸歯文が配されており、盾面の内側を構成する破片と考えられる。86の裏面には円筒部との接続部が残る。89・90は盾面の下部とみられるもので、89は綾杉文の上に斜辺9cm、底辺8cmの鋸歯文が線刻されており、菱形文と鋸歯文を配する90は盾面の下端部であろう。

88は径20cm前後を測る円筒部で、中央部に盾面の接合痕と鋸歯文が認められる。全体に風化が進み器面調整は明らかでない。色調は黄橙色ないしは暗黄褐色を呈し、焼成や胎土は武人形埴輪に酷似する。これらの埴輪は器面の状態などから同一個体と思われる。

**鶏形埴輪（91～99）** 鶏形埴輪の上半部の破片と思われるが、全体の形状や大きさはわからない。91・92は円弧が線刻されており、肩部の背負紐とみられる。93は筒裏板の表面に直接柳葉形の鎌を線刻しており、上部には3条の平行する直線間を短線で区切る背板の表現がみられる。94～99は厚さ1cm前後の板状を呈する破片で、直弧文が線刻されており、筒の周囲をめぐる装飾の一部と考えられる。99は直弧文が線刻され、裏面には円筒部が残る。色調は黄橙色を呈し、色調や胎土は盾形埴輪と変わらない。

(田中)

**円筒埴輪（図24・25、図版24）**

調整技法と胎土などの特徴から次の5グループに分けることができる。

a : 100・110～114は外面調整にタテハケの後、主にB種ヨコハケを施すものである。

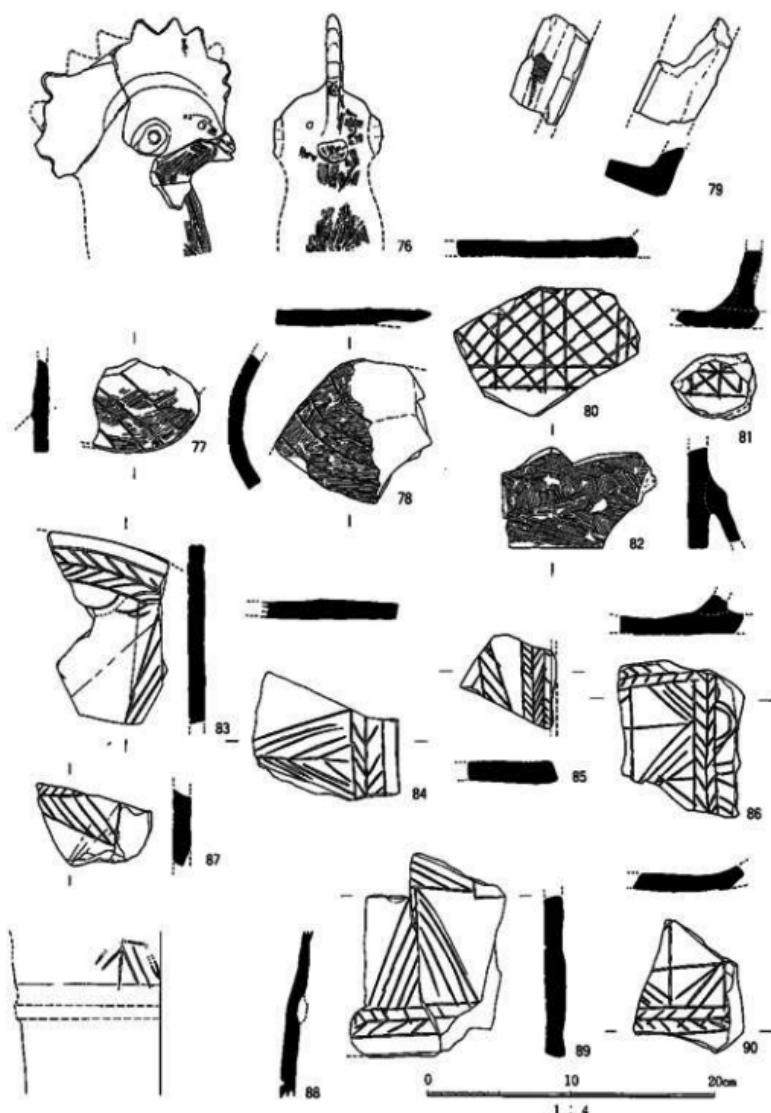


図22 45号墳出土形象埴輪実測図 西周講 (76~90)

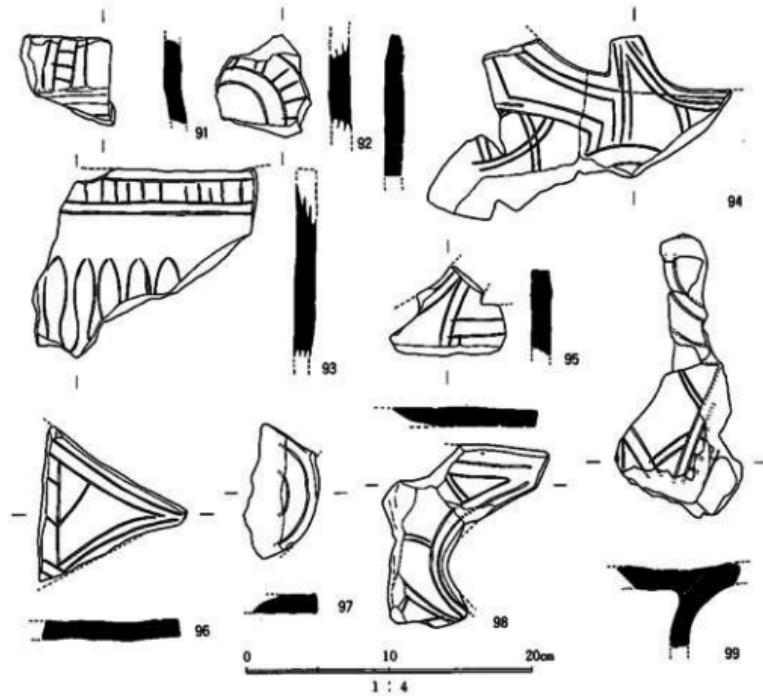


図23 45号墳出土形象埴輪実測図 西周溝 (91~99)

ハケは粗い（4～5本/cm）ものが主である。タガの断面形は台形で、比較的突出するIIIや低いI00などがあり、一定ではない。いずれもタガ接合時のヨコナデがヨコハケを切っている。口縁部は直口のI00・II0と、同一個体とみられるII2・II4のように端部を外側に折り曲げたものがある。内面はナデやハケであるが、I00・III・II3のようにタガの裏側では、横方向のナデやユビオサエがハケメを切っている例が多い。色調は橙色II2・II4や鈍い橙色I00・III・II3、浅黄色II0とバラエティがある。焼成は良好で、III・II3は須恵質に近く焼き上がっている。胎土には長石・石英の他、赤色粒を含むI00・II0～II2・II4やチャートを含むII0・II2～II4などがある。

b : I01・I02は外面に細かいタテハケ(11～13本/cm)を施し、灰白～鈍い橙色を呈す

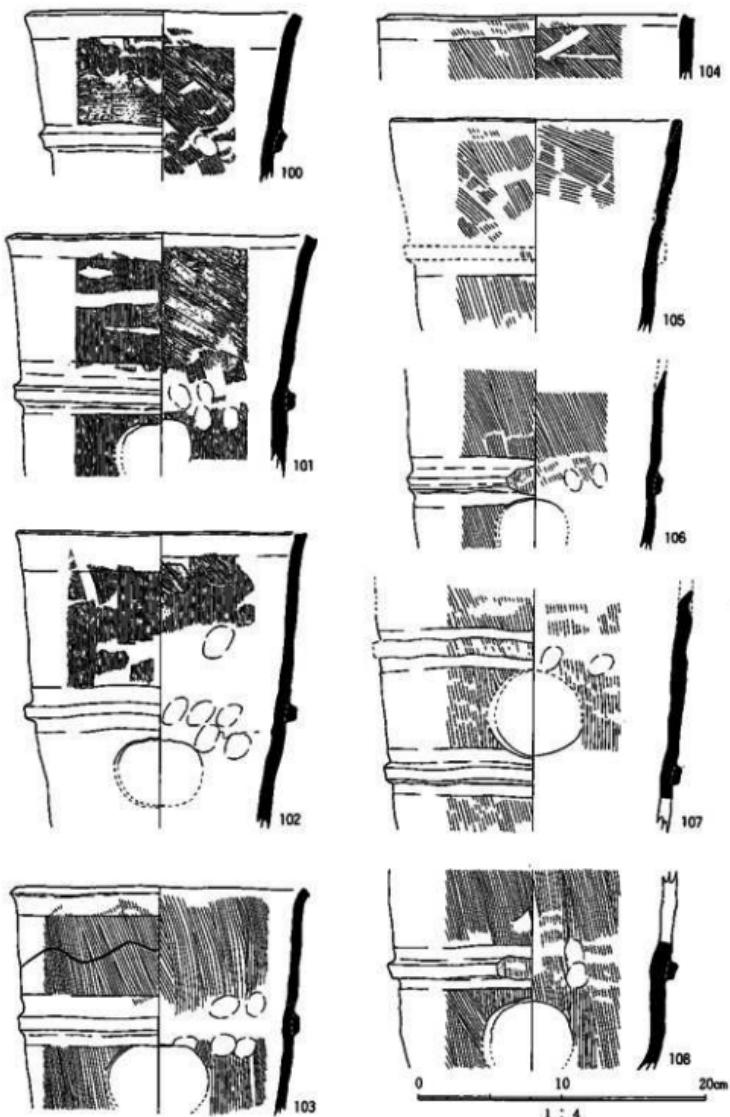


図24 45号墳出土円筒埴輪実測図

周溝南西コーナー（100）、西周溝（101）、周溝南東コーナー（102・104）、南周溝（103・107）、東周溝（105・106・108）

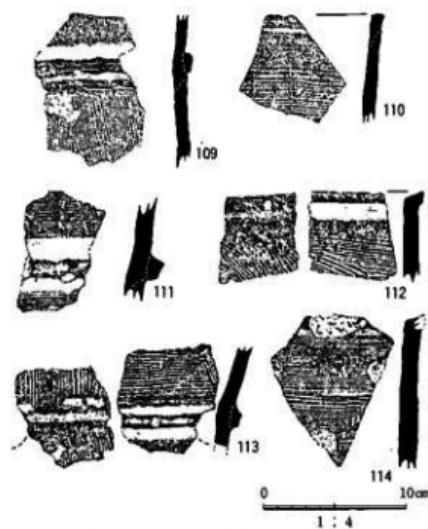


図25 45号墳出土円筒埴輪実測図  
周溝南東コーナー（109・110）、埴丘頂部（111・113）、  
南周溝（112・114）

にぶい橙色を呈する。タガはやや突出する108と低い台形の106がある。

104の内面には部分的な横～斜め方向のナデが施されている。胎土は長石・石英・赤色粒の他チャートを含む106もある。

e: 105は、外側がやや斜めの粗いタテハケ（4～5本/cm）で、内面は最上段にハケを施している。口縁部はナデ調整である。にぶい黄橙色を呈し、土師質に焼き上がってい。胎土には長石・石英・赤色粒・螢母などを含む。

以上の埴輪のスカシはすべて円形で、段を連れて直行する107・108などもあり口径は19.5～22cmの範囲におさまる。

底部の破片は少なく、ハケなどは剥落してしまっているが、自重によって粘土が内側に変形したものと、していないものがある。断面形が下方へうすく尖るものはないが、資料も少なく、いわゆる「底部調整」の有無は不明である。復元径は約13～16cmの範囲におさまるようである。

砂粒の動きから、ハケやヨコナデの方向を判別できる例がある。101・104～106・108・109・112・114ではタテハケやナナメハケのばあい、下から上へむかって工具が移動して

るもので、胎土には長石・石英・チャート・赤色粒などを含んでいる。タガの断面はやや突出した台形を呈しており、最上段内面のハケメは二段に施されている。101の外側には幅の狭い部分的な横方向のナデが施されている。

c: 103・109は粗いタテハケ（5～6本/cm）を外側に施し、焼成は土師質で灰白色を呈している。タガの突出は低く、口縁部は小さく外反する。器壁は薄く、胎土には長石・石英・チャート・赤色粒などを含んでいる。

d: 104・106～108はやや斜めのあらいタテハケ（4～5本/cm）を内外側に施し、焼成は硬い土師質で

いる。112のヨコハケは上から見て時計回りに工具が移動している。タガ接合時のヨコナデも時計回り101・107である。

ヘラ記号は101・103に見られる（写真4）。

焼成はすべて無黒斑で、窓窯焼成である。

なお、上記の5グループに識別できる破片数は238で、全体の半数程度かと思われるが、a - 9%、b - 27%、c - 26%、d - 31%、e - 7%という比率であった。（積山 洋）



写真4 45号墳出土円筒埴輪(101)のヘラ記号

#### 朝顔形埴輪（図26・27、図版25）

一次口縁端部の内面に二次口縁を接合し、同外面にタガを接合している（ここでは二段に外反する朝顔形埴輪の口縁部のうち、下段を一次口縁、上段を二次口縁と仮称する）。口縁部の形態は、接合部で二次口縁が屈曲して立ちあがるもの115～117と一次口縁から直線的に立ちあがるもの119・120・123がある。タガは台形であるが、接合されていないもの116もあり、これにはタガの剥離した痕跡はない。

外面調整は粗いタテハケ（5～6本/cm）である。115の二次口縁はタテハケが二段に施されており、上段のハケは一単位が幅4.3cm、29条前後で向かって右のハケが左のハケを切って施されている（写真5）。117・

123も二次口縁のタテハケは部分的には二段で、上段のハケが新しい。116は一次口縁にやや細かいタテハケ（7～8本/cm）を行ったのち、粗いタテハケ（5本/cm）を施し、さらにその上端部にヨコハケを行っている。116・123の口縁外面にはタテハケを切って幅の狭い横方向のナデが部分的に行われている。タガの



写真5 45号墳出土朝顔形埴輪(115)の口縁部外面

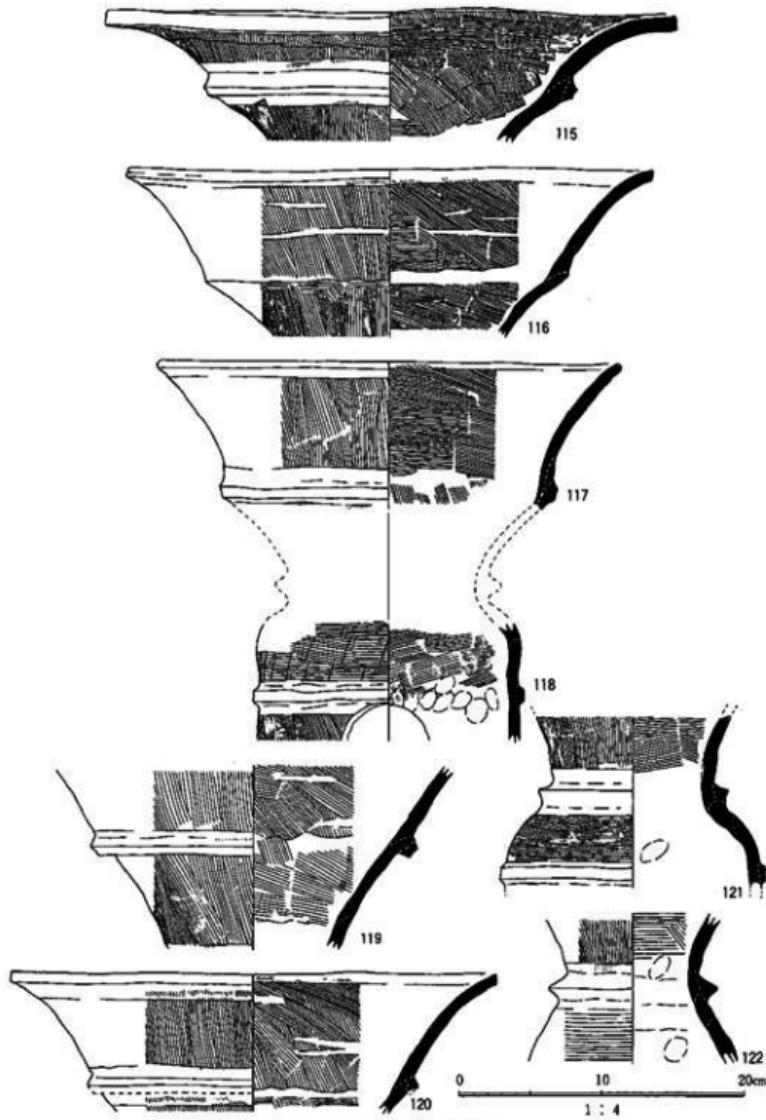


図26 45号墳出土朝顔形埴輪実測図  
東周溝 (115・121)、西周溝 (116～118・122)、周溝南東コーナー (119・120)

上辺には119・123のようにヨコナデ以前のタテハケの痕跡が残っている例があり、タガ接合→二次口縁タテハケ→タガの上辺を再度ヨコナデするという製作工程がうかがわれる。内面は外面と同様の、粗い斜めないし横方向のハケを主に用いており、幅の狭い部分的な横方向のナデを行う116・119・120のような例もある。

116・119・120・123

では一次口縁と二次口

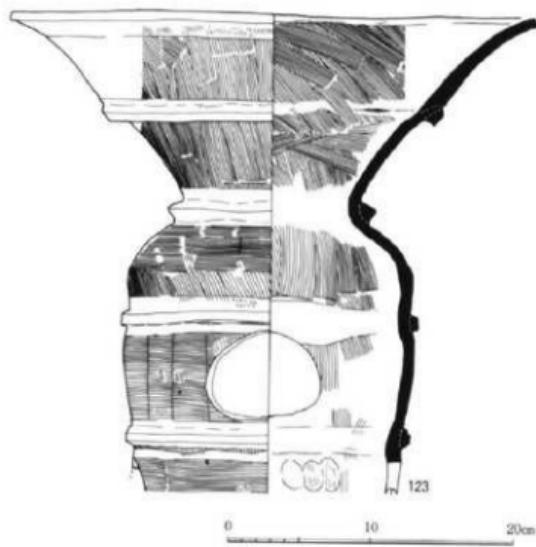


図27 45号墳出土朝顔形埴輪実測図

東周溝南西コーナー(123)

1:4

縁の接合部に指によるかと思われる強いヨコナデが施されており、これらは一次口縁のハケを切り、二次口縁のハケに切られている。116・119・123にはナデの隙間やタガの接合剥離面に一次口縁のヨコハケが残っている。

頸部には断面三角形のタガを貼りつけており、121・123では、その際のヨコナデが肩部のヨコハケを切っている(写真6)。肩部外面はヨコハケで、118にはB種ヨコハケが上下に三段見られ、その切合は下の段のハケメが上の段に切られている。121は肩部のヨコハケが上下二段認められ、上段のハケメが下の段を切っている。118・121とも下のタガ接合時のヨコナデによって、ヨコハケが切られ



写真6 45号墳出土朝顔形埴輪(121)の肩部

ている。肩部内面はナデ、ハケメなどである。

円筒部はI18とI23しかなく、外面は、タテハケのI18とB種ヨコハケのI23がある。タガの断面は台形である。内面はナデ・ハケメなどであるが、タガと対応する位置にはユビオサエやナデがみられ、ハケメを切っている。

砂粒の動きから判別すると、タテハケ・ナナメハケはI15・I16・I18・I20・I23などで下から上へ工具が移動している。ヨコハケはI21(写真6)・I23が上から見て時計回りである。ヨコナデの場合、I15が時計回りで、I16が反時計回りである。

焼成は良好で、すべて無黒斑である。にぶい橙色～黄橙色で堅緻な土師質のI16・I19～I22とにぶい褐色～灰白色で半ば須恵質のI15・I17・I18・I23がある。

I17・I18は同一個体の可能性が高い。

以上の朝顔形埴輪は形態・ハケの技法・焼成などにおいて、個体ごとに若干の差はあるが、長石・石英・チャート・赤色粒などを含む胎土やハケの用い方などは円筒埴輪のd:104・106～108のグループに近似する。

(積山 洋)

### 3) 46号墳

遺構(図11・28、図版1・3一下)

I区のほぼ中央部で検出された。墳丘は北端部をわずかに確認したのみであり、ほとんどの部分は調査範囲外に広がっている。したがって全体の規模は明らかでない。

北東側周溝の幅は3.8m、北西側周溝は3.1mであり、周溝最深部から残存墳丘頂部まで約50cmである。周溝はコーナーで浅くなる傾向が見られ、最深部に比較して約20cm程度浅くなっている。遺物はまったく出土しなかった。

(植木)

### 4) 47号墳

遺構(図11・29、図版1・4一下)

I区中央やや西よりで検出された。墳丘は東西8.6m、南北6.1mであり、残存する墳丘頂部は東西6.0m、南北3.9mと東西にやや長い。周溝の幅は墳丘東側で1.5m、西側で2.3m、南側は2.6mである。北側周溝は調査範囲外に広がるため正確ではないが、幅2.6m程度と推定される。周溝は各辺とも中央部で深く、コーナーで浅くなってしまい、その差は15cm程度である。浅い皿状の断面形を呈し、最下層は黒灰色シルト～粘土が10cm程度の厚みで堆積する。

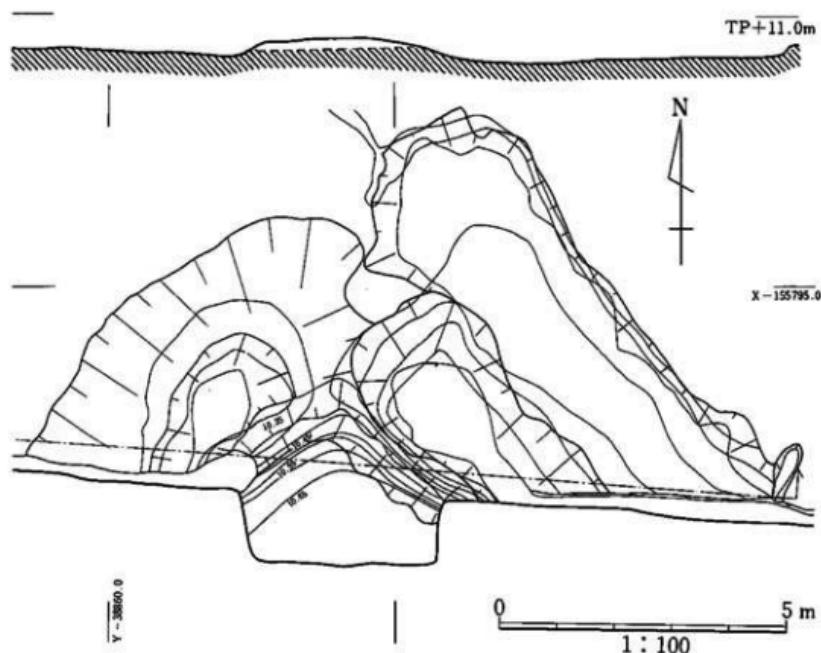


図28 46号墳実測図

残存する墳丘の上端部には、明黄色粘土（NG第13層）と黒褐色粘土（NG第7B層）をブロック状に積んだ盛土がわずかに確認された。周溝最深部から墳丘頂部までは約60cmが残存しており、また墳丘の方位は北で27°東へ振れている。

墳丘北側の周溝内より韓式系土器かと思われる壺I24・I26が、また東側の周溝内より須恵器の壺I25が出土している。  
(植木)

#### 遺物

須恵器（図30、図版26・27-上）

壺（I25）口径28.3cmで、口縁部はゆるやかなカーブを描いて外上方へ伸び、端部をヨコナデして面取りぎみにおさめる。頸部上方および口縁端部近くに断面三角形のシャープな凸帯が巡り、凸帯間に5~7本一単位の櫛描き波状文を時計回りに施す。頸部の内外面を粗いユビナデで整える。色調は紫灰色を呈し、口頸部の内面には灰白色の自然釉が付着す

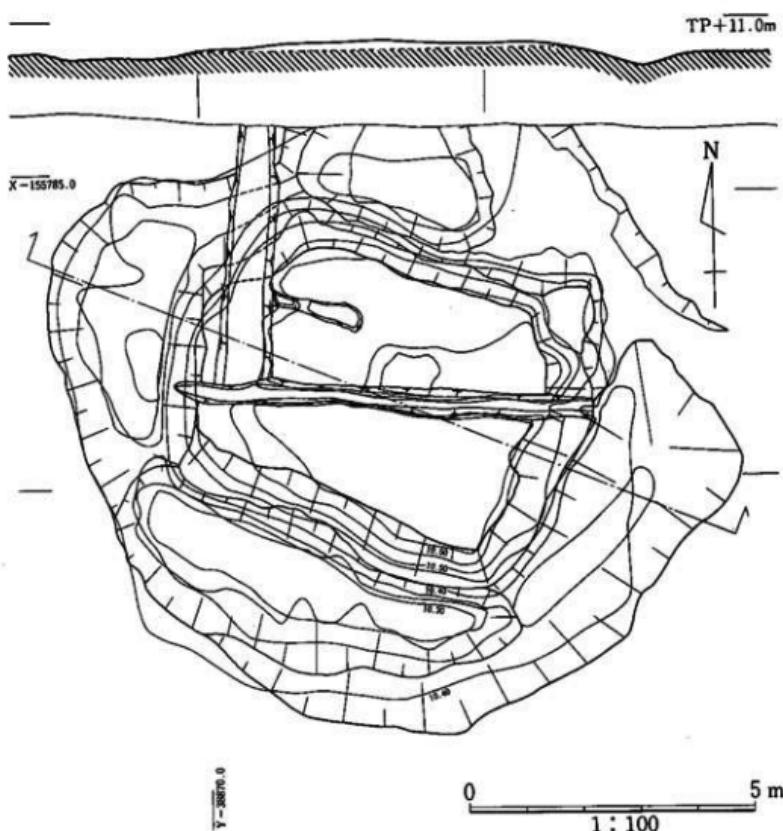


図29 47号墳実測図

る。焼成は良好で、胎土中にごく少量の長石粒を含むが緻密である。

壺 (126) 口径13.5cm、器高20cm前後に復元される広口壺である。口縁部は頸部から外弯しながら短く開き、端部近くを強いヨコナデによって水平におさめる。最大径は体部の中央部にあり、器面を細かい右上がりの平行タタキで整える。底部は平底で、円板状の粘土を体部下端に貼りつけた後、叩き締めて成形する。色調は暗赤褐色を呈し、焼成は良好で、胎土中に少量の石英・長石粒を含む。

韓式系土器 (図30)

壺（124）口径約24.4cmを測る。破片のため器形がやや不明確であるが、ここでは広口壺の口縁部と考えておく。口縁部は外湾しながら短く開き、端部近くを強くヨコナデして折り曲げており、外端面には浅い凹線文が巡る。色調は黒色を呈し、焼成は不良で瓦質である。ほかに同一個体とみられる体部あるいは底部片があり、胎土中に少量の砂粒を含む。

以上の土器のうち、125はTK73型式に相当すると思われるが、124・126は朝鮮半島南部地域の舶載品かもしれない。

（田中）

#### 5) 48号墳

遺構（図11・31、図版1・4－下）

I区の西半部、47号墳の南西部で検

出された。南半部が調査範囲外に広がるため部分的に拡張調査したが、なお全体の規模は確認できなかった。

墳丘の東西幅は4.8m、南北幅は明らかでないが4.3m以上である。墳丘の北側東半部および東側に周溝と思われる幅1.9～2.5mの窪みが検出されているが、西側には見られない。周溝最深部から残存墳丘最上面まで35cm程度である。

墳丘最上部に黄色粘土と黒褐色粘土をブロック状に積み上げている形状が、他の古墳と同様であったためここでは古墳として扱ったが、墳丘の大きさが小規模であり墳形も不整形である。また周溝も全周せず、遺物もまったく出土しないなど、この遺構を古墳と断定するのには疑問な点も残されている。

（植木）

#### 6) 49号墳

遺構（図11・32、図版1・5－上）

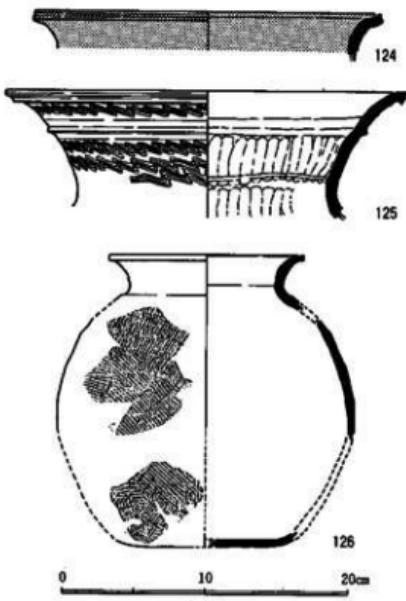


図30 47号墳出土土器実測図

東周溝（125）、北周溝（124・126）

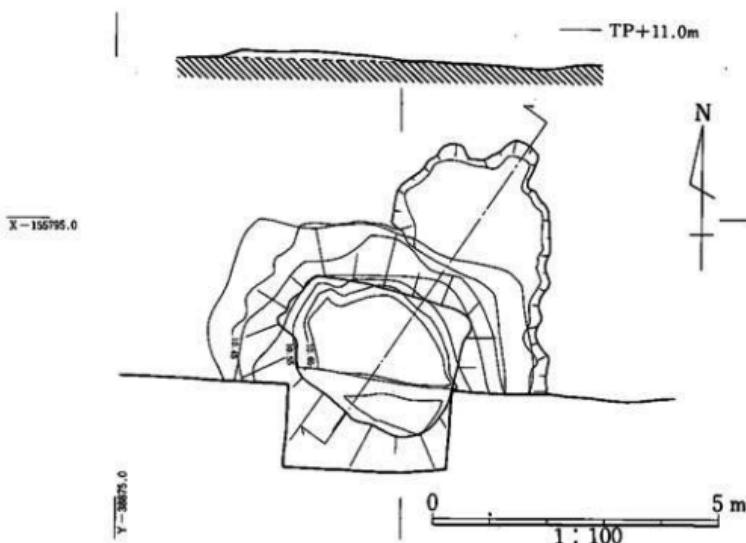


図31 48号墳実測図

I区西端部で検出された。墳丘の規模は基底部で東西6.3m、南北6.8mと南北にやや長い。周溝は墳丘周囲を全周し、東側で幅1.3m、南側で1.1mを測る。西側と北側はやや広く2.5~2.8mの幅である。各辺とも中央部が最も深く、コーナー、すなわち古墳の隅部では10~15cm程度浅くなっている。

墳丘は平安時代以降の耕作による削平を受けており、上面は凹凸が激しい。周溝最深部から墳丘残存部上面までは40~45cm程度である。

他の古墳と同様に、墳丘上端部には固くしまった黒褐色粘土と明黄色粘土の盛土が薄く残存していた。また周溝は浅い皿状断面を呈し、最下部には10~15cmの厚みで黒褐色粘土が堆積していた。

伴出の遺物としては、墳丘北側の周溝内より須恵器の把手付楕I28・I29が、また西側周溝内より須恵器の杯I27と土師器の高杯I30が出土した。  
(植木)

#### 遺物

須恵器 (図33、図版27-中)

杯身 (I27) 口径11cm、器高4.7cmで、立ち上がりはやや内傾しながら上方に伸び、口

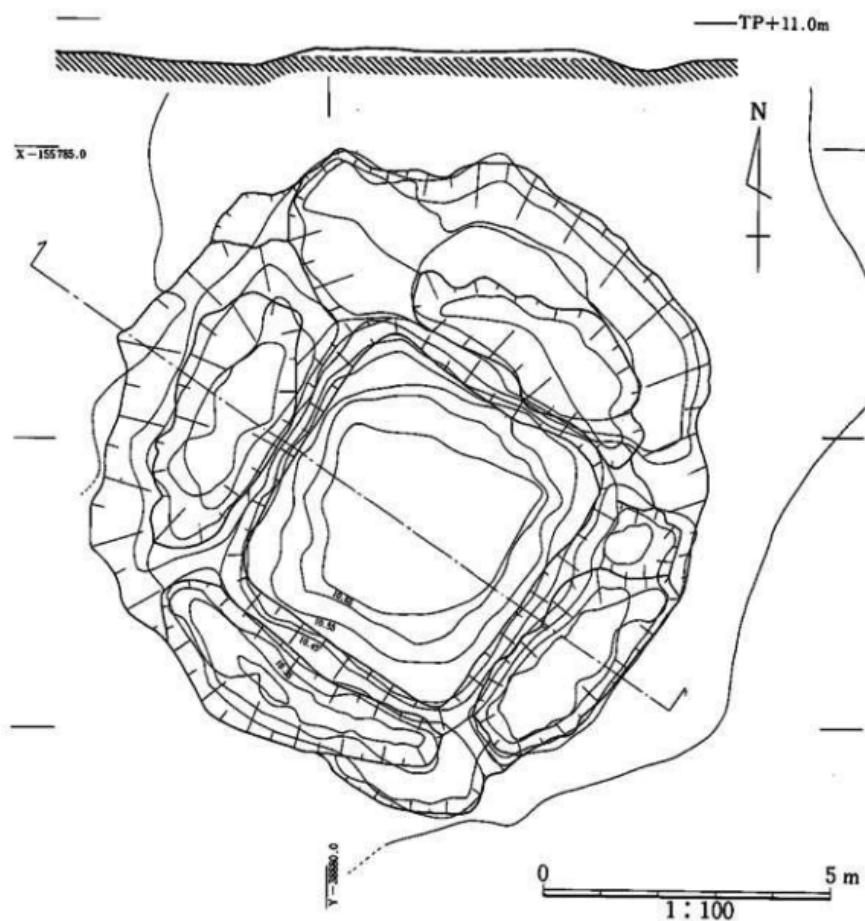


図32 49号墳実測図

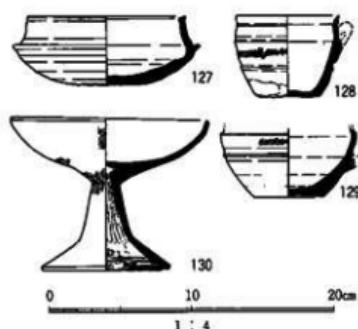


図33 49号墳出土土器実測図  
北周溝（127）、西周溝（128～130）

リ、129はヘラケズリの後、ヨコナデで調整する。ともに色調は褐灰色を呈し、焼成は良好で、体部の内面には緑灰～灰白色の自然釉が付着する。胎土は緻密である。なお、把手は128が板状で、129は環状を呈している。

#### 土師器（図33）

高杯（130） 口縁部の一部を欠損するが、口径13.8cm、器高10.3cmを測る完形品である。口縁部は杯体部から内寄して立ち上がり、脚部は柱状部から端部を面取る裾が短く開く。杯部と脚部は別に形成した後、杯部に脚部を挿入し、接合部に粘土円板を充填している。器表面および底部の内面は細かいタテハケで整えており、柱状部の内面にはしばり目が残る。色調は淡い黄橙色を呈し、焼成は良く、胎土中に少量の石英・長石粒を含む。

以上の土器は須恵器がON46段階ないしはTK208型式に、土師器は船橋O-II型式に相当すると思われる。

（田中）

#### 7) 50号墳

##### 遺構（図11・34、図版5-下・6-上）

II区北トレンチ東部で墳丘を確認したため、道路敷内について調査範囲を拡張した。墳丘基底部での東西幅は9.8mである。南北幅は墳丘北端部が調査範囲外に広がるため正確でないが、9.1m程度に復元される。したがって、やや東西に長い方形を呈することになる。周溝の幅は墳丘東側と南側が2.7～3.0mで、西側は1.8mとやや狭い。周溝の東南コ

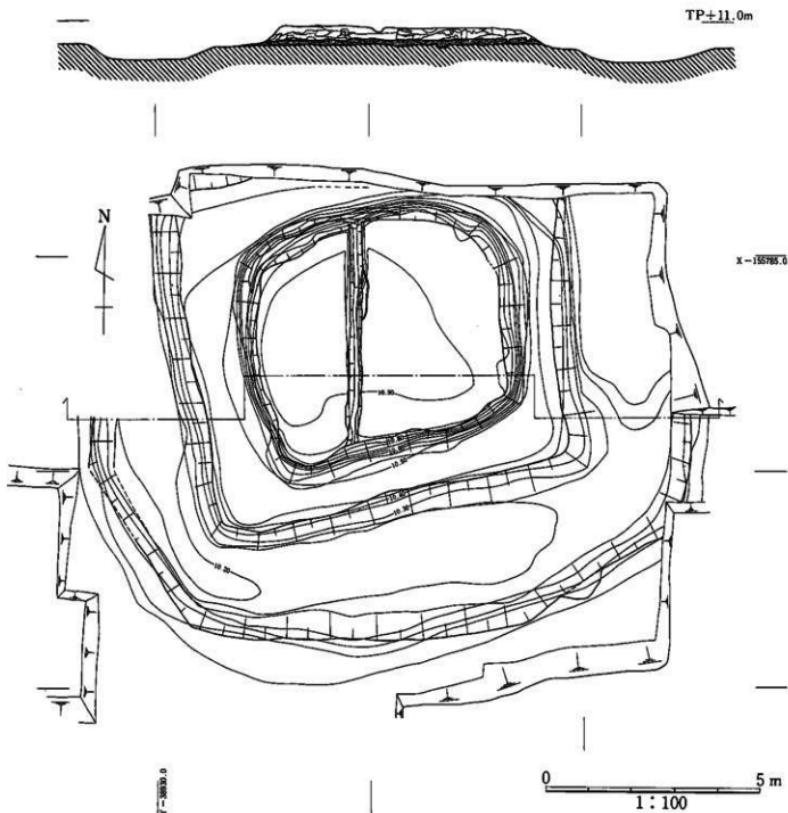


図34 50号横穴断面図

ナーは最深部に比して15cm程浅くなることはこれまでの古墳と同様であるが、南西コーナーにはその傾向は見られない。墳丘の方位は北で $10^{\circ} \sim 15^{\circ}$ 西に振れている。検出後の墳丘部の状況は、あたかも二段に築成されているかのように見えるが、これはNG第6層に相当する飛鳥～奈良時代の水田耕作により、墳丘裾部を幅1.1～1.5mにわたって削り取られているためであり、実際に二段に築成されたものではない。その後、平安時代以降の開発により墳丘上半部は全面的に削平されており、墳丘上面は耕作痕跡と思われる凹凸が著しく、南北方向の素掘り溝なども見られる。

墳丘上面の西北および西南コーナーで原位置を留めた円筒埴輪が検出された。また墳丘上面および周溝内からは、多量の円筒埴輪・朝顔形埴輪のほかに須恵器の壺・瓶などが出土した。

調査終了間際に、墳丘部にトレンチを入れ、墳丘の築成状況を調査した。これによると黄白色粘土層（NG第13層）上に堆積する層厚10～15cmの黒色粘土層（NG第7B層）をベースとし、その上に、周溝を掘った際のこれら2層の土をブロック状に積んで墳丘を築成している状況が明らかとなった。残存する墳丘盛土は約30～35cm程度である。

概してII区以西で検出された古墳はI区の古墳と比較して墳丘の残存状況は良好である。

(植木)

#### 遺物

##### 須恵器 (図35)

瓶 (131・132) 131は体部中央に原体幅1cmの節による波状文を施す瓶の破片である。残存高は7.4cmで、色調は灰色を呈する。132も瓶の体部の破片で、残存高は7.2cmを測り、色調は灰色を呈する。

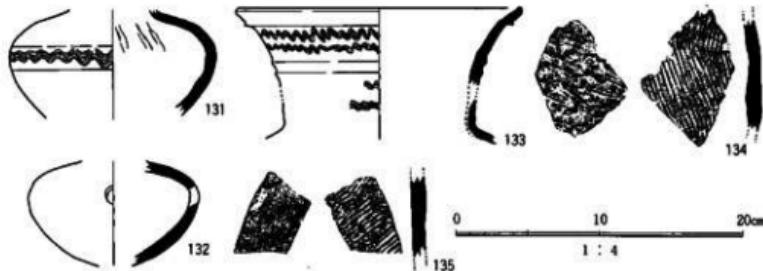
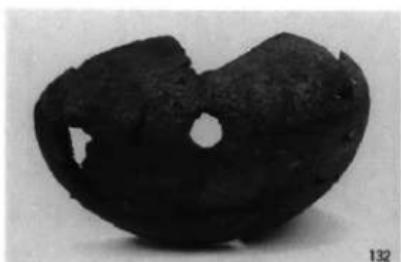


図35 50号墳出土土器実測図  
墳丘上 (131～135)



132



133

写真7 50号墳出土土器

壺（133～135） 133は口径19.8cmの壺の口縁部で、口縁端部直下に断面三角形の凸帯が巡る。頸部に2条のやや丸味をもつ稜線があり、その上下に原体幅0.5cmの2条の櫛描き波状文が巡る。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

134・135とも壺の体部の破片で、外面は平行タタキを施しており、内面はいずれもナデ消すが、135には同心円文のアテ具の痕跡が残る。色調は134は内外面とも明青灰色で、断面は灰赤色を呈し、135は内外面および断面とも灰白色を呈する。いずれもTK216型式に属すると思われる。

#### 円筒埴輪（図36～38、図版28・29）

ほぼ4つのグループに分けられる。

a：外面調整が粗い（5～7本/cm）タテハケで、146・148のように一部ヨコハケを施す部位もある。タガは断面台形か三角形に近い形に突出したもので、上下に波打つ傾向にある。内面調整は基本的にタテハケとユビナデであるが、口縁付近はヨコハケや斜め方向のハケが施されている。灰白色～浅黄橙色を呈するグループである（136～154）。136にはヘラ記号が見られる。

b：外面調整が細かい（約10本/cm）タテハケで、口縁部内外面を幅2～3cmにわたって強くナデ、低い台形のタガ接合後もタガ端面とその上下を強くナデしている（155～159）。157の口縁部には黒斑がみられる。159も外面の底部から体部にかけて径10cm以上にわたる黒斑がみられることから、同一グループに入るものと考えた。灰白色を呈する。

c：外面に粗い（4本/cm）ナメハケを施し、接合が雑で上方が高い台形のタガをもつグループである（160・161）。色調は灰白色を呈する。

d：外面にタテハケの後、細かい（約10本/cm）ヨコハケを施し、しっかりした台形のタガを有する。器壁が厚く、浅黄橙色を呈するグループで、163・164の2点が出土している。いずれも墳丘上から出土しており、混入の可能性もある。

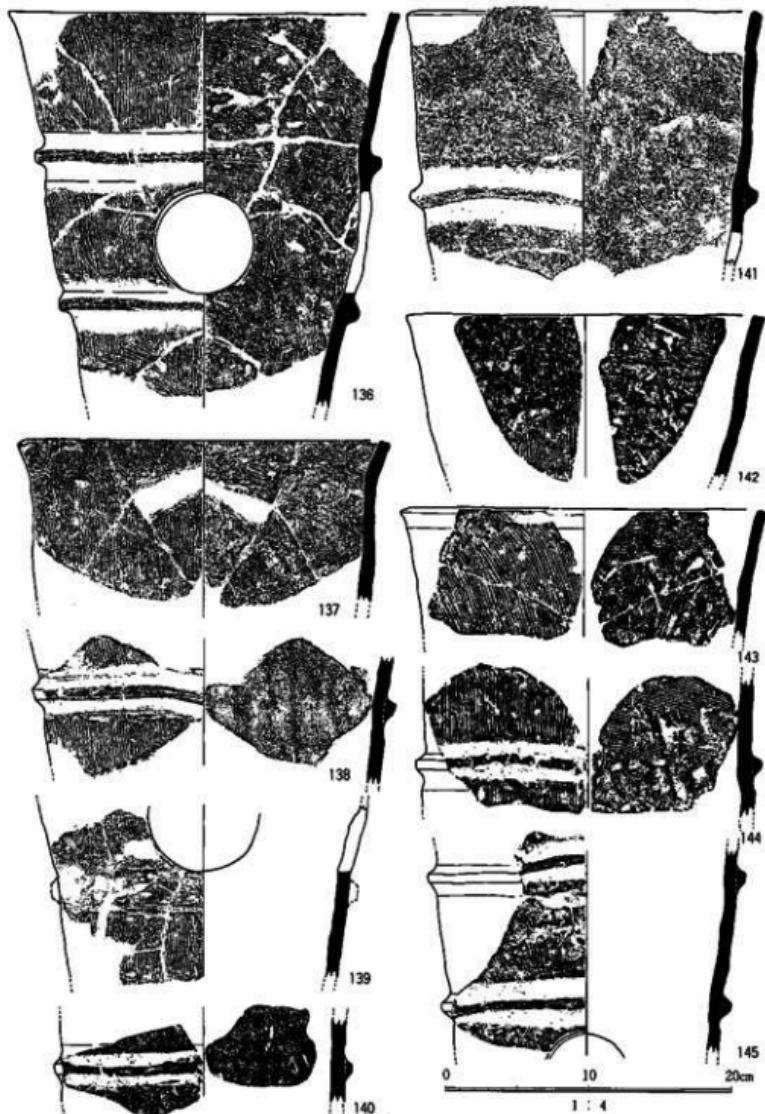


図36 50号墳出土円筒埴輪実測図  
墳丘上 (137・138・139)、西斜面 (140・141・142・144)、南西隅斜面 (136・143・145)

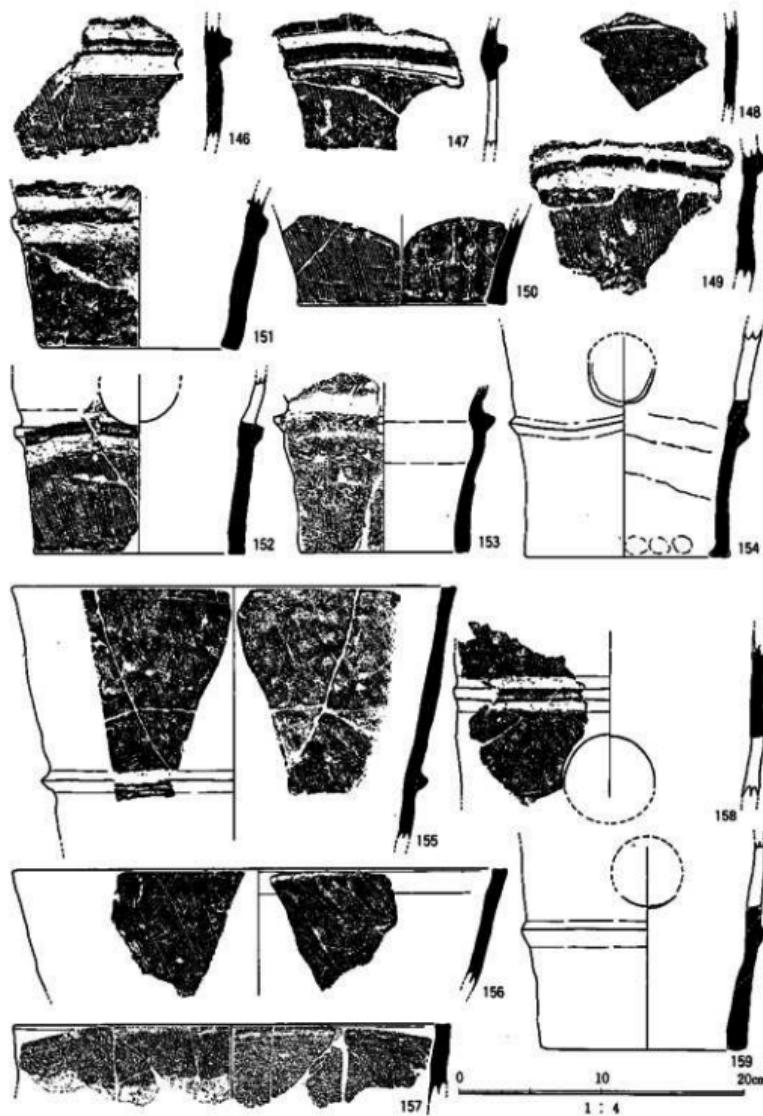


図37 50号墳出土円筒埴輪実測図

墳丘上 (146・149・152・153・154)、西斜面 (147・150・151)、南側面 (155・157・159)、南西隅斜面 (148)、北東隅斜面 (158)、南周溝 (156)

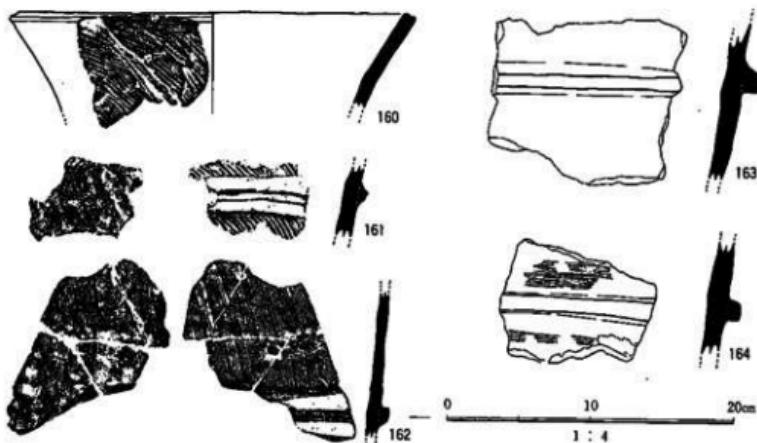


図38 50号墳出土円筒埴輪実測図  
墳丘上 (164)、南斜面 (162)、北斜面 (161・163)、東周溝 (160)

この他、162のように外面・内面に細かい (9~10本/cm) タテハケを施し、浅黄橙色を呈する破片もあるが、aに入るとと思われる。

圧倒的にaが多く、全体の9割以上を占める。そのうち、ヨコハケを有する破片はその1割程度である。160もそうだが、二次調整であるヨコハケを、タガの上下に施した強いナデが切る例が見受けられる。底部付近を除いて、a・bグループとも器壁が0.6~0.8cmと非常に薄い。

#### 朝顔形埴輪 (図39、図版29)

口縁部から肩部にかけての破片である。一次口縁と二次口縁の接合部のあり方で3つの形態に分けられる。

165~171は一次口縁の接合部から1cm程離して二次口縁を接合し、タガを用いないグループである。一・二次口縁とも外面調整は縦あるいは斜め方向のハケで、内面調整は同心円を描くようにヨコハケを施し、端部を挟むようにして1cmないしは2~3.5cmの幅で強くナデしている。一次口縁では接合のため、ヘラで1.5cmほどのキザミを口縁部内面に入れている。二次口縁端部内面はナデた後、ヨコハケを施している。ハケ原体の幅は2cmで、粗い (6本/cm)。外面にベンガラが塗布されている。色調は浅黄橙色である。器壁は0.5~0.7cmと薄い。

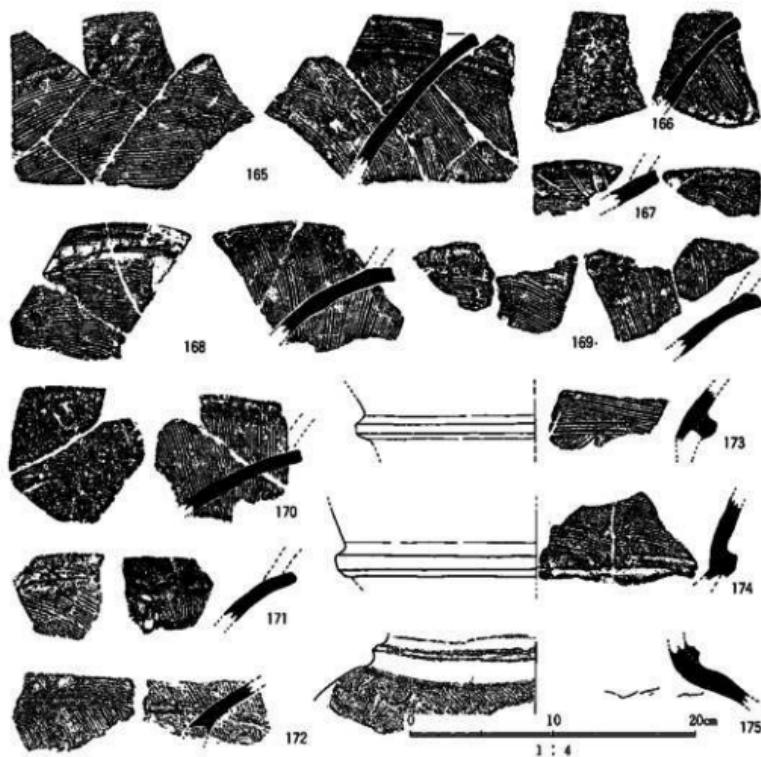


図39 50号墳出土朝顔形埴輪実測図  
西斜面 (165・168・169)、南西隅斜面 (172)、北西隅斜面 (175)、東周溝 (170)

172～174は一次口縁端部内面に二次口縁を接合し、同外面にタガを接合したもので、二次口縁が一次口縁から直線的に立ちあがるもの172と、やや屈曲して立ちあがるもの173・174がある。172～174のいずれも二次口縁下端の破片である。外面調整は両者とも斜めないし縦方向のハケで、内面調整は両者とも同心円を描くようなヨコハケであるが、接合部内面は172がタテハケの後、ヨコハケを施しているのに対して、173・174はナナメハケの後ナデている。ハケは両者とも粗い(6本/cm)。色調は浅黄橙色を呈し、172においては外面にベンガラを塗布している。

肩部の破片は175の1点のみである。外面調整はタテハケで、タガ接合後にタガを挟んで上下につよいナデを施している。タガの断面は台形である。ハケメは粗い(6本/cm)。色調は灰白色を呈する。

円筒部に関しては不明だが、165～171は円筒埴輪のaグループに手法が似ている。

(黒田)

#### 8) 51号墳

遺構(図11・40、図版6-下・7-上)

II区北トレーニングの中央やや東よりで検出した。東西幅は墳丘基底部で7.8m、周溝を含めると10.5m程度となろう。ただし墳丘の北半部は調査範囲外に拡がるため、南北方向の規模は明らかにし得なかった。墳丘の方位は北で約30° 東に振っている。

墳丘は50号墳と同様に、飛鳥～奈良時代の水田耕作により墳丘裾部を幅0.7～1.0m程度削り取られているため、残存する墳丘は不整形を呈している。周溝最深部から墳丘頂部までは約65cmで、盛土部も厚さ35～40cmが残されている。上半部は他の古墳と同様に平安時

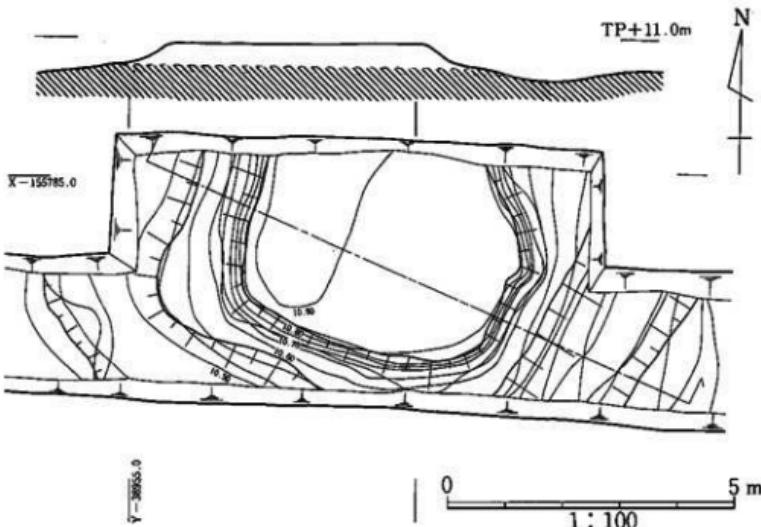


図40 51号墳実測図

代以降の耕作によって完全に削平されている。周溝は南西コーナーでやや浅くなる傾向を示す。

墳丘上面の平安時代頃の耕作土より、須恵器の無蓋高杯176が出土した。 (植木)

#### 遺物

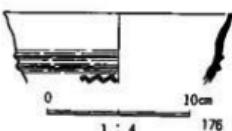


図41 51号墳出土土器実測図  
墳丘頂部 (176)

#### 須恵器 (図41)

無蓋高杯 (176) 口径約16cmで、口縁部は深い体部から外上方へ開く。口縁部と体部の境界には2条の鈍い凸帯と櫛描き波状文が巡る。色調は紫灰色を呈し、焼成は良好で、胎土中に長石・石英粒を少量含む。TK216型式に属するかと思われる (田中)

### 9) 52号墳

遺構 (図11・42, 図版7一下)

II区北トレンチのほぼ中央部で検出した。墳丘基底部での東西幅は9.2m、南北幅については墳丘北端部が調査範囲外に延びるため明らかでない。墳丘の方位は北で2°～5°西に振れている。

墳丘基底部から残存頂部まで50cm程度であり、盛土も厚さ25～30cmが残されている。これまで説明を加えた古墳と異なり、52号墳については周溝に相当する明確な遺構を検出することができなかった。ただし周溝が未検出であることの理由として、NG第6層に相当する飛鳥～奈良時代の水田による耕作が深くまで及び、周溝などの遺構の検出面であるNG第13層上面が削平されたため周溝を確認できなかったものである可能性が強い。

墳丘基底部南西コーナーより須恵器杯身179が、また西側基底部から円筒埴輪180・181が出土した。 (植木)

#### 遺物

##### 須恵器 (図43, 図版27一下)

杯身 (177) 口縁部を欠損しているが、受け部はやや丸味をもち、浅い体部の1/3をヘラケズリで調整する。色調は灰色を呈し、焼成は良く、胎土中に石英・長石・黒色粒を含む。

壺 (178) 口径約24cmで、口縁部はゆるやかに外上方に開く。口縁端部近くに断面三角形の凸帯が巡る。口頸部は内外面ともに強いヨコナデ調整を施すが、器表の一部に平行タ

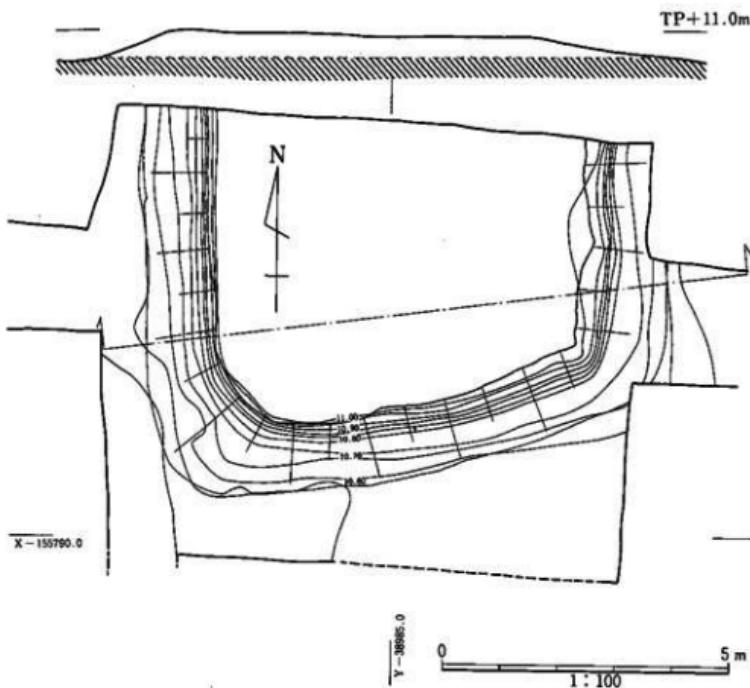


図42 52号墳実測図

タキが残る。色調は灰黒色を呈し、口縁部の外面に緑黒色の自然釉が付着する。焼成は良好で、胎土も緻密である。

鰐 (179) 口縁部および底部を欠損している。口頸部は球形の体部から外上方に開く。口縁部と頸部の境界はシャープな凸帯で区分されており、頸部および体部の上半に10本前後を一単位とする櫛描き波状文が巡る。体部の上半から頸部にかけてカキメを施し、最大腹径部に円孔を穿つ。色調は青灰色を呈し、焼成は良い。胎土中に石英・長石・黒色粒を含む。以上の須恵器はTK23型式に属するものであろう。

#### 円筒埴輪 (図43、図版27一下)

180・181は円筒埴輪の体部片である。ともに外面の調整は細かいタテハケで、内面はタテハケの後、ユビナデを施す。タガの形態は180が断面台形状を呈し、181は三角形に近く、

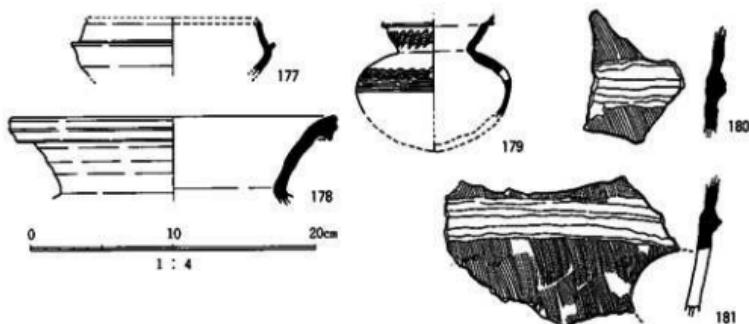


図43 52号墳出土土器、円筒埴輪実測図  
墳丘南西基底部（177・178）、墳丘西基底部（180・181）

突出度は低い。181には円形スカシが穿たれている。色調はともに淡い赤褐色を呈し、焼成はやや不良である。胎土中に石英・長石・シャモット・金雲母粒を多量に含む。

(田中)

## 10) 53号墳

遺構（図11・44、図版8）

II区南トレンチの西半部で検出した。墳丘基底部で東西9.2m、東南コーナーが調査範囲外に拡がるため南北幅を正確につかむことはできないが、およそ10m程度に復原される。墳丘の方位は北で約30° 東に振れている。残存する墳丘の上方30~35cmは盛土であるが、埋葬主体などは確認できなかった。周溝と考えられる遺構は未検出であるが、52号墳と同様に、後の耕作により検出面が削平されている可能性が強い。

これまで説明を加えた古墳と同様に、墳丘は平安時代以降の耕作により、基底部から約55cmを残し上半部は完全に削平されている。墳丘上面は耕作による凹凸が激しく、南北方向の素掘り小溝群や土壤などが掘り込まれている。

墳丘中央に東西方向のトレンチを入れ、墳丘部の盛土の状況を調べたところ、50号墳と同様に、NG第13層に相当する黄白色粘土層上に堆積する黒褐色粘土層（NG第7B層）の上面に、これら二層の土を盛り上げて墳丘を築成している状況を窺うことができた。

墳丘北側斜面から基底部にかけて189・191が、南側基底部から183・187が、また東側基底部から188の、いずれも円筒もしくは朝顔形埴輪が出土した。

(植木)

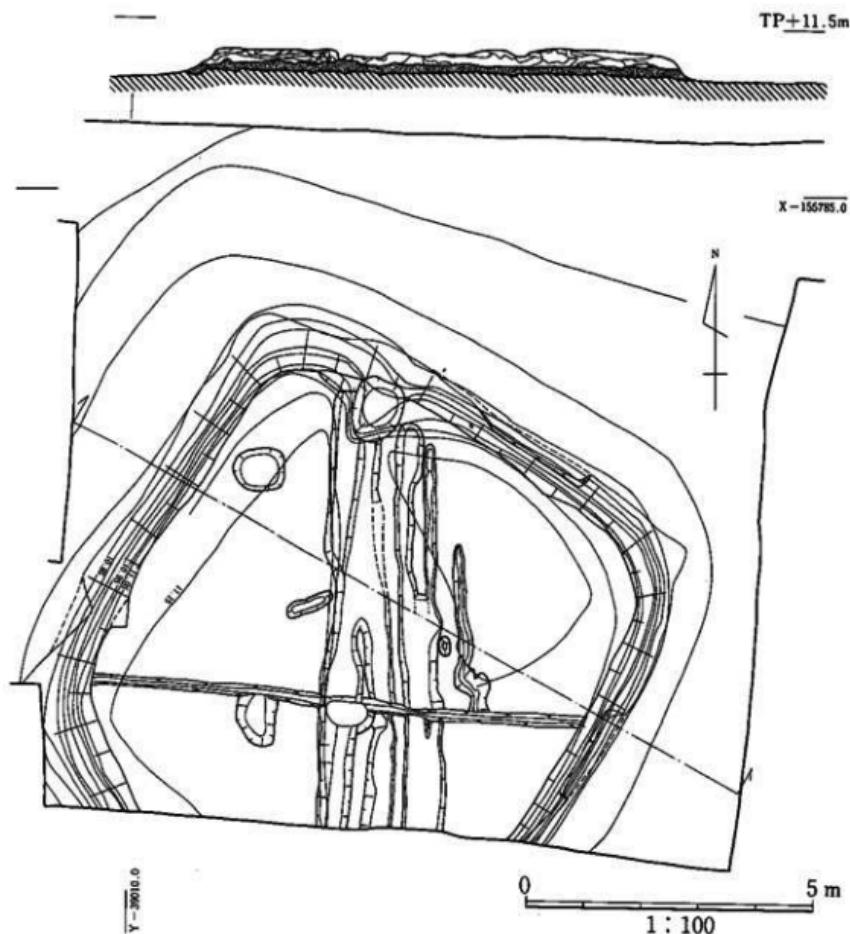


図44 53号墳実測図

遺物

須恵器（図45）

壺（182） 口径約15cmで、口縁部は直立ぎみに外上方に伸びた後、やや内弯しながら短く立つ。口部を界する棱は断面がやや鈍い三角形を呈する。色調は青灰色を呈し、焼成は良く、胎土中に少量の石英・長石・黑色粒を含む。TK208型式に相当するかと思われる。

円筒埴輪（図45、図版30一下）

183・185・186は口径19.2～22cmを測る円筒埴輪の口縁部である。これらの器面調整は外面がやや粗いタテハケであり、内面はタテハケの後、縱あるいは斜め方向のナデが施されている。外面のハケの原体幅は1～2cm前後あり、条線は一単位あたり8ないし9本ある。183・185・186の口縁端部はヨコナデしてほぼ平端におさめている。タガは断面台形状を呈するが、突出度は低く扁平であり、上下端面のユビナデも弱くて粗い。なお、185・186の口縁部にはヘラ記号が、183・184には円形スカシが穿たれている。これらの色調は赤褐色を基調とし、焼成は窯窓により堅く焼き締まっている。胎土中に石英・長石・金雲母・赤色粒を多量に含む。

朝顔形埴輪（図45、図版30）

187～191は口径26～38.8cmを測る朝顔形埴輪の口縁部および体部である。口縁部の形態は外上方に伸びる頸部から直立ぎみに外反する187、直線的に短く開く188、口縁端部の近くを短く外反させた190などがあり、バラエティーに富む。肩部の形態も同様に、丸味をなす189と直線的な191があり、後者には一帯のやや不連続的なヨコハケが施されている。器面調整は、外面が粗いタテハケであり、内面は縱あるいは斜め上方のハケを用いた188～190、タテハケの後に縱および斜め方向のユビナデを施した187・189・191などがある。タガは総じて突出度が低く、断面形は扁平な台形状を呈するが、189のように頸部と体部の境界に断面三角形のタガが巡る例もある。189・191には円形スカシが穿たれている。色調・焼成・胎土は上述した円筒埴輪と変わらない。

（田中）

11) 54号墳

遺構（図11・46、図版9）

II区南トレンチ西よりで検出した。墳丘東西幅は7.2m、南北幅は6.6～6.9mとやや東西に長い。墳丘の方位は、北で約14° 東に振れている。墳丘基底部から残存する墳丘頂部までは約55cmである。

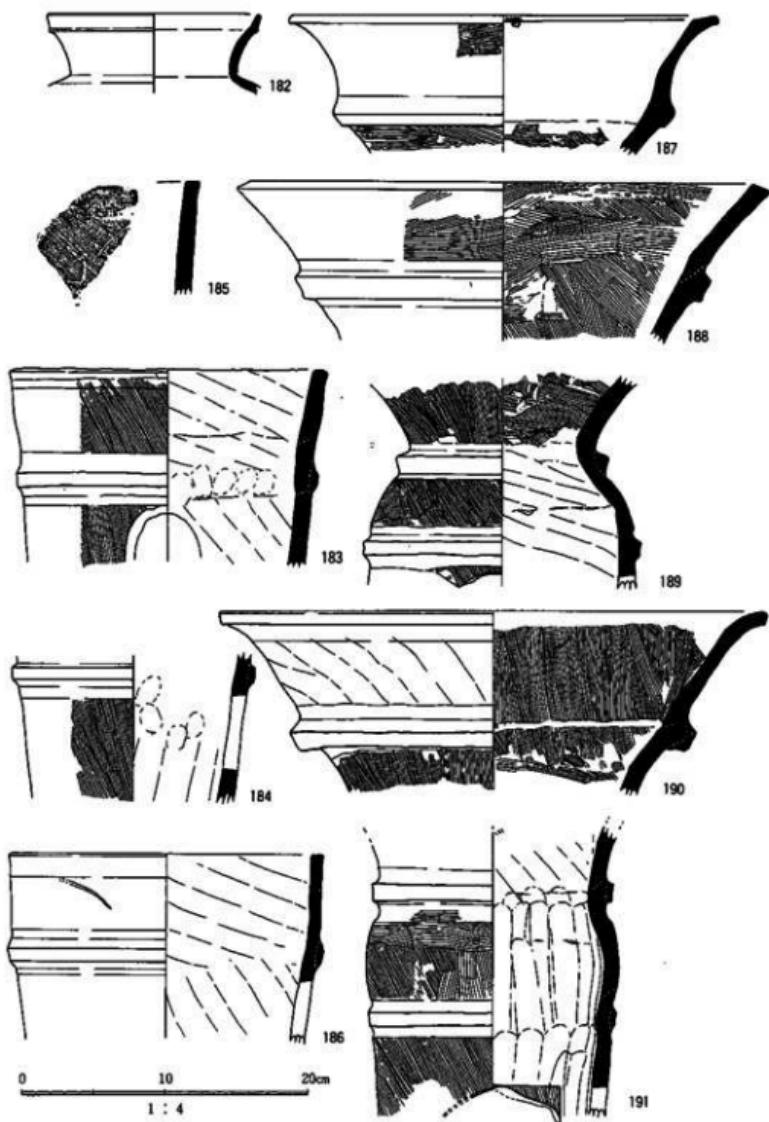


図45 53号出土土器、円筒・朝顔形埴輪実測図  
墳丘頂部（182・184～186）、東周溝（188）、南周溝（183・187）、北周溝（189～191）

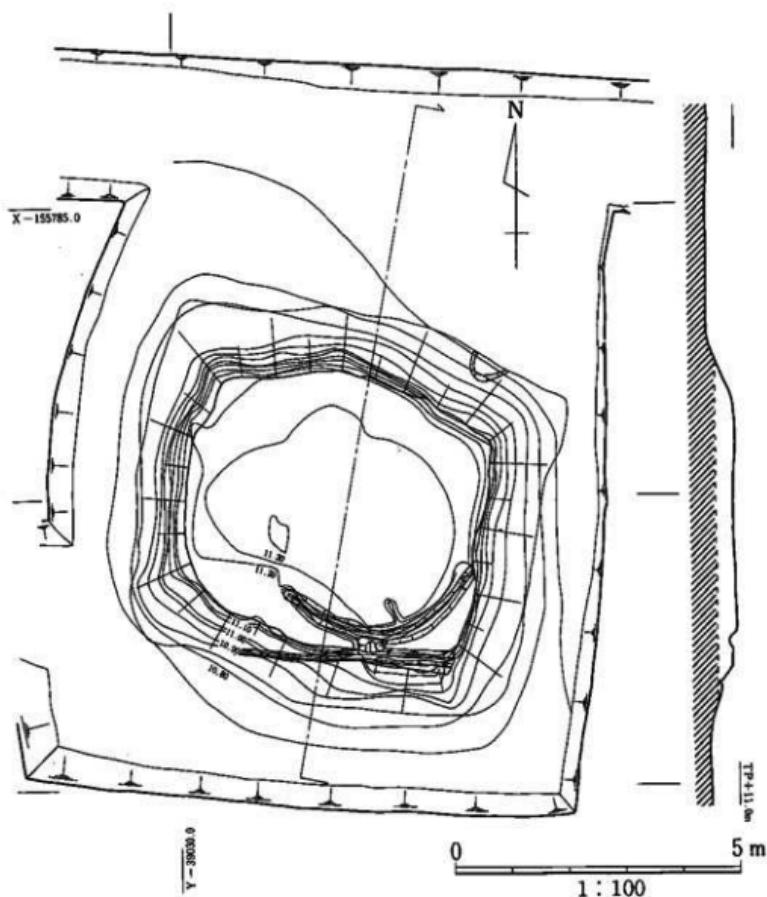


図46 54号墳実測図

周溝と思われる遺構は検出されていないが、52・53号墳と同様に飛鳥～奈良時代の水田耕作によって周溝の検出面が削平を受けたためである可能性が強い。

墳丘北側斜面から基底部にかけて、須恵器の杯身・杯蓋192～200の9点が完形に近い形で検出された。また、朝顔形埴輪204も同所から出土した。また墳丘東側斜面からは須恵器の壺201や土師器の壺202が出土した。

(植木)

## 遺物

## 須恵器（図47、図版31-上）

杯蓋（192～195） 口径10.8～12.8cmで、口縁部はほぼ垂直に下がる194・195と端部の近くで短く開く193がある。天井部はやや丸味をなす193と、扁平な192・194・195があり、時計回りにカキメを施す192・193とヘラケズリで調整する194・195がある。口縁部と天井部を界する稜線はシャープに引き出されたものが多い。色調は灰ないしは青灰色を呈し、焼成は良く、胎土中に石英・長石・黒色粒を含み器表のきめはやや粗い。

杯身（196～200） 口径11～11.2cm、器高3.2cmで、立ち上がりの高さは2cm程あり、やや内傾する198・199および直立した200がある。口縁端部は内傾し、浅く凹む面をもつ199・200と丸くおさめる198があり、受け部の先端は丸くてシャープなものが多い。体部は2／3近くを時計回りにヘラケズリして全体にやや扁平に仕上げている。色調・焼成・胎土は杯蓋と変わらない。

壺（201） 口径20.6cmで、口縁部は直立する頸部からやや内弯しながら二段に開く。口縁部外端面には断面三角形の稜線が引き出されており、口縁端部は杯身と同様に内傾した面をもつ。球形を呈する体部の外面には平行タタキが施されており、内面はていねいにナデて當て具の痕を消す。色調は暗灰色を呈し、焼成・胎土は杯身と同じである。

## 土師器（図47）

瓶（202） 口径24cm、器高22.8cmで、口縁部は体部から直線的に外上方に伸びており、端部は上端がわずかに凹む。体部の外面は粗い縱方向のハケを施し、内面は不定方向にナデて仕上げており、中央部にやや扁平な舌状の把手を挿入する。底部の蒸気孔は中央部に円形の孔を穿ち、その周囲に梢円形の孔を4個設けている。色調は淡い黄褐色を呈し、焼成は不良で幾分もろい。胎土中に石英・長石・チャート・金雲母粒を多く含む。

以上の土器のうち、須恵器は口縁端部を丸くおさめる杯身198以外がTK23型式に、土師器は船橋O-I型式に対比される。

## 円筒埴輪（図47）

203は体部片とみられるもので、器面調整は外面がタテハケであり、内面はタテハケの後、縱方向のユビナデを施す。タガは断面台形状を呈するが突出度は低い。色調は赤褐色で、焼成は窑窓によっており、胎土中に石英・長石・金雲母・赤色粒を含む。

## 朝顔形埴輪（図47）

204は口頸部の小片である。器面調整は外面がタテハケで、内面はタテハケの後、横方

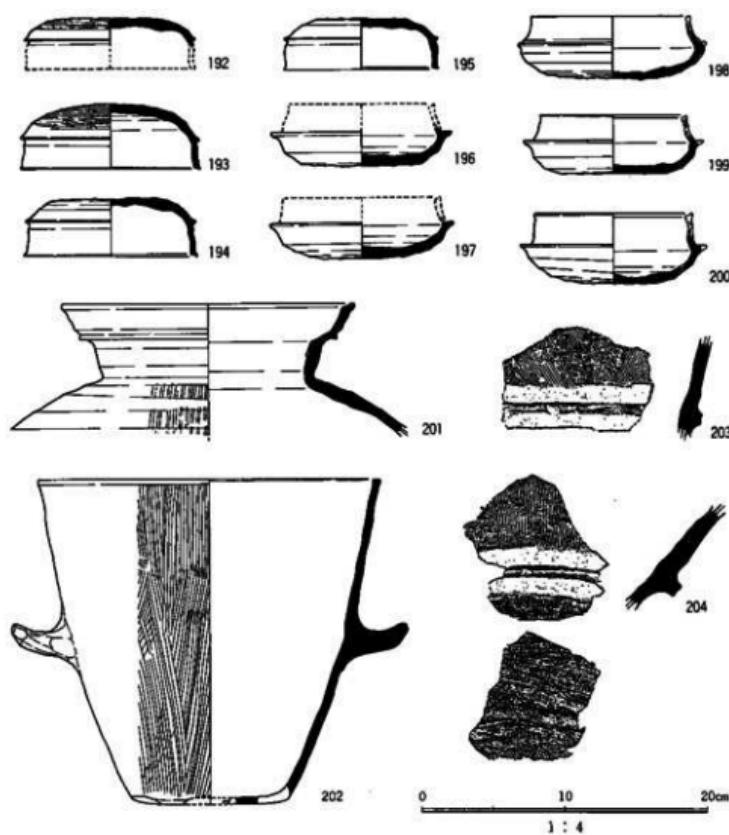


図47 54号墳出土土器、円筒・朝顔形埴輪実測図  
墳丘上面（197）、墳丘北部斜面（192・194・195・203・204）、墳丘東部斜面（200～202）、墳丘北基底部（193・196・198・199）

向のユビナデを施す。タガは断面台形で、突出度は高いが、端面のユビナデは粗い。色調は赤味がかった黄橙色を呈し、焼成は窯窓によっており堅く焼き縮まっている。胎土は円筒埴輪と変わらない。

(田中)

## 12) 55号墳

遺構 (図11)

II区南トレンチ西端部で、墳丘の南東コーナーを検出した。NG第6層に相当する水田耕土の上面より、残存する墳丘の上面まで約27cmを測る。盛土の状況および水田畦畔のとりつく形態から推測して、古墳であることはまちがいないと思われる。ただし古墳のほとんどの部分が今年度の調査範囲外に拡がるため、後日周辺部も含めてより良い条件のもとに全体の調査を行う機会ができるということであったため、それ以上の拡張は行わず、埋めもどした。

(植木)

## 13) 56号墳

遺構 (図11・48, 図版10)

III区のほぼ中央部で検出した。墳丘基底部は東西幅4.8m、南北幅4.9~5.4mと、やや南北に長い。墳丘基底部より墳頂部まで40~50cmが残存している。平安時代以降の耕作により墳丘上半部を削平されていることは他の古墳と同様であるが、墳丘中央部付近に削平されることなく高まりとして残存する部分がある。墳丘の東側斜面に、水田 (NG第6層) の畦畔が取りついでいる

墳丘周辺に周溝らしい遺構は検出されていないが、これも52~54号墳と同様に、NG第6層の水田耕作により、周溝検出面であるNG第13層上面が削平されて発見できなかった可能性が強い。なお、56号墳に伴うと思われる遺物は出土していない。

(植木)

## 14) 57号墳

遺構 (図11・49, 図版11~13上)

III区の東端部に位置する古墳で、墳丘の北半分および周溝の大半は調査範囲外のため、全体の形状や規模などについては明らかでない。また、墳丘の盛土も平安時代以降の耕作によって削平されており、検出時の墳丘は一見三段に築成されたようにみえたが、これは50号墳と同様に墳丘の周囲を削り取られた結果といえる。特に、墳丘の南西コーナーはN

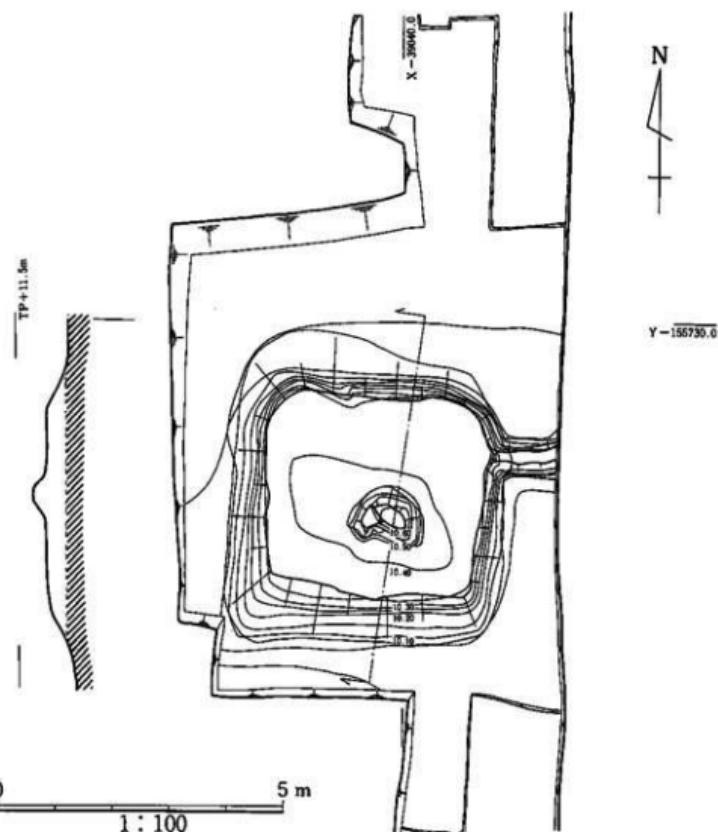


図48 56号墳実測図

G第6層を耕土とする水田によって墳丘の基底部まで段状に大きく抉り取られており、墳丘の東部も江戸時代の坪境の溝で攪乱されて旧状を留めていない。そのため、埋葬施設や墳丘の外部施設などについては不明である。

墳丘の検出時の規模は基底部の中央で東西約15m、南北6.5m以上あり、墳丘の西側には長さ約2m、幅2.8mを測る造出しが設けられていた。

・墳丘は周溝底から高さ約40cm残っており、標高TP+10.7m前後の古墳時代の旧地表

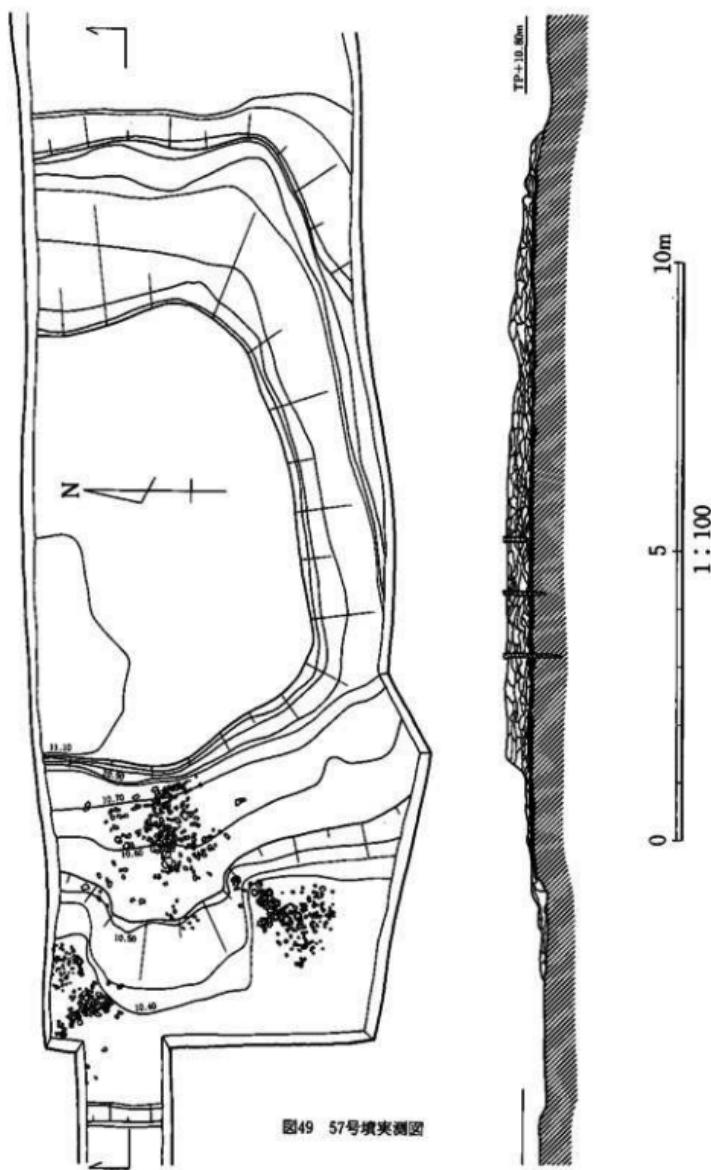


図49 57号墳測量図

(NG第7B層)をベースに、墳丘の周囲から黒色粘質シルトおよび黄白色粘質シルトを盛り上げて築成している。

墳丘の西側では幅約3.6m、深さ15cm前後の断面が逆台形状を呈する周溝が検出されたが、東側については水田および坪境溝の擾乱を受けており認められなかった。周溝内には黒色粘土が堆積しており、造出しの周辺では多量の須恵器や円筒埴輪などが出土した。

造出しへは、周溝の掘削過程に基底部を掘り残した後、若干の盛土を行って形を整えており、その高さは周溝底から20cmを測る。造出し中央部の墳丘斜面よりでは、須恵器の大型甕234が浅い穴に設置された状態で検出されたほか、同北部（底部が穿孔された甕・甌・直口壺・器台・有蓋高杯）および南部（有蓋高杯・甌）において多量の須恵器が円筒埴輪や形象埴輪（馬）などに混在して出土した（図49）。なお、円筒埴輪については個体も原位置を留めたものが多く、配列状況は明らかでないが、造出しの周辺で出土した馬形埴輪や人物形埴輪は既述した須恵器とともに、造出し上に置かれていた可能性がある。

（田中）

#### 遺物

##### 須恵器（図50～53、図版31一下・32～36）

杯蓋（205～217） 口径11～14cm、器高4～5.6cmで、天井部が高く全体に丸味をなす206・207・209・211・212およびやや扁平な205・208～210がある。口縁部と天井部を界する稜線は明瞭に引き出されたものが多い。口縁部は高さ2cm前後あり、ほぼ垂直に下がる205・209をはじめ、やや外反する206・210～212、わずかに内弯する207・208・217などがある。口縁端部は内傾して浅く凹む216・217以外はほぼ平端におさめている。天井部へのラケズリの方向は時計回りで、範囲は全体の2/3以上におよぶものもあり、205は逆台形状のつまみを206・208・215は中凹みのつまみをもつ。色調は灰色を基調とし、206・208の天井部には灰白色ないし緑灰色の自然釉が付着する。焼成は良好で、胎土中に少量の石英・長石・黒色粒を含む。なお、本墳では有蓋高杯が高杯類の過半数を占めており、つまみをもつ蓋は有蓋高杯とセットになるものと思われる。

有蓋高杯（218～221） 口径11～11.6cm、器高9cm前後で、220・221の立ち上がりは高さ2cm前後あり、受け部からやや内傾しながら上方に伸びる。口縁端部は内傾して浅く凹み、受け部はかるく上方に引き出されている。体部のヘラケズリの方向はいずれも時計回りで、範囲は全体の2/3以上におよぶものが多い。脚部は柱状部が裾部に向かって大きく開く219・224～226・228・229、垂直に下がる柱状部から裾部が内弯ぎみに開いた220、柱状部

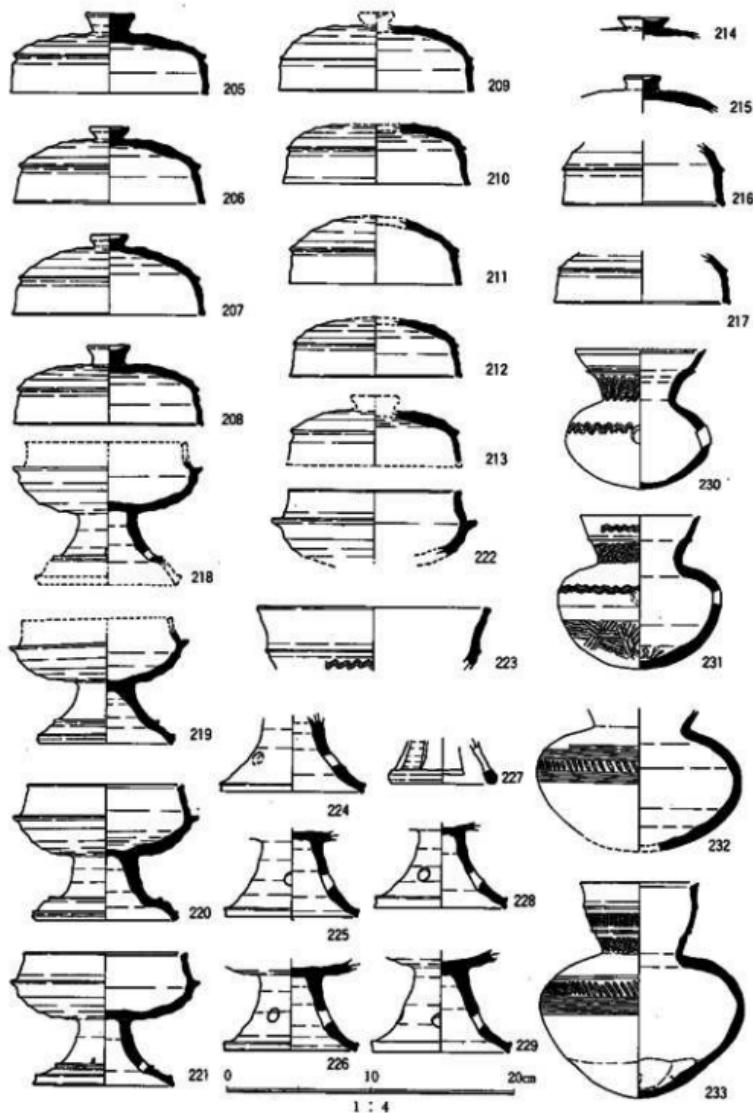


図50 57号墳出土土器実測図

西周溝（211）墳丘頂部西側（216・223・229・232）、墳丘東南部（217）、造出し上および周辺（205～210・212～215・218～222・224～228・230・231・233）

から裾部にかけてゆるやかなカーブを描いて脚端にいたる221などがある。218~221の裾部には鈍い稜線が引き出され、221の脚端部には断面三角形の凸帯が巡るほか、裾部の三方に棒状施文具によるスカシを穿つ。このほか、杯部を欠損するが柱状部からゆるやかに外反しながら開く裾部の三方に円形スカシを穿つ224~226・228や直線ぎみに開く脚端部を丸くおさめ、四方に幅のある長方形スカシを穿つ227がある。なお、口径11.9cmで、立ち上がりがやや内傾しながら上方に伸びる222も底部を欠損するが、有蓋高杯の可能性がある。これらの色調は灰色を基調とし、焼成や胎土は蓋と変わらない。

**無蓋高杯（223）** 口径約16cmで、口縁部は体部から外上方に開き、端部近くを強くヨコナデして面取りぎみにおさめる。口頸部を界する稜線はシャープで、下方には精緻な櫛描き波状文が施されている。色調は黒灰色を呈し、焼成は良好で、胎土中にごく少量の長石粒を含む。

**翫（230・231）** 230は口径9.2cm、器高9.8cmで、体部はやや扁球形を呈し、底部は丸い。口縁部はやや外反ぎみに伸びる頸部から外上方に開き、口頸部の境界にはシャープな稜線が引き出され、口縁端部は内傾して浅く凹む。頸部に一単位7~9本のやや粗い櫛描き波状文が巡り、最大腹径部には櫛描き波状文を施した後に円孔を穿つ。色調は暗青灰色を呈し、焼成は堅微で、胎土中に少量の石英・長石粒を含む。

231は口径8.4cm、器高10.6cmで、体部は全体に肩の張った扁球形を呈している。口縁部は頸部から外上方に開き、口頸部の境界にはやや鈍い稜線が巡る。口頸部および体部には一単位7本前後の稚拙な櫛描き波状文が施され、最大腹径部に円孔を穿つ。体部下半から底部にかけて粗い平行タタキが残り、底部を穿孔する。色調は紫色をおびた青灰色を呈し、焼成は良好で、胎土中に石英・長石粒を含む。

**壺（232・233）** 233は口径8.4cm、器高14.8cmで、体部は全体に肩の張った無花果形を呈し、底部を内面から突き出して成形した直口壺である。口縁部は内窵しながら立つ頸部から直立ぎみに伸び、端部は内傾して凹む面をなし、蓋の口縁端部に酷似する。口頸部の境界および頸部には断面三角形のシャープな稜線が引き出され、この間を一単位9本前後の櫛描き波状文が巡る。体部の上半はカキメで調整した後、刺突文を施す。色調および焼成や胎土は翫231に酷似しており、口縁部を打ち欠くほか底部を穿孔する。232もやや扁平な球形の体部から口頸部が外反する壺で、底部を穿孔する。色調や胎土は233と変わらない。

**甕（234~241）** 甕は大型と小型に二分される。234は口径51cm、器高約90cm前後に復原された大型の甕である。口縁部は頸部から外上方に伸び、端部を上下につまみ出す。口頸

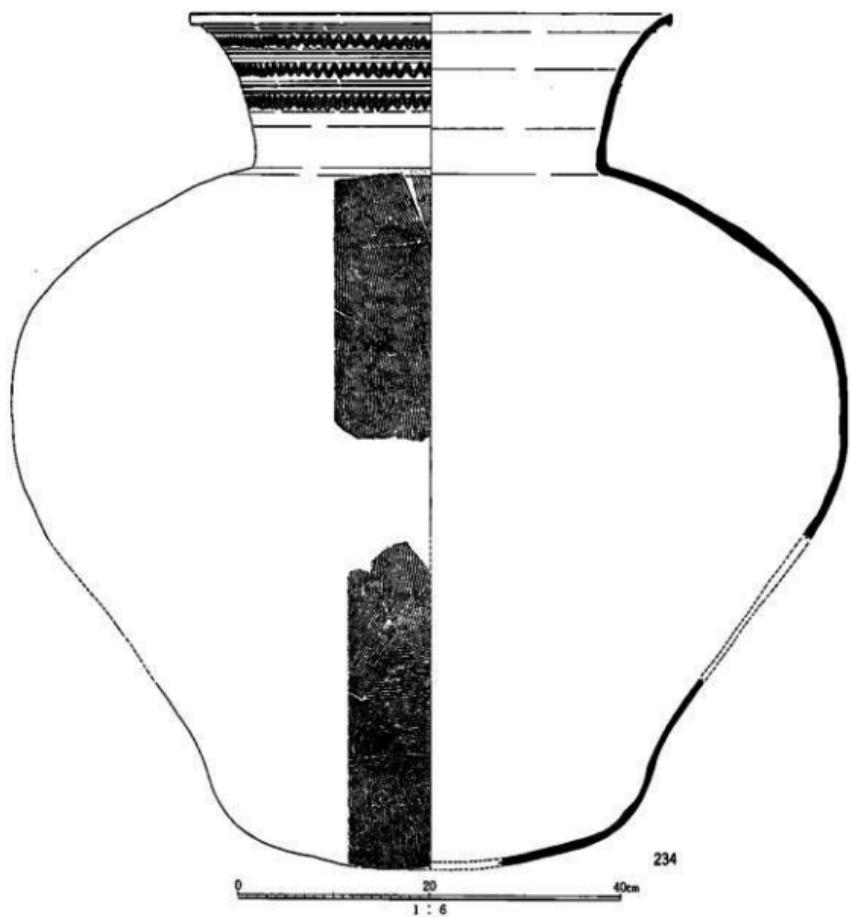


図51 57号墳出土土器実測図 造出し上部 (234)

部には2条一単位の鈍い凸帯が2帯巡り、凸帯間および上下に一単位7～9条の櫛描き波状文を施す。最大径は体部の中央部であり、器表面にやや細かい平行タタキを施し、内面の同心円文はていねいなナデで消す。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好で堅く焼き締まり、胎土中に石英・長石・黒色粒を含む。なお、底部の中央部を焼成後に穿孔している。

235～241は口径18～24cmを測る壺で、体部を欠損するものが多い。完形に近い240・241は口縁部に打ち欠き、底部に穿孔がみられる。235・236・238・240・241の口頭部は外上方に伸び、口縁端部の近くで段をなして開き、端面をわずかに上下に引き出して鈍い稜をつくる。237・239の口頭部は外上方にゆるやかに開き、口縁端部の近くに断面三角形の凸帯が巡る。235・236・238・240・241の口頭部には1ないし2条のシャープな断面三角形の稜線が引き出され、この間に精緻な櫛描き波状文を施すが、236・238には文様はみられない。240・241の体部は張りのある球形を呈し、240は器表面を平行タタキで成形した後、胴部の下半から頸部をカキメで調整し、内面は同心円文をていねいなナデで消す。241は器表面を平行タタキで成形した後、頸部の付近をカキ目で調整し、体部の上半から下半にかけて螺旋状のナデを施す。内面の調整は底部がケズリ風の強いナデ、体部は粗いナデであり、細かい同心円文がわずかに残る。色調は黒灰色を呈する239以外は暗青灰色で、焼成は良く、胎土は蓋や有蓋高杯と変わらない。239の頸部には黒緑色の自然釉が付着する。

**器台 (232～247)** 242・243は同一個体とみられる筒形容器台の筒部および脚裾部である。杯状部の下半にはカキメが施された後シャープな稜が引き出され、筒状部の上部は退化した壺状を呈し、肩部には粗い刺突文と2条の浅い凹線文が巡る。筒状部のくびれ部には勾玉様の貼付装飾があり、肩部下の四方に長方形スカシを穿つ。脚裾部は径約26cmあり、内弯ぎみに下がる脚端部は左右にわずかに伸びて稜をなす。色調は黒灰色を呈し、焼成は良好で、胎土中に長石・石英・黒色粒を含む。

244～247は高杯形器台である。244は245と同一個体とみられる器台で口径約35cm、器高28cm前後に復原された。口縁部はゆるやかに内弯しながら伸びる杯体部から段をなして上方に短く開き、口頭部の境界をやや丸味をもつ断面三角形の稜が巡る。口縁端面は上下に鈍い稜をなす。杯体部の器表面を2条一単位の鈍い稜線で区分して、この間に一単位8～9本の櫛描き波状文を施す。脚部はわずかに外反しながら裾へ広がり、やや内弯しながら脚端部に至る。脚端部は断面台形状を呈し、左右にわずかにふくらみ鈍い稜をなす。脚部の器表面は2条一単位の断面三角形の稜線で三段に区分され、各段に一単位6～7本の櫛描き波状文を施した後、長方形あるいは三角形のスカシを穿つ。

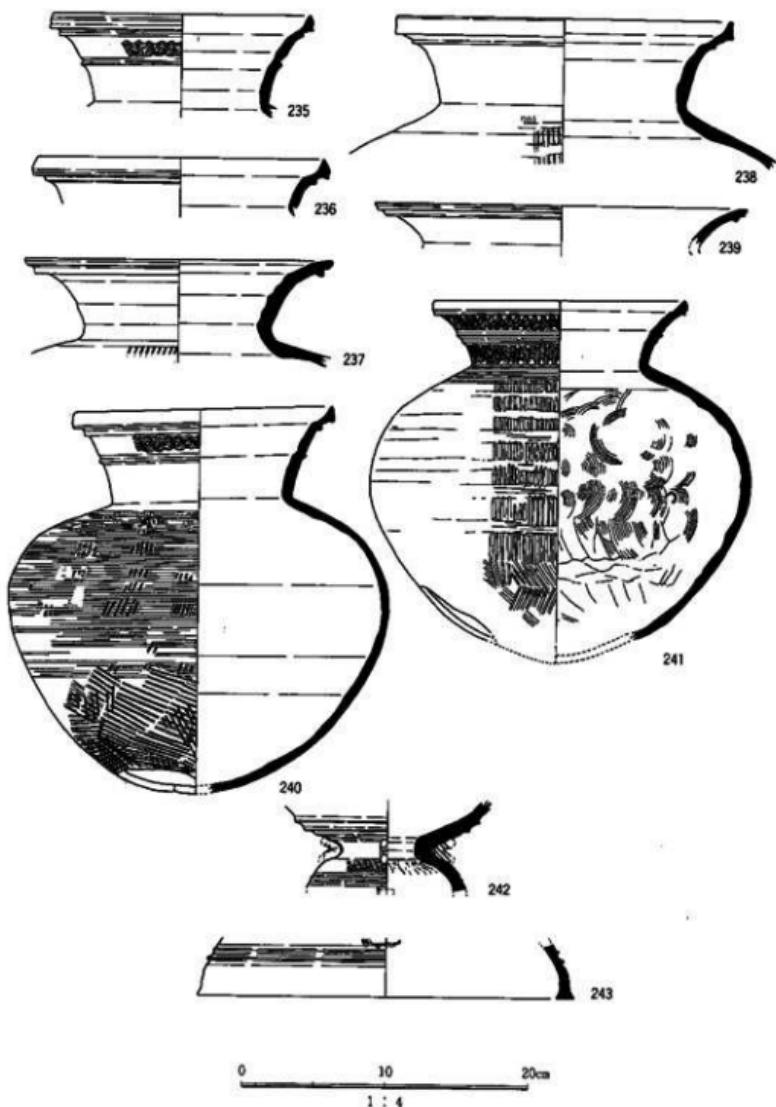


図52 57号墳出土土器実測図  
造出し上および周辺 (235~238・240~241)、墳丘上面 (239)、墳丘東部斜面 (243)

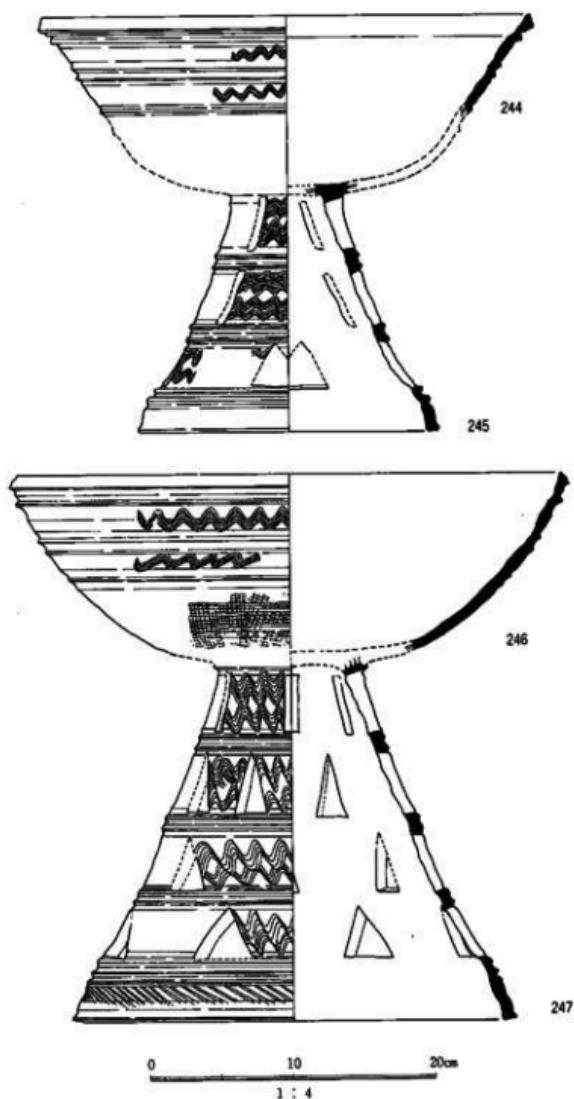


図53 57号墳出土土器実測図  
墳丘南西部斜面 (244・246・247)、造出し上 (245)

246・247も同一個体と思われる器台で口径約40cm、器高38cm前後に復原された。口縁部は内窪しながら伸びる体部から段をなして上方に短く開き、端部は上下にわずかに伸びて鈍い稜をなす。口頭部の境界および体部の器表面を断面三角形の稜線で区分して、各間に一単位7本前後の櫛描き波状文を施す。脚部はわずかに外反しながら裾部に向かって広がり、裾部は直線的に短く開く。脚端部を強くヨコナデしてシャープな稜を引き出している。器表面を2条一単位の鈍い断面三角形の凸帯で5段に区分して、斜め方向の粗い刺突文が巡る5段目以外の各段に一単位9本前後の櫛描き波状文を施した後、長方形あるいは三角形のスカシを穿つ。色調は暗灰色を基調とし、焼成や胎土は筒形器台と変わらない。244の内面および245・249の器表面には灰緑色の自然釉が付着する。

以上の須恵器はおおむねTK208型式の範疇に含まれるものと考えられるが、有蓋高杯219～221や高杯の脚部227をはじめ壺237・240・241はON46段階に、混入品とみられる蓋216・217はTK23型式に対比しておきたい。  
(田中)

#### 形象埴輪(図54、図版37-上・中)

248～251は同一個体とみられる馬形埴輪の破片であるが、欠損部分が多く全体の様子や馬具装着の状況については良くわからない。248は頭部で、つくりは中空である。先端を欠損するが先細りの耳は斜めに伸び、耳の前後には面繋および引手と思われる浅い線刻があるが辻金具の表現はみられない。目は穿孔によって表現されており、たてがみの貼り付け痕跡が目の後方上に認められる。外面を細かいハケで整えており、色調は赤味をおびた褐色を呈し、焼きは土師質である。249は胴の一部で、粘土を貼り付けて鞍橋を、浅い線刻によって手綱を表現する。鞍橋は1/3ほど残り、下端がやや幅広く写実的につくられている。250は障泥の破片で、浅い線刻によって輪轂が表現され、左上に円形スカシを穿つ。251は首の一部かと思われるもので、外面を細かいハケで整えており、内面には粘土紐の接合痕がみられる。252・253は人物埴輪の腕と思われるもので、つくりは中空である。肩部に挿入した形跡があり、指の表現は認められないものの、手にあたる部分をやや薄くしている。254も人物の胸部の一部で、下端の近くに衣服の表現とみられる浅い線刻がある。

以上の形象埴輪の色調は赤味をおびた褐色を基調とし、焼きは土師質で、胎土中に長石・石英・角閃石・金雲母粒を含み、後述する円筒埴輪に酷似している。

#### 円筒埴輪(図55、図版36・37-上)

255・256は口径22.5～24cmで、口縁部は体部から直立ぎみに上方に伸びる。口縁端部は上端が浅く凹み、左右にわずかな稜をなす。259も同様な口縁部の破片である。器面調整

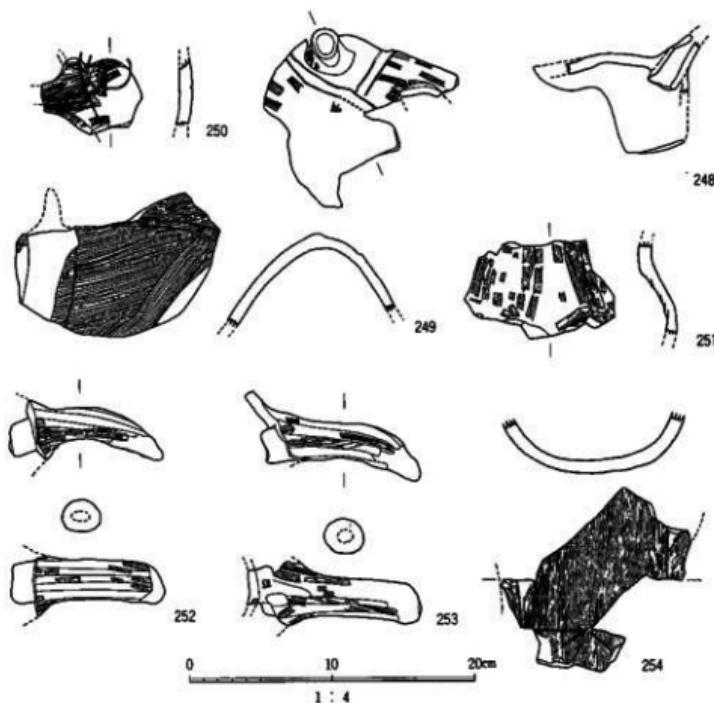


図54 57号墳出土形象埴輪実測図

造出し前面西周溝 (248・253)、造出し西部斜面 (249・250～252・254)。

は、外面が細かいタテハケのみで、内面はタテハケの後、ユビナデを縱および斜め上方に施す。タガは断面台形状を呈するが全体にやや丸味をもち、タガの貼り付けは粗く下端のユビナデも粗雑で、突出度は低い。255・256は円形のスカシを穿つ。255は口縁部、256は口縁部から体部にかけて黒班が認められる。260～272は体部と思われるもので、器面調整はヨコハケを施す269以外は255・256と変わらない。タガの形態は三角形272、台形256・262・269、M字形263・264などバラエティーに富む。257・258は底径11.5～14.8cmで、わずかにくぼむ底面から内窯ぎみに伸びる小型の円筒埴輪の基底部である。器面調整は外面が細かいタテハケのみで、内面はタテハケの後、ユビナデを斜めまたは縱方向に施す。

以上の円筒埴輪の色調は赤味をおびた褐色を呈し、胎土中に石英・長石・角閃石粒を多

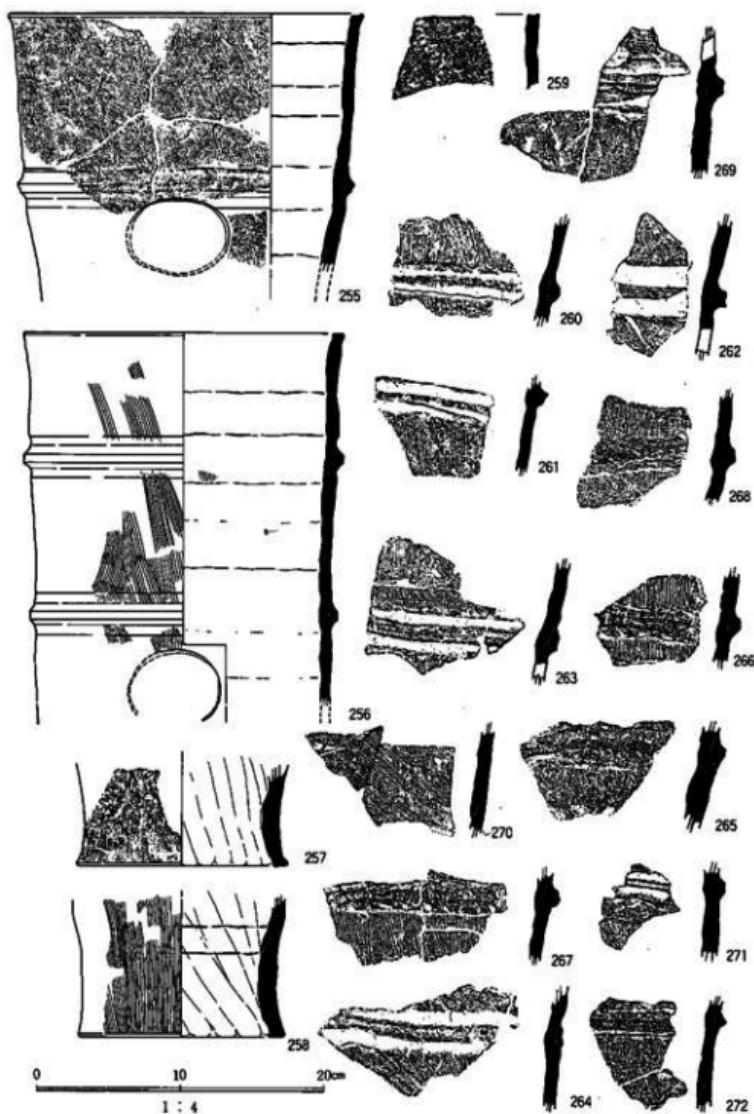


図55 57号墳出土円筒埴輪実測図  
造出し周辺 (255~272)

く含み、焼は土師質で、255～257・259・267・268・269には黒斑がみられる。なお、57号墳では図示した以外にも多量の円筒埴輪の破片が出土しているが、黒斑がみられるものが多く、いわゆる須恵質の埴輪は確認されなかった。

(田中)

### 15) 58号墳

造構 (図56、図版14-上)

IV区中央やや西よりで検出した。墳丘の東西幅は墳丘基底部で13.0mであり、長原古墳群の中では大規模な部類に属する。南北幅については、端部が調査範囲外に拡がるため明らかでない。

墳丘の東側及び西側では周溝と思われるくぼみが発見された。東側は幅2.2mで深さ20cm、西側は幅2.3mで、深さは40cmある。北側および南側は未検出であるが、おそらく周溝は全周するものと思われる。

墳丘上半部は平安時代以降の開発による削平を受けており、盛土部分は厚さ20cm程度が残されているのみである。墳丘上には耕作に関連すると思われる二本の南北溝が掘り込まれている。いずれの溝も上端2.4～2.6m、下端1.3～1.8m、深さ40cmの逆台形およびU字状の断面を呈する。

IV区の西端部は旧東除川の流路に接する位置にあるため、西方に行くにつれ、洪水により運ばれた砂の堆積層が厚くなっている。58号墳の周辺でも同様な状況にあり、NG第13層上には直接この砂層が堆積し、飛鳥～奈良時代の水田耕土であるNG第6層の灰色粘土は洪水により流されたためかほとんど見られない。同様に周溝埋土についても他の古墳と異なり黑色粘土が見られず、洪水堆積層により充填されている。

東側周溝を埋積する粗砂層中から、須恵器273と円筒埴輪275が出土し、また墳丘上面から円筒埴輪274～276が出土した。

(植木)

遺物

58号墳では墳丘頂部および東西周溝内から須恵器や円筒埴輪が出土した。しかし、円筒埴輪については破片が多く、しかも後世の砂疊層中に含まれていたため、あまり良好な資料とはいえない。

須恵器 (図57、図版36-下)

器台 (273) 東周溝内から出土した器台の脚部と思われる破片である。器表面を鈍い断面三角形の稜線で区分して区画間に4帯の精緻な縦書き波状文を施した後、長方形のスカ

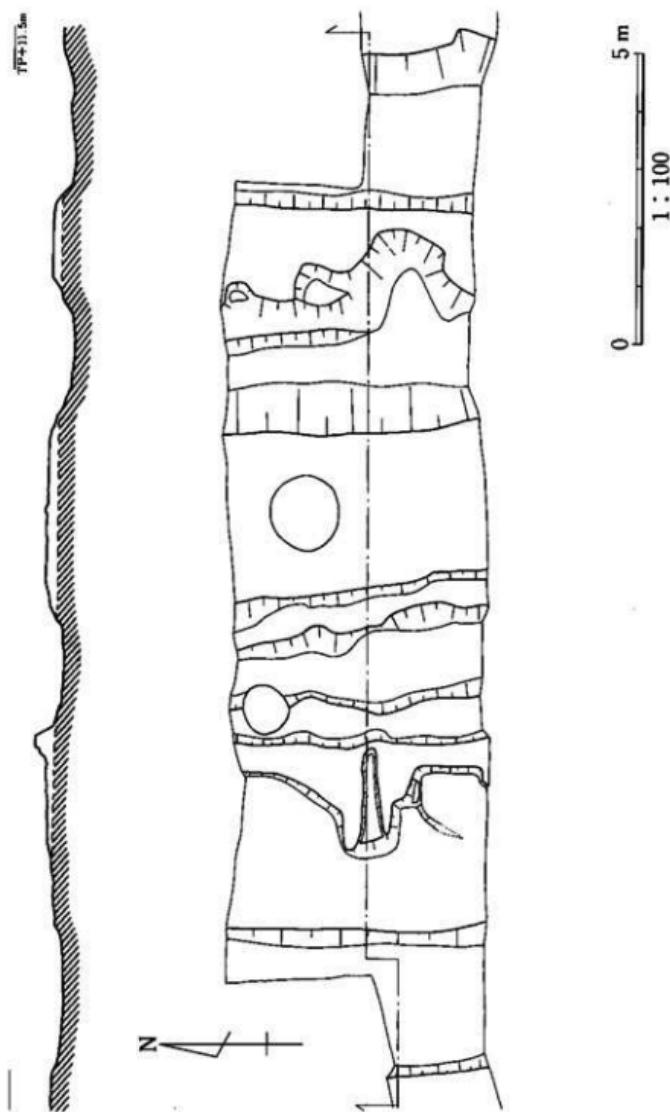


図56 58号墳実測図

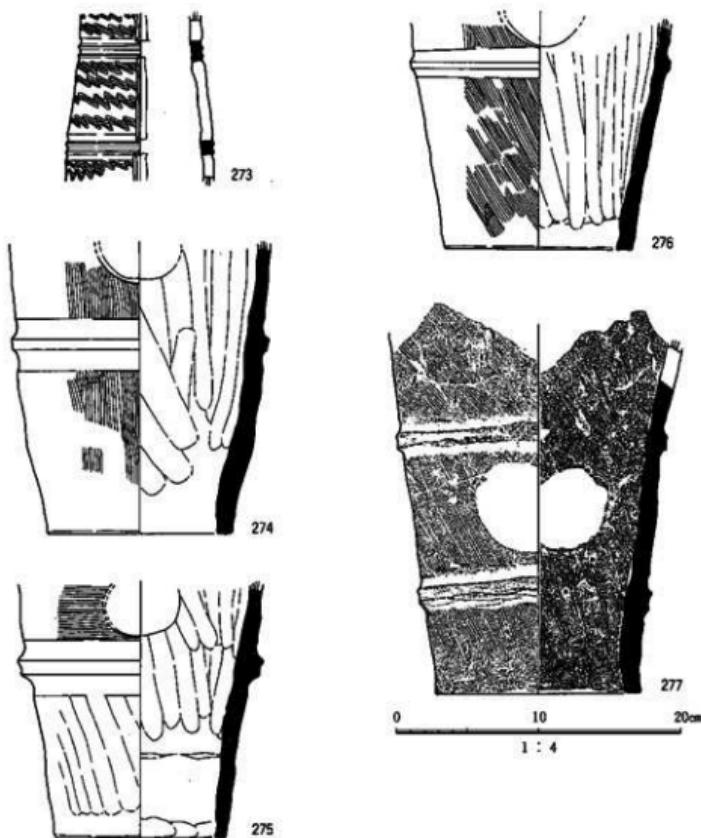


図57 58号墳出土土器、円筒埴輪実測図  
東周溝 (273・275)、墳丘上面 (274・276・277)

シを穿つ。色調は暗青灰色を呈し、焼成は良好で、胎土中に長石・石英粒を含む。

埴輪（図57、図版37－中・下）

円筒埴輪（274～277） 基底部径11.7～14.4cm、残存部の器高が16～26cmを測る円筒埴輪である。外面の調整は一次調整の断続的なヨコハケを施した後、基底部を縦方向のユビナデで整える275および断続的なタテハケを施す274・276・277がある。内面の調整は全て縦方向のユビナデであり、275・276は基底部の端部近くを横方向に強くナデ、277の基底部の端部には粗いユビナデが施されている。タガの形態は274～276が断面台形状で、277はM字状を呈しており、いずれも突出度は低く、第1段タガの上に円形のスカシを穿つ。色調は274～276が灰白色を基調とし、277は暗赤褐色を呈し、須恵質で堅緻である。胎土中に石英・長石・金雲母粒を含む。  
(田中)

### 第3節 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

#### 1) 水田（図59～62、図版14－下・15）

飛鳥～奈良時代の長原遺跡の景観は、広範囲にわたる水田地帯であった。これは第II章第1節でも述べたように、7世紀前半頃、旧東除川という灌漑用水源を瓜破台地の上に通すことによって形成された。当調査区においても水田遺構のほかは見るべきものはない。飛鳥～奈良時代の水田遺構を上層からいうと、洪水層であるNG第5層で埋没するNG第6A層上面の畦畔、水田耕土であるNG第6A層の下に一枚薄い水成層を挟在させて存在するNG第6B層上面あるいは、NG第7A層上面の畦畔がある。またI区ではどの層を耕土としたときの溝かは限定できないが、古墳周溝を結ぶかのように設けられた溝（SD01～05）もある。I区も断面土層で水田耕土層が確認されている（NG第6A層上面でTP+10.38～10.76m）。水田面の高低を検討すると、西高東低、南高北低で、II区とIV区の一部で上下に複数の水田面が確認されている。水田耕土に含まれる遺物は少なく、図58は52号墳南周溝上部の黒色粘土層から出土した須恵器杯蓋である。

II・III・IV区では、NG第6A層上面の畦畔を19条（SR01～19）、NG第6B層上面の畦畔を3条（SR20～22）、NG第7A層上面の畦畔を3条（SR23～25）検出した。I・II・III・IV区で検出された畦畔は次表のとおりである。

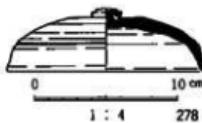


図58 II区NG第6A層出土  
土器実測図

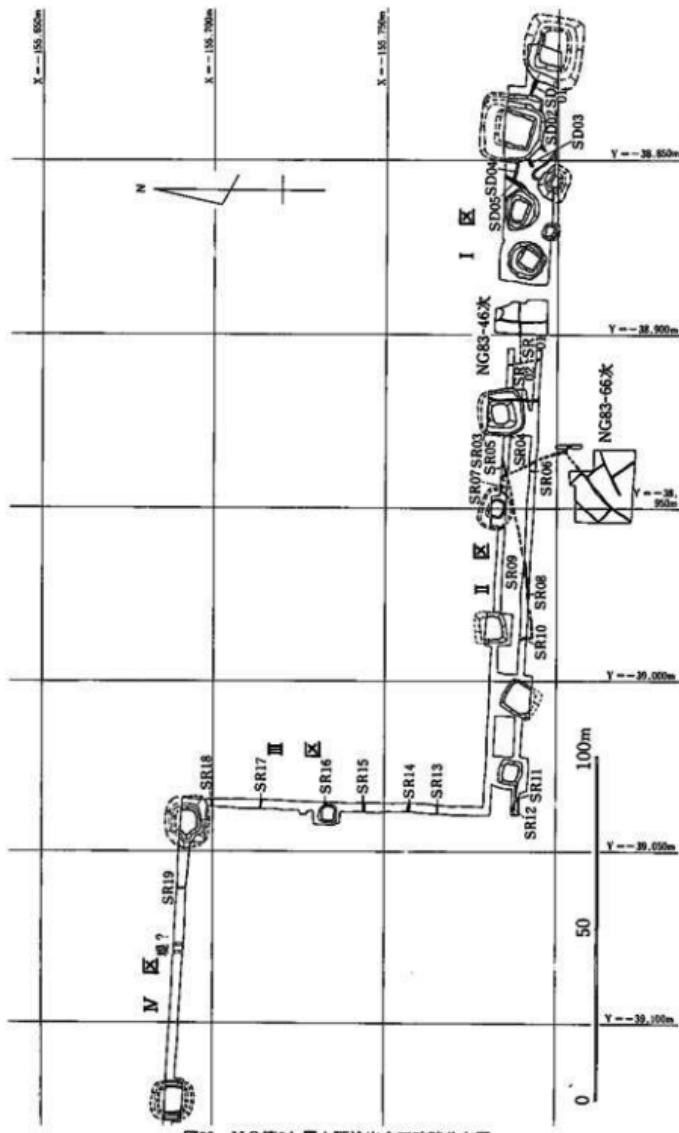


図59 NG第6A層上面検出水田畦畔分布図

遺構番号	地区	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高さ(cm) (TP値:m)	方位	検出した長さ(m)	備考
SR01	I	40	50	5~10 (10.66~10.71)	N-10°-W	10	
SR02	I	25~50	60~100	10~16 (10.68~10.75)	南北	15	
SR03	I	15	36~50	10 (10.68)		0.8	50号墳との間に水口あり
SR04	I	20~25	45~60	5~10 (10.74~10.82)	N-25°-W	23	下層でSR21を検出
SR05	I	25~60	50~70	8 (10.69~10.72)	E-15°-N	4	水口あり。下層でSR20を検出
SR06	I	20~40	40~70	6 (10.79)	南北	2	SR04にとりつくか
SR07	I	25~35	40~70	5 (10.80)		1	
SR08	I	15~80	40~60	5 (11.02~11.06)	E-7°-N	12.5	
SR09	I	22~80	45~60	10 (11.04)		0.8	SR08から派生する
SR10	I	20~35	50~60	5 (11.06)	N-20°-W	1.5	
SR11	I	45~100	90~110	12 (11.06)		0.6	SR12にとりつく
SR12	I	15~55	55~80	8~12 (11.02~11.12)	E-7°-S	7	54・55号墳にとりつく
SR13	I	20	80	10 (10.96)	E-1°-S	2.2	断面カマボコ形
SR14	I	70	105	12 (11.00)	E-5°-S	2.2	大鞋跡になるか
SR15	I	40	60	11 (10.90)	東西	2.4	
SR16	I	45	60	12 (10.90)	E-4°-N	1	56号墳にとりつく
SR17	I	85	50	14 (10.78)	E-3°-S	2.2	断面台形
SR18	I	35	45	14 (10.67)	E-3°-S	2.2	断面台形
SR19	II	30	40	10 (10.98)	南北	2	
SR20	I	20	45~55	15 (10.65~10.70)	E-18°-N	4	SR05の下層
SR21	I	25	55	12 (10.72~10.75)	N-25°-E	2	SR04の下層
SR22	I	22~80	40~60	7~10 (10.72)	N-45°-E	1.1	
SR23	II	15	35	6 (10.74)	南北		断面土層で確認
SR24	II	25	35	8 (10.72)	南北		断面土層で確認
SR25	II	30	50	10 (10.82)	南北		断面土層で確認

表4 NG第6A層上面検出水田畦畔一覧

当調査区で検出した古代の水田畦畔は以上のようなものであるが、当協会や大阪文化財センターなどの調査で1987年度末までに、周辺の状況がかなり明らかになっている。筆者が把握できた範囲で、当調査区の性格をみていくたい。

[黒田1986]で問題にした、約110m間隔で設定された大畦畔に該当しそうな畦畔として、III区に位置するS R14がある。上端幅70cm、下端幅105cm、高さ12cmで、近畿自動車道予定地内で検出された図62の②③⑤⑦⑨の東西大畦畔〔藤永1986〕よりも小規模であるが、⑨との距離が564mであり、大畦畔の南北間隔の整数倍に近い。南北間隔約110mというのは②の大畦畔が南にカーブした③の位置から⑦までの間隔、および⑦から⑨までの間隔であり、②から⑦までの間隔は114.0mというように、S R14(図62の③)から⑨までの間隔を整数で割った113mよりも大きく、したがって3mの誤差は長原遺跡の大畦畔ではあり得べきものと考える。

一筆の田積の復元できる遺構は少ないが、従来の調査結果を合せ考えても、小畦畔で囲まれた一筆の田積はさほどの意味をもたないようである。〔吉田1988、p187〕は1町四方の田積を、日常的な農耕の単位となる小家族の耕地面積（1町は夫婦と男女の子供、4人の口分田額に相当する）に起因することを示唆されているから、大畦畔で1町毎の区画さえ完成しておけば、水田の管理の上で不都合は生じなかつたと思われる。

他の小畦畔は規則性をもつ大畦畔と違って、地形に左右されて設けられているが、〔乙益1980〕で述べられた「小あぜ」「てあぜ」のような融通性はもっておらず、一筆の田積と区画の位置は固定化している。それは長吉市宮住宅敷地での発掘調査（NG 86-109・87-35）で洪水によって埋没した後、旧軌に規定されて小畦畔を設けている事実からも頷ける。小畦畔で区画された一筆の水田も固定化した所有権を示すかのようである。

## 2) 溝 (図11・61)

I区の東半部、44号墳と45号墳の間で1条（S D01）、その西側の45・46・47号墳で囲まれた個所で4条（S D02～05）の素掘り溝を検出した。いずれの溝もNG第13層上面が検出面である。埋土は黒色～黒灰色の粘土であり、古墳の周溝最下層とほとんど区別がつかない。I区では平安時代以降の耕作による掘削がNG第6層の上面にまで及んでいる個所が多かったため、飛鳥～奈良時代の水田畦畔の位置が明確には確認できていないが、長原遺跡で検出されるこの時期の畦畔は古墳のコーナーに取り付く例がしばしば見られる。検出された溝は、あたかも45号墳の周溝から放射状に延びているかのように見えるが、こ

第3節 猿鳥～奈良時代の造構と遺物

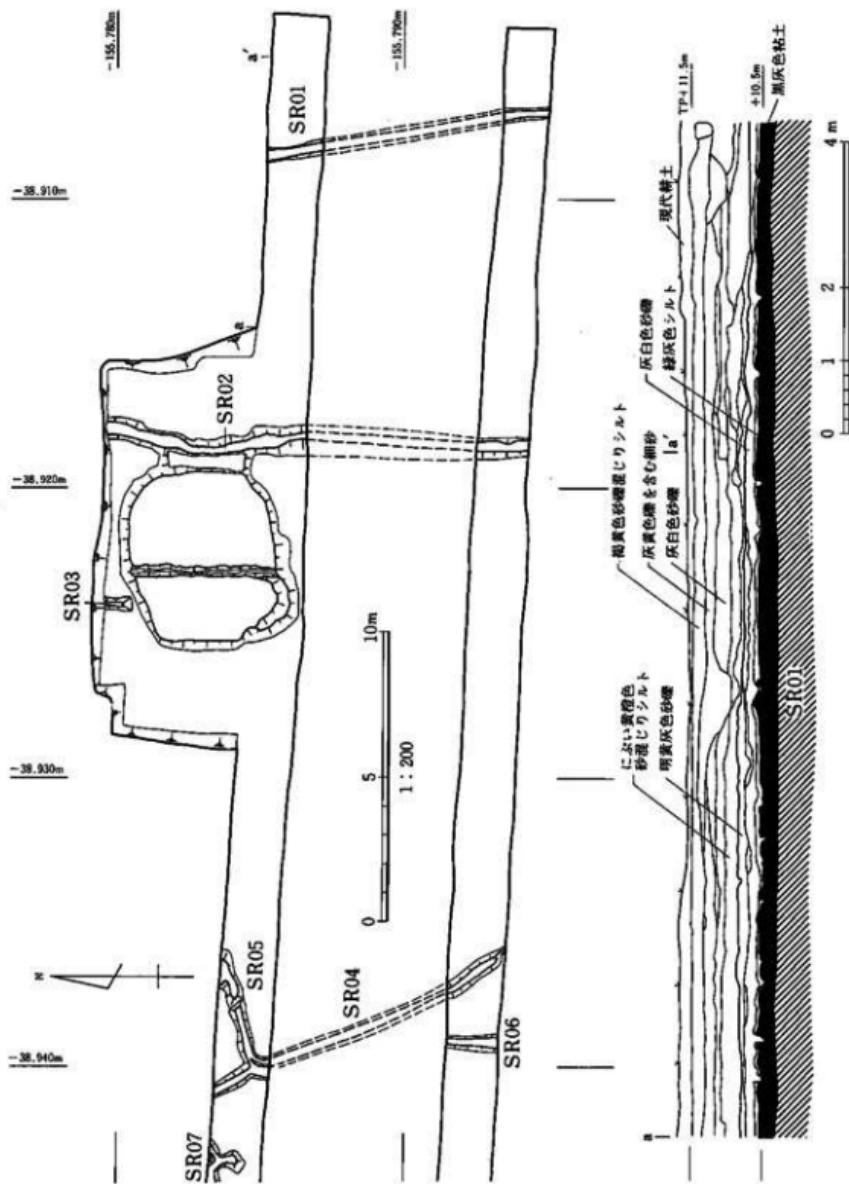


図60 II区東半N-G第6A層上面検出水田畦畔実測図

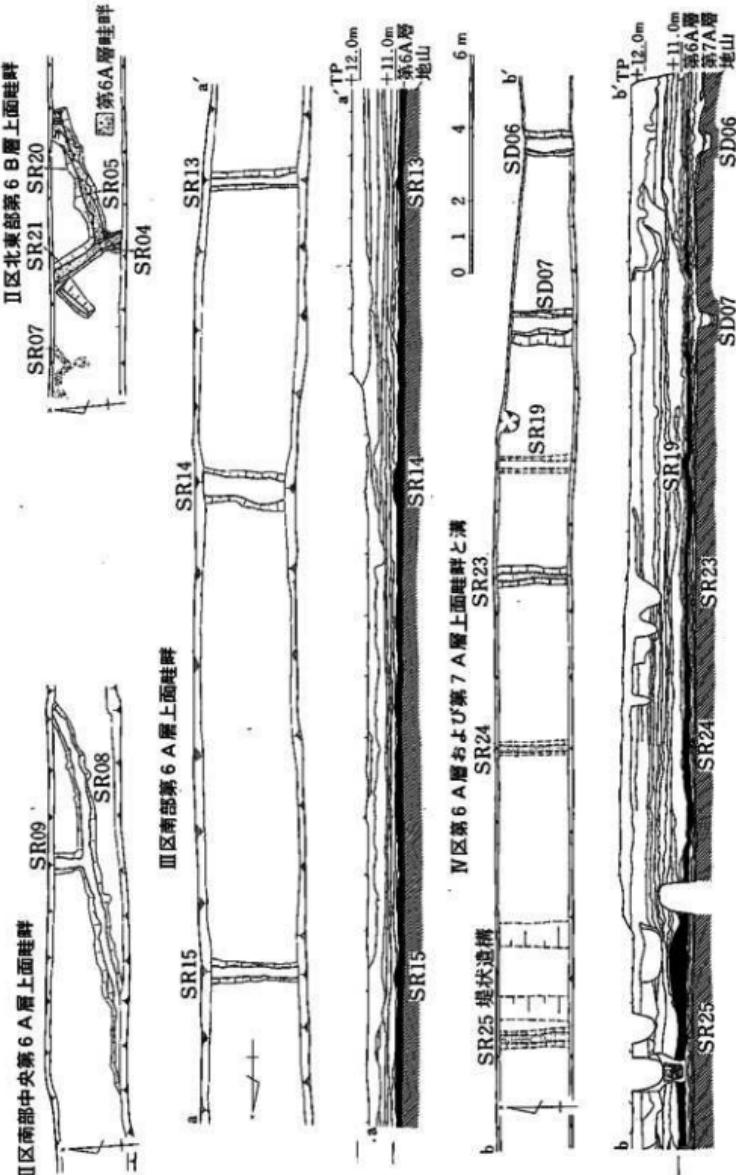


図61 II・III・IV区N G第6A層上面検出水田畦畔実測図

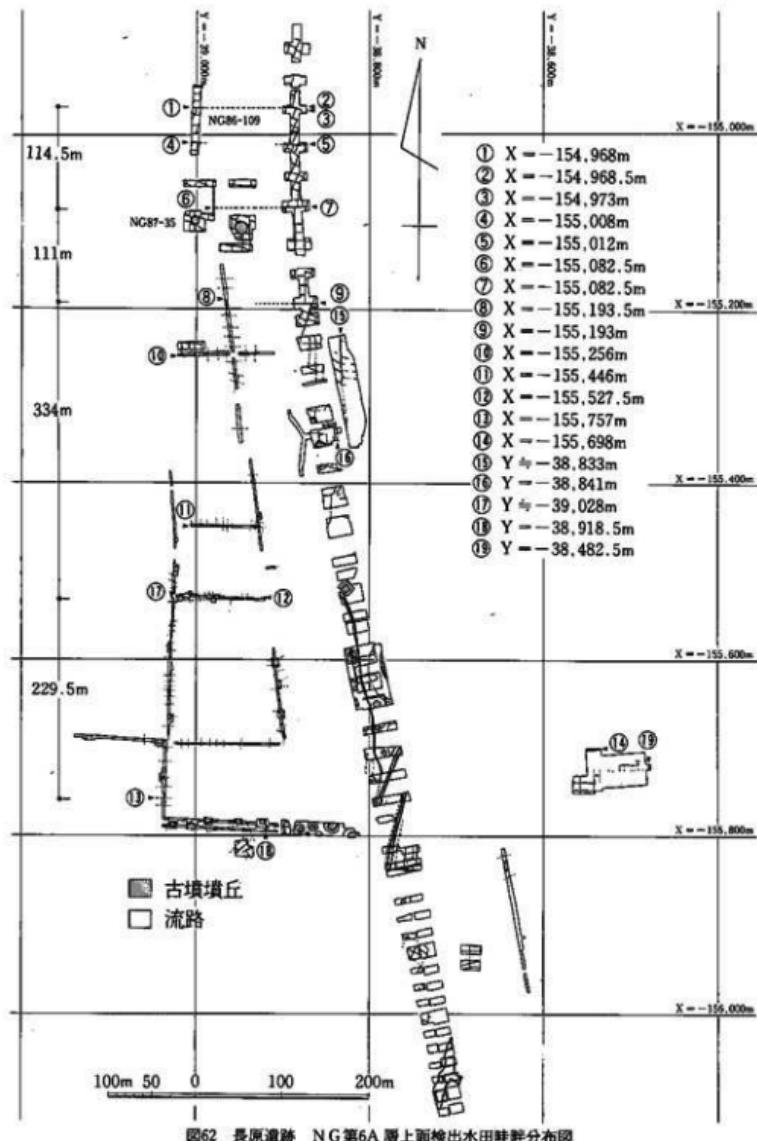


図62 長原遺跡 NG 6A 層上面検出水田畦跡分布図

のような形態は水田畦畔の分布にも類似している。以上のことから、これらの溝は古墳に関係するというよりも、同時期の水田耕作に関連する給排水のための溝ではないかと考えられる。

また、IV区東端部では、NG第6層の水成層下面で溝2条（SD06・07）を検出した。NG第7A層を水田耕土としていた時期の灌漑・排水用の溝であろう。各溝の規模・特徴は次表の通りである。

遺構番号	地区	上端幅 [m]	下端幅 [m]	深さ [m]	方位	検出した長さ [m]	断面形	備考
SD01	I	95~15	35~5	11	N-70°-W	5	浅い皿状	45号墳と接合する円筒埴輪出土
SD02	I	45以下	12以下	5	N-85°-E	1.7	浅い皿状	
SD03	I	45~30	20~10	8~6	N-62°-E	2.6	浅い皿状	
SD04	I	20	10	8~7	N-85°-E	4.7	浅い皿状	SD05に合流
SD05	I	60~90	20~80	6	N-80°-E	7	浅い皿状	
SD06	II	70	45	35	南北	1	逆台形	
SD07	II	50	25	50	南北	1.5	逆台形	

表5 NG第6層下面検出溝一覧

(黒田)

#### 第4節 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は第1節でも述べたように、II区の中央部以西でNG第4層の下面から井戸・土器埋納ピット・火葬墓などが検出されたにすぎない（図63）。

##### 1) SE401

遺構（図63・64、図版16-上）

II区北トレンチのほぼ中央部、52号墳の南周溝上に位置する井戸である。井戸の掘形はやや不整形な円形を呈し、径2.2~2.5mで、深さは2.7m以上ある。遺構の上部は後世の水田の耕作によって擾乱されていたが、掘形は肩口が広く、下半分はほぼ垂直に井筒が入る大きさに掘り込まれている。掘形内には直径68cm前後の底を抜いた曲物を積み上げた井

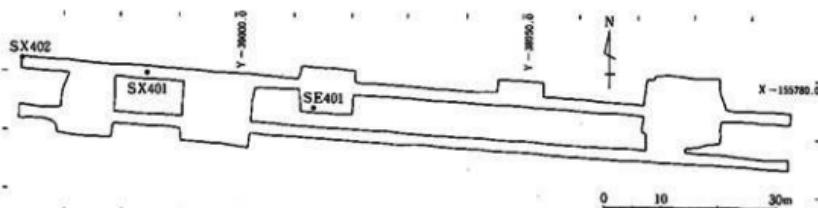


図63 平安時代遺構配置図 (II区)

筒が組み込まれており、最下段には直径40cmの小型の曲物が用いられていた。井筒内には暗灰色シルト混り砂礫および暗灰～灰褐色砂混りシルトが堆積しており、掘り形と井筒の間は黄白色粘土ブロックを多量に含む暗緑灰色砂礫混りシルトで埋め戻されていた。

遺物は主に井筒内の底面および近くから出土しており、土師器皿・黒色土器碗をはじめ、ミニチュア土器などがある（図65）。

#### 遺物

##### 土師器・黒色土器（図65、図版38-上）

土師器皿は口縁部の形態からa・bに二分される。

土師器皿 a（279～283） 口径9.4～11.8cm、器高1.5cm前後で、浅い体部から水平あるいは短く外反する口縁部の端部をかるくつまみ上げる。底部の外面はユビオサエしており、体部の内外面および口縁部の調整はヨコナデである。色調は灰白色を呈し、焼成は良く、胎土中に長石・石英・チャート・雲母粒を含む。

土師器皿 b（284・285） 口径9.5～9.8cm、器高2.4～2.9cmで、体部は浅い椀状を呈し、底部の中央をユビオサエによって平端に整える。体部および口縁部の調整は、ユビオサエの後にヨコナデする。ともに色調は灰白色を呈し、焼成は良く、胎土は土師器皿 a と変わらない。

手捏ね土器（286） 口径4.6cm、器高2.2cmで、口縁部および体部をユビオサエおよびナデによって整えた丸底のミニチュア土器である。色調は褐色を呈し、焼成は良く、胎土中に石英・長石粒を含む。底部の外面には煤の付着がみられる。

黒色土器（287～291） 口径14.7～16.3cm、器高6cm前後の高台付碗である。289・291は内黒A類で、口縁端部をヨコナデ調整して丸くおさめる。289の体部外面の調整は横方向のヘラケズリの後、かるくナデしており、291はユビオサエの後、まばらに平行ヘラミガキ

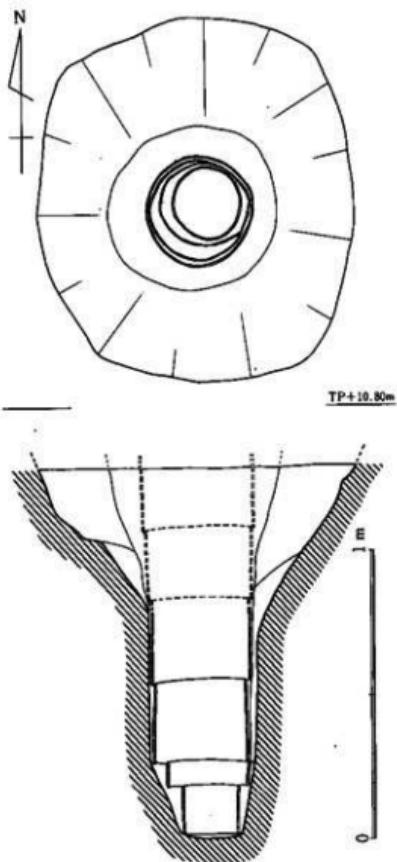


図64 井戸（S E 401）実測図

安時代中期（10世紀後葉前後）に属するものと考えられる。

## 2) S X 401

### 造構（図63・66、図版16一下）

II区西部に位置する一辺1.2～1.6mで、深さ5cm前後の浅い土壌状の造構である。造構はNG第4層に相当する灰褐色シルト質細粒砂あるいは砂質シルトの下面近くから検出さ

を施す。体部内面の調整は289が細かい平行ヘラミガキで、291はやや粗い弧状のヘラミガキである。ともに、外面の色調は灰白色を呈し、焼成は良く胎土中に石英・長石・磨滅した角閃石粒を含む。なお、289の口縁部外面には炭素の吸着が認められる。

287・288は黒色土器椀の底部で、287は内黒A類、288は両黒B類に属するものである。ともに、高台は断面三角形を呈するが、288は全体に厚い。内面には平行ヘラミガキが施されており、287の底部には高台よりに径4mmの小孔が焼成後に穿たれている。色調・焼成・胎土は287が289に、288は290に酷似している。

羽蓋（292） 口径36cm前後の羽蓋の口縁部片である。二段に屈曲して立つ口縁部を強くヨコナデして端部を面取りぎみにおさめている。色調は明るい褐色を呈し、焼成は良く、胎土中に石英・長石・チャート・金雲母粒を含む。

以上の土器の時期は、土師器皿・黒色土器の特徴などからおおむね平

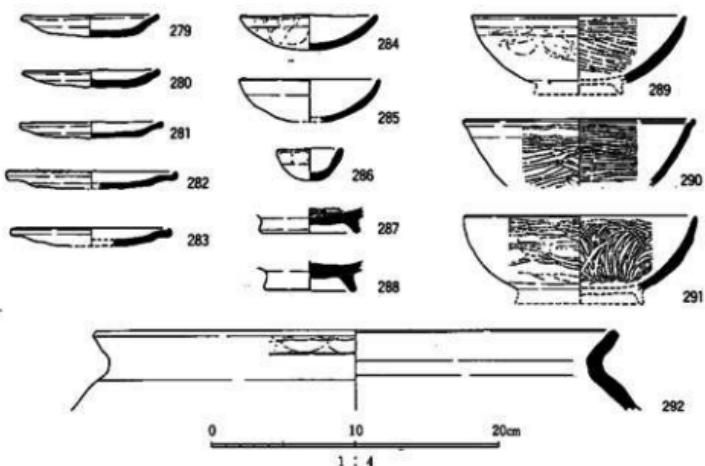


図65 井戸（S E401）出土土器実測図

れたが、全体の形状や規模については遺構の南北端が調査範囲外のため明らかでない。

土壤の内部にはほぼ全面に渡って炭・灰をはじめ、焼けた板材などがみられ、北部では焼けた骨片が集中して認められた。また、土壤内の西部でも若干の骨片に伴って土師器皿および口縁部を伏せた状態で完形の土師器皿290が出土した（図67）。棺材とみられる板の破片や焼けた人骨かと思われる骨片などから平安時代の火葬に関係した遺構と考えられる。

#### 遺物

##### 土師器・瓦器（図67、図版38-中）

土師器皿（293・294・296・297） 土壌内から出土した土師器皿には大小がある。口径15.7cm、器高3cm前後の293・294は大型で、体部から外上方に伸びる口縁部を強くヨコナデして端部を丸くおさめている。口径9.7cm、器高1.6cm前後の296・297は小型で、扁平な体部から短く水平にのびる口縁部をヨコナデして端部をつまみ上げている。これらの色調は明るい灰褐色を呈し、焼成は良好で、胎土中に少量の石英・長石・金雲母粒を含む。平安時代中期（10世紀後葉前後）に属するものであろう。

瓦器皿（295） 口径9cm前後で、口縁端部を丸くおさめており、内底面には螺旋状の暗文を施している。混入品と思われる。

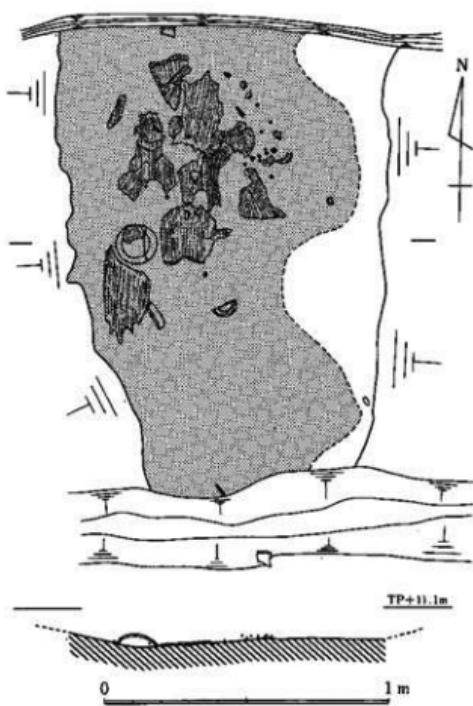


図66 火葬基（S X401）実測図

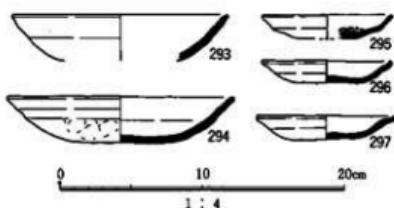


図67 火葬基（S X401）出土土器実測図

## 3) S X402

## 遺構（図63・68）

第III区の南端に位置する土器埋納ビットである。遺構はNG第4層に相当する茶褐色砂質シルトの下面で検出されたが、トレンチの掘下げ途中に検出されたため、上部は明らかでない。ビットは検出面で径約50cm、深さ30cm前後あり、掘形は底に向かって掘り鉢状を呈する。ビット内には29個の完形の土師器小皿が積まれたような状態で置かれており、遺構内は白色シルトのブロックを含む黄色シルトで埋め戻されていた（図68）。遺構の性格は土器の出土状態から不要になった土師器小皿を意図的に投棄あるいは埋納したビットと考えられる。

## 遺物

## 土師器（図69、図版38一下）

土師器小皿298～315は口径9.6cm、器高1.8cm前後あり、扁平な体部に強く直立する口縁部を有する。口縁部は強くヨコナデして端部を丸くおさめており、体部はユビナデによって整えている。色調は淡い黄褐色あるいは橙色を呈し、焼成はやや軟質で、胎土中に

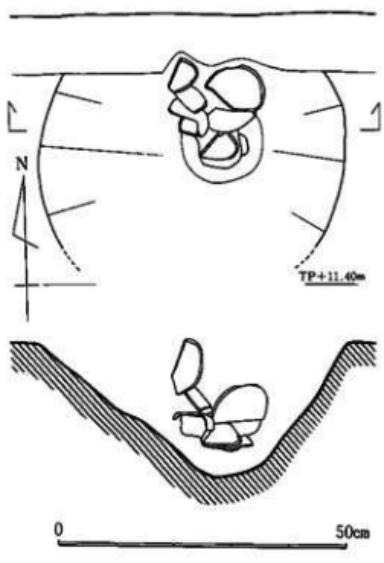
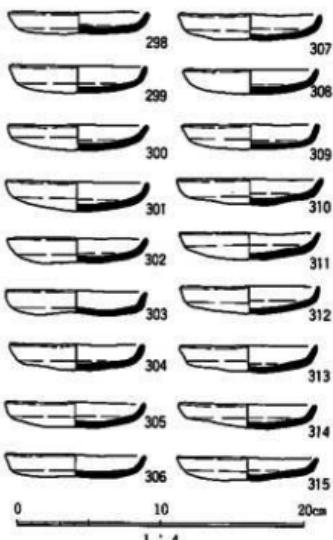


図68 土器埋納ピット（SX 402）実測図  
長石・石英・金雲母粒を含む。これらは、既述したSE 401やSX 401の土師器と同様に平安時代中期に属するものであろう。



(田中)

## 参考文献

- ・大阪市文化財協会1983、「長原遺跡発掘調査報告」III
- ・乙益重隆1980、「古代水田区画雑考」：『鏡山猛先生古稀記念 古文化論攷』
- ・川西宏幸1978、「円筒埴輪統論」：『考古学雑誌』54-2
- ・黒田慶一1986、「長原（城山）遺跡出土の「富官家」埴輪土器—長原古水田址をめぐってー」：『ヒストリア』第111号
- ・田辺昭三1981、「須恵器大成」
- ・朝哲済・田中滑美・高井健司1987、「大阪市長原遺跡の地層と鍾火山灰層について」：『火山灰と考古学をめぐる諸問題』第22回 墓藏文化財研究集会
- ・原口正三・田辺昭三・田中琢・佐原真1962、「河内船橋遺跡出土遺物の研究」：大阪府文化財調査報告書第11編

### 第三章 調査の結果

- ・藤永正明1986、「第VI章 水田について」：大阪文化財センター『城山（その3）』
- ・吉田 孝1988、「大系 日本の歴史」3 古代国家の歩み

## 第IV章 まとめ

今回の調査では5～6世紀代の方墳15基をはじめ、飛鳥～奈良時代の水田跡や平安時代の井戸・土器埋納ピット・火葬墓などが検出された。これらは、長原遺跡の歴史的変遷過程を明らかにしていく上で、また、長原古墳群の実態を究明するための基礎的な資料となつた。なかでも、15基の方墳は、調査地区が古墳群の中心域とみられる1号墳（塚ノ本古墳）の周辺と同様に古墳の分布密度が高いこと、古墳群がさらに南に広がることなどを物語っている。また、長原2・3期に属する15基の方墳のうち、2期の方墳はI区からII区の東部にかけて、3期の方墳はII区以西に分布する傾向が窺えた。これはこれまで4世紀末頃に築造された1期の1号墳（塚ノ本古墳）を盟主墳としてその周辺に2・3期の方墳群が形成されたとする考えを補強するものとみて良いであろう。ところで、本調査でも墳丘の規模、造出しおよび埴輪の有無など古墳間の差が明らかとなった（表6）。このような差は何に起因するか、被葬者の性格についてなど、今後とも引き続き究明すべき問題は多くある。これらについては、次年度以降の報告書においても検討が加えられるであろうし、今後の調査課題の一つでもある。本章では、57号墳の造出し、45・57号墳出土形象埴輪および円筒・朝顔形埴輪に若干の検討を加えて本調査のまとめとする。

（植木・田中・黒田）

### 第1節 57号墳の造出しについて

#### 1. はじめに

長原古墳群では造出しをもつ方墳はこれまでに6基確認されている。このうち長原遺跡の北西部にあたる長吉長原西1丁目に位置する113・116号墳以外はいずれも古墳群の中央部、塚ノ本古墳の周辺に分布する方墳群の縁辺部付近に位置している。これらの方墳は3期に属しており、墳丘の規模も一辺11m以上を測るものが多く、同時期の方墳に比べてやや大型である（表6）。

造出しあは方墳の墳丘の一辺中央に付設されており、その方位は、北東を向く113号墳や

古墳 番号	古墳の形態			規 模 [m]	土 器							埴 輪				時 期	備 考
	墳 形	周溝	造出し		須	土	韓	円	翫	家	馬	鶴	人	器			
3	方墳	○	○	10.7×11.2	○		○	○							3	TK47	
5	方墳	○	○	7.0×8.5	○	○		○	○						3	TK23, 鳥形埴輪	
44	方墳	○		×11.8	○			○	○	○				○	2	TK73	
45	方墳	○		×11.8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2	TK73	
46	方墳	○															
47	方墳	○		6.1×8.6	○	○									2	TK73	
48	方墳			×4.8													
49	方墳	○		6.8×6.8	○	○									2	ON46	
50	方墳	○		9.1×9.8	○		○	○							2	TK216	
51	方墳	○		×7.8	○										2	ON46	
52	方墳	?		×9.2	○		○								3	TK208	
53	方墳	?		9.2×10.0	○		○	○							3	TK208	
54	方墳	?		6.9×7.2	○	○		○	○						3	TK23	
55	方墳																
56	方墳			4.8×5.4													
57	方墳	○	○	×15.0	○		○	○	○	○	○				3	ON46～TK208	
58	方墳	○		×18.0	○		○								3	TK47	
87	方墳	○	○	×12.0	○		○	○		○	○	○	○	○	3	TK23	
118	方墳	○	○	10.6×12.0	○		○	○	○	○	○	○	○		3	TK23	
116	方墳	○	○	12.5×11.0	○		○								3		

表6 I～IV区検出古墳および長原古墳群内造出し付古墳一覧表

南向きの116号墳以外は西方あるいは北西のいずれかをとる(図70)。また、造出しの周辺では、形象埴輪や須恵器がまとまって出土することが多く、57・87号墳のように形象埴輪や須恵器の原位置が復原可能な例もある。ここでは、57・87号墳の造出し周辺の遺物の出土状況を今一度みなおして、造出しの性格や機能について述べてみたい。

## 2. 57・87号墳にみられる造出し

57号墳では、造出しの東部中央に設置された須恵器の大型甕を中心に多量の須恵器(有蓋高杯12点以上・翫2点・直口甕2点・甕8点・筒形器台1点・高杯形器台2点)が出土したほか、造出し西側斜面や前面の西周溝でも円筒埴輪に混在して人物(巫女?)形埴輪や馬形埴輪が認められた。これらの多くは後世の攪乱を受けていたが、造出しの上面を中心分布することや完形の須恵器を含むことから、本来は造出し上の円筒埴輪の区画の中に置かれていたものと推察される。

87号墳はIV区の西方に位置しており、5世紀の初頭頃に築造された85号墳(一ヶ塚古

墳）を盟主とするグループに含まれる可能性がある。墳丘の中央部以東を旧東除川の河道によって削り取られていたが、造出しおよび古墳の西部は保存状態が良く、土器棺や埴輪列などが検出されている〔大阪市文化財協会1984〕。

古墳の規模は、墳丘が北側で一辺約12m、高さ約1mあり、造出しへ東西3m、南北2m、高さ65cmを測る。墳丘の北・西斜面および北周溝内底面より朝顔形埴輪・円筒埴輪に混在して馬形埴輪や鶏形埴輪が各1個体出土したほか、須恵器の杯身・有蓋高杯・甕などが完形で出土している。このうち、馬形埴輪は造出しへ北西コーナー斜面で、鶏形埴輪は造出しへ東部において転落した状態で出土しており、造出しへ西部上では巫女形埴輪・草摺形埴

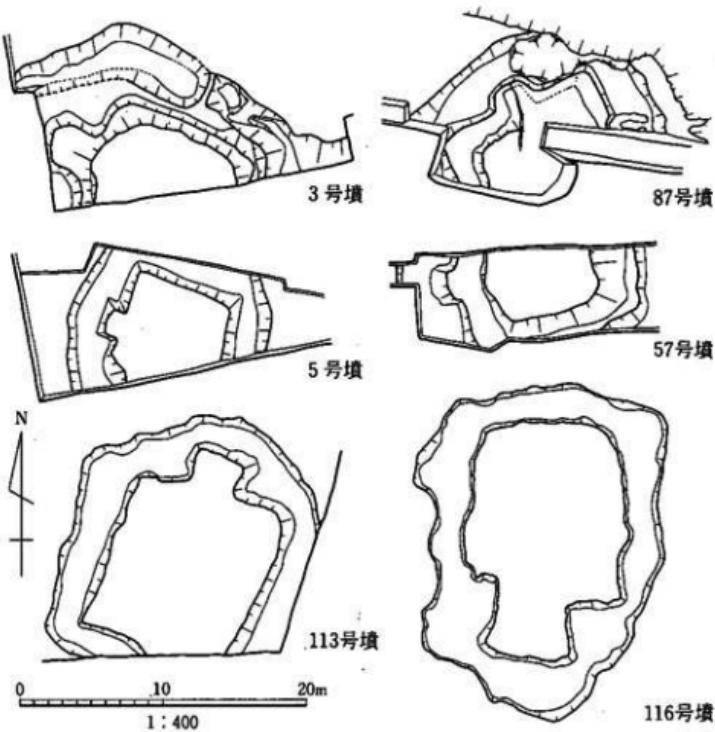


図70 長原古墳群内造出しつ付古墳実測図

輪や底部を穿孔した須恵器甕2点などを含む円筒埴輪列が検出されている。円筒埴輪列の中に須恵器や形象埴輪を同時に樹立した特異な例ではあるが、鶏形埴輪・馬形埴輪をはじめ、須恵器（杯身・有蓋高杯）などは出土状態からみて、造出し上を区画する埴輪列の中に置かれていた可能性が強い。また、造出しから出土した須恵器の甕や壺の中には、底部穿孔や口縁部を打ち欠くものがみられるが、これらは、葬送儀礼に用いられた供獻土器と思われる。

以上、57・87号墳の造出しにおける遺物の在り方を中心にみてきたが、このほかの方墳の造出しについても遺物の種類や量に若干の違いがみられた以外は、形象埴輪や多数の須恵器を伴うなど相互に共通した要素をもっている。

### 3. 造出しの性格

造出しの性格や変遷については既に、西川宏・樋本誠一両氏による研究〔西川宏1960〕・〔樋本誠一1967〕がある。西川氏によると、造出しは古墳時代前期の末頃に前方後円墳や円墳に出現し、古墳時代中期に盛行した後、古墳時代後期の後半に減少すると説かれている。また、造出しの機能については、月の輪古墳の造出しのように埋葬のみられるものは、「円墳の造出しにおいて祭祀が行われたとすれば、それは造出しに埋葬がある場合に、それを対象としたものとみるのが最も自然な見方であろう。」とされ、埋葬のないものについては、「円墳の場合も前方後円墳の場合についても、造出して祭祀が行われたということは認められるけれども、それは必ずしも古墳の主たる埋葬を対象としたものとは断定できないのであって、造出しの機能を祭祀だけに、少なくとも恒常的な墓前祭の場に限定してしまうのは尚早といえる。」と結ぶ。

樋本誠一氏は、和歌山市岩橋千塚古墳群の花山6号墳および大谷山22号墳の造出しの調査を通じ、前方後円墳の造出しについて、「造出しに宗教的な意味を見るより、経済的・政治的権力の誇示という面を強くみることができる」ことと指摘されている〔樋本誠一1967〕。

このような西川・樋本両氏の造出しについての考察は卓見といえるが、方墳の造出しについては当時の資料の制約もあり、両氏ともふれられていない。

造出しをもつ方墳は、管見によるかぎり現在近畿地方では長原古墳群以外に、以下の7基が知られている。大阪府藤井寺市青山4号墳〔大阪府教育委員会1978・1979〕、京都府綾部市菖蒲塚古墳・聖塚古墳〔綾部市教育委員会1984〕(註1)、京都府城陽市宮ノ平2号墳〔京都府教育委員会1974〕、奈良県橿原市四条古墳〔奈良県立橿原考古学研究所1988〕、奈

良県天理市森本寺山12号墳〔埋蔵文化財研究会1985〕、三重県安濃町明合古墳(註2)などである。長原古墳群を含めてわずか13基の資料では、方墳における造出しの出現状況や性格について語ることは早計にすぎるかもしれないが、4世紀末から5世紀初頭とされる葛蒲塚古墳および聖塚古墳の存在は、方墳についても造出しが前方後円墳や円墳と軌を一にして、古墳時代の前期末頃には出現したものと思われる。

次に、奈良県四条古墳、和歌山県和歌山市井辺八幡山古墳および福島県本宮町天王塙古墳などの造出しを紹介して、長原古墳群の方墳の造出しと比較しておく。

奈良県樅原市の四条古墳は、5世紀末頃に造築された一辺約29mの方墳で、墳丘の西辺に長さ約9m、幅約14mの造出しが設けられていた。墳丘の周囲には長方形の周濠が二重に巡らされており、内側の周濠内から耳杯形・楕形の木製容器や笠形・盾形・杖形・醫形・櫂形・台形・机形・奮形・弓形・刀形・鉢形・簾形などの多量の木製品をはじめ、形象埴輪や土器が出土している。ここでも、造出しの北斜面を中心に杭状木製品をはじめ、家形・人物形・馬形・鹿形などの形象埴輪や須恵器(杯・甌・器台)が出土しており、これらは本来造出し上に置かれていたものとみられている。さらに、周溝の北西部から形象埴輪、北東部や南部から形象埴輪や木製品が集中して出土している。これらの形象埴輪や多量の木製品も本来は北西部の周堤上やあるいは斜面に配置されていたと理解されている〔齊藤清秀・林部均1988〕。以上のように、四条古墳の調査では、葬送儀礼は造出しのみではなく、墳丘あるいは外堤でも行われていたらしいことが、遺物の分布状況から察知される。

和歌山県和歌山市に所在する井辺八幡山古墳は主軸長が88mの6世紀前半頃の前方後円墳で、1969年に東西2個所の造出しの調査が行われている〔森浩一1972〕。東造出しでは円筒埴輪の区画内の中中央部に、須恵器群(大甌・台付甌・高杯形器台・高杯)が置かれており、これの北側に家形埴輪2棟、さらに前面に9体以上の武人形埴輪3列と盾形埴輪1個体、双脚輪状文のみられる埴輪が2個体配置されていた。また、須恵器群の南側には力士形埴輪3体が一列に並び、その脇に鷹飼人形埴輪1体・馬形埴輪1頭・猪形埴輪3頭・鹿形埴輪1頭などが確認されている。さらに、南北の埴輪群と向き合う形で、埴輪男子2体・甌を擣げもった埴輪女子3体が置かれていた。このほかにも円筒埴輪の区画外で、人物形埴輪(馬子・武人)2体が、墳丘裾では衣蓋形埴輪が3個体確認されている。同様に西側造出し上でも円筒埴輪の区画内において、家形埴輪1棟・盾1個体・埴輪女子3体・埴輪男子6体・力士形埴輪2体・武人形埴輪3体をはじめ、多数の須恵器(杯・高杯・耳杯・鉢・器台)がやや雑然と置かれていた。また、造出しの東部のくびれ部では、武人形

埴輪1体・馬子形埴輪2体・馬形埴輪2頭・衣蓋形埴輪3個体をはじめ、土師器（高杯）や多數の須恵器（大甕・壺・器台）が置かれていたほか、埴輪列の近くから須恵器瓶が1個体出土している。

以上のような東西造出しにおける形象埴輪群や供獻土器群について調査者は、古墳の主たる被葬者がもっていた政治機構や被葬者に対して取り行われた葬送儀礼の様子を全てではないにしろ示していると考えられている〔森浩一1972〕。また、造出しが葬送儀礼の場であり、東造出しの円筒埴輪を利用した排水施設は、造出しの機能が短期間のものではなく、恒久的な存続を意図したあらわれとみており、この点は既述した西川宏氏の考えとは異なっている（註3）。

福島県本宮町に所在する天王塙古墳は5世紀後半頃の直径38mの円墳で、墳丘の北西側に造出しが設けている。造出しが調査では、巫女形・甲冑形・盾形・犬形・猪形・鶴形・衣蓋形・櫛形・龜形などの形象埴輪をはじめ、土製馬・須恵器などが検出され、人物形埴輪出現期の埴輪祭祀の一端が明らかにされている。

調査者は形象埴輪群と造出しが関係について、「造出しが前方後円墳における造出しが同様な役割を果たしており、小規模とはいっても葬送儀礼と首長権継承の儀式をこの場で造形したのである」と指摘する〔本宮町教育委員会1984〕。すなわち、造出しが葬送儀礼や首長権継承の儀式を表現した場所とみるのである。

以上、方墳の造出しが性格や機能について、前方後円墳や円墳の造出しが調査例と比較しながらみてきたが、方墳の造出しが四条古墳以外に全容が明らかにされている調査例は宮ノ平2号墳（註4）、森本・寺山12号墳、青山4号墳をおいてみあたらなかった。しかし、既述したように、方墳の造出しあり、前方後円墳や円墳の造出しが軌を一にして出現したようであり、その性格も葬送儀礼や権威継承の儀式などを形象埴輪や供獻土器を設置して表現した場所と比定して大過ないと思われる。

一方、長原古墳群では造出しがもつ方墳は3・5・57号墳などのように、周囲に同時期の複数の方墳を伴うことが多い。つまり、3期の方墳群は造出しがもつ方墳を核とする複数の支群として存在したことが窺われる。長原古墳群の造墓活動がピークを迎える5世紀末から6世紀初頭頃は、近畿地方の中央部では大王を頂点とする新たな社会体制の下で階級分化が一段と進む頃でもある。造出しがもつ方墳の被葬者は当時の倭政権から古墳の築造と埴輪を用いた古墳祭祀儀礼を容認された人々とみられ、その系譜は旧来の在地首長と関係の深かった人と思われる。また造出しがもつ方墳の周辺に築かれた形象埴

輪をもたない小規模方墳は同族者の墓とみて良いであろう。

(田中)

(註)

- (1) 菖蒲塚古墳の造出しは二段に築成されており、長原古墳群の方墳にみられる造出しあとは形状が異なっている。
- (2) 明合古墳の造出しは埴丘の二方向に構築されている。古墳の時期は発掘調査が行われていないため、明かでないが、三重県伊賀上野市教育委員会の山本雅靖氏によれば、川西宏幸氏の埴輪編年図III期に対比される有黒斑の円筒埴輪が採集されているとのことである。
- (3) 井辺八幡山古墳の造出しの人物埴輪の配列や多量の須恵器の性格について、県立さきたま資料館の若松良一氏は、埴輪と須恵器の位置が明確に分かれていることから同時に据え置かれた可能性が強いとされ、須恵器は別の場所で行われた葬の宴で用いられた後、造出しに置かれたもので、人物埴輪は、実際に葬葬に参加した人たちを表現したものであり、その中には犠牲祭祀を行った鷹狩い人や魂しづめの相撲を取った力士をはじめ、武入集團があったと考えられている【埼玉県県政情報資料室1988】。
- (4) 宮ノ平2号墳では埴丘の南および東辺に造出しが設けられており、東の造出しの中央では組合せ式木棺が検出されている。これは、西川宏氏が指摘されている円墳の造出しへの陪葬と同様な埋葬とみることができる【西川宏1960】。なお、宮ノ平2号墳と同様に二方向の造出しが設けられた方墳として島根県の大庭鶴塚古墳が知られている。

## 第2節 長原古墳群の形象埴輪

### 1. はじめに

長原古墳群で、これまでに出土した形象埴輪の総数は百点近いと思われる。しかし、今回報告した資料を含めて断片的な資料が多く、また、少量の既報告資料を除いて十分な整理ができていないため、各資料の細部にわたっての検討は現状では困難である。しかし、ここでその概要を整理しておくことは、長原古墳群の理解を深めるためにも、また今後の

調査研究を進める上でも無駄ではあるまい。そこで、第III章で報告した長原45・57号墳から出土した資料について簡単に形態上の特徴を検討し、次に、長原古墳群における形象埴輪の出土状況について概観したい（註1）。

## 2. 45・57号墳出土の形象埴輪（図20～22・54）

家形埴輪は45号墳から出土した1個体（図22-79～82）のみである。切妻屋根上半部の線刻で表現された押縁と重なって描かれた斜格子状の文様は他にあまり例をみないが、やはり網代を描出しているのであろうか。他に壁片があり、それには柱などの表現はまったくない。

盾形埴輪は44・45号墳で各1個体の存在が確認されている。45号墳の盾形埴輪（図22-83～90）は長方形にめぐる綾杉文によって盾面が内・外区に分けられ、内区には菱形格子文、外区には鋸歯文と半円形文が描刻されている。盾面の上辺は上方に向かって、ゆるやかな弧を描いている。44号墳から出土している（図14-30）はこの上辺部の破片である。これらは大阪府盾塚古墳（藤井寺市）、黄金塚古墳（和泉市）から出土しているような革製の盾を模したものである。類例は5世紀以後の古墳で多くみられるが（註2）、外区の鋸歯文間に配された半円形文は大阪府茶山1号墳（羽曳野市）からの出土品に認められる〔羽曳野市教委1984〕。ただし、茶山1号墳出土例は44号墳出土例と同様に綾杉文が省略されており、これを型式的な退化現象と見なすならば、45号墳出土例より後出的といえる。45号墳の翫形埴輪（図23-91～99）は1個体分と思われる。筒上部から背負紐にかけての表現が大阪府野中古墳（藤井寺市）出土の翫形埴輪に類似しているが〔北野耕平1976〕、背板の外周部に突帯があったことを示す剝離痕が、背負い紐の表現のある破片にみられ、線刻のみで背板を描いた平面的な表現をとる野中古墳出土例に比べてより写実性を残している。

武人形埴輪（図20・21-75）は眉庇付冑・肩甲・三角板短甲・草摺の組合せである。手足の表現がなく、顔だけが表現されている形態は（註3）、甲冑形埴輪から武人形埴輪へ変化する過渡的なものとみることもできよう。眉庇付冑は5世紀前半に出現する形式といわれているが〔小林謙一1975〕、埴輪における眉庇付冑は甲・草摺と一体化した甲冑形埴輪・武人形埴輪にみられる。長原古墳群内では11号墳から出土した甲冑形埴輪が眉庇付冑・肩甲・三角板短甲の組合せである（註4）。この埴輪の眉庇付冑には鉢が表現されており、45号墳出土例に比べてやや写実性に優る。また、鎧が横長の細板を重ねていることも相違点の一つである。11号墳からはTK216型式の須恵器が出土している。この他の類例として

は岡山県西の平古墳〔新東亮一他1974〕、福島県天王塚古墳〔本宮町教委1984〕出土の甲冑形埴輪が知られている。これらは長原古墳群の2例と同じく三角板短甲との組合せで、5世紀後半に比定されている。また、人物に装着した例としては挂甲と組み合うものが多く、大阪府今城塚古墳（高槻市）出土の武人形埴輪〔原口正三1973・1977〕〔野上丈助1982〕などの他、関東地方の武人形埴輪に装着例があるが、6世紀代に下るものが多いようである。

45号墳出土例は顔面の表現があることによって、武人形埴輪の先駆的形態を示しているといえるが、その点を除けば、手足の表現の欠落や三角板短甲との組合せなど、むしろ長原11号墳・西の平古墳・天王塚古墳出土例との共通点が多い。また、45号墳から他の人物形埴輪が出土していない点などを重視すれば、5世紀末まで下らないものと考えることが可能であろう。

以上のことから45号墳出土の武人・盾・鶴形埴輪はいずれも5世紀後半を下限とする時期に比定するのが妥当であろう。家・鶴形埴輪もこれを否定するものではない。

57号墳出土の馬・人物形埴輪（図54-248～254）はいずれも小型で、86・87号墳出土の馬・人物形埴輪〔大文協1984〕が馬具や着衣を粘土紐・粘土板の貼付けによって立体的に表現しているのに対し、ヘラによる沈線のみで表現しており、やや稚拙さを感じさせる。また、馬形埴輪の耳および人物形埴輪の腕の接合が挿入法によっている点は、体部と連続して形成する86・87号墳出土例との製作技法上の大きな相異点ということができ、両者の製作地の違いを示唆しているように思われる。

### 3. 形象埴輪の出土状況概観

表7は1986年度までに形象埴輪が出土した35基を対象にして、形象埴輪を出土した古墳の数を種類・時期別に示したものである。これによると、家・衣蓋・武器・武具・鳥形埴輪は1期から3期を通じてみられ、とくに家・衣蓋形埴輪は量的に多く、一古墳から複数出土する例も多い（4・84・85号墳など）。一方、馬・人物形埴輪は、ほとんどが3期に属するものである。唯一、2期に属する人物形埴輪は今回報告した45号墳出土の武

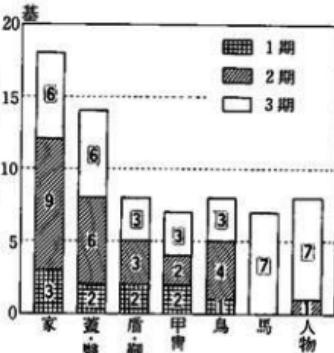


表7 形象埴輪を出土する古墳数

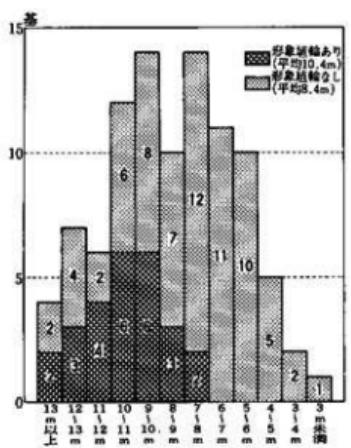


表8 墓丘規模別の古墳数

形象埴輪変遷の一過程を反映しているというべきであろう。だが、この時期における馬の出現は埴輪だけにいえることではない。長原遺跡では2・3期になると集落内で馬歯・馬骨の出土が認められるようになり（註7）、瓜破遺跡内の長原遺跡に近接した台地上では、3頭以上の馬骨がまとまって確認された地点がある〔樽野博幸1978〕。これらのことから2期以後、遺跡内において馬の飼育が開始されたことは明らかであろう。さらに東接する八尾南遺跡では5世紀中葉の井戸から木製鞍橋の前輪が出土しているし〔八尾市文化財調査研究会1987〕、6世紀前半に比定される130号墳（七ノ坪古墳）に馬具一式が副葬されていたことから、乗馬も行われていたことが確実となった。このように、長原遺跡における馬形埴輪の出現は、実際に馬が飼育され、埴輪に表現されているような馬具をつけて、利用されはじめた事実に直接対応していると考えられる。

さて、表7にみるように家・衣蓋・武器・武具・鳥形埴輪などは1～3期を通じて出土しているが、1期の場合、1・40・85号墳の3基の古墳を対象にしているのに対して、2・3期の古墳は160基あまりを対象にした数字であるから、2・3期の小型方墳のうち形象埴輪を有する古墳がいかに限定されているかがわかる。それを1期の古墳と2・3期の古墳の被葬者間にみられる性格の違いとして理解することは不当ではあるまい。しかし、視点を変えれば、多様な形象埴輪を持ちうる古墳が存在することに変わりはなく、長原地域に対して埴輪が供給されうる条件が、引き続き存在していたとしてもできる。

人形埴輪である。これは、既述のように甲冑埴輪と武人形埴輪の中間形態というべきものであり、この時期の古墳に他種の人形埴輪がみられない現状では、むしろ甲冑埴輪に近いものといっておきたい。また、馬形埴輪が出土した7基のうち、人物形埴輪も出土している古墳が5基あり、両者は長原古墳群の3期を特徴づける遺物といってよい（註5）。

馬・人物形埴輪の出現は畿内地域においては5世紀中葉から後葉といわれている（註6）。したがって、それらがやや遅れて長原地域に出現することは、畿内における

番号	調査次数	号	墳形の特徴	規模 [m]	埴輪の種類
1	NG1	5	円墳	5.5	円筒、朝顔、家
4	GENT.NG	3	方墳	10	円筒、家、人物、衣蓋、盾
5	GENT.NG	4	方墳 造出	8.5 7	円筒、鳥
10	GENT.NG	9	方墳	11.7	円筒、朝顔、眉、衣蓋
11	GENT.NG	10	方墳	8.5 7	円筒、甲冑
12	GENT.NG	11	方墳 長方形か	16.5	衣蓋
14	GENT.NG	13	方墳	8	家、馬
28	NG1	1	方墳	7	家
29	NG1	2	方墳		円筒、馬、家
40	NG4	1	方墳?		円筒、朝顔、壺、眉、盾、草摺、鶴、衣蓋、家
44	NG81-2	1	方墳	11.8	円筒、朝顔、盾、眉
45	NG81-2	2	方墳 長方形?	11.8	円筒、朝顔、盾、眉、人物(武人)、家
57	NG81-2	14	方墳 造出	15	円筒、人物、馬
61	NG82-19	2	方墳	9.5 9	円筒、朝顔、家
68	NG82-19	9	方墳	9	円筒、朝顔、衣蓋
77	NG18	7	方墳		円筒、朝顔、鳥
78	NG18	8	方墳		円筒、家
79	NG18	9	方墳	10	円筒、家
84	NG82-27	5	方墳	9.4	家、眉、衣蓋、草摺
85	NG82-27	6	前方 倒立貝形 側円墳	45	円筒、壺、家、跳い、衣蓋、草摺、水鳥、盾
86	NG82-46		方墳		円筒、馬
87	NG83-88		方墳 造出	12	円筒、朝顔、家、草摺、巫女、馬、鶴
109	DD84-1	2	方墳	7.8	円筒、家
110	NG84-12	1	方墳	9 9	衣蓋
111	NG84-12	2	方墳	10 10	馬、盾、家、衣蓋、人物
118	NG84-25	1	方墳 造出	12 10.6	円筒、馬、家、衣蓋、人物
131	NG85-84-2	1	方墳	10.8	円筒、人物、馬
132	NG85-84-2	2	方墳	8.8	円筒、衣蓋
142	NG85-70	3	方墳	11	円筒、朝顔、衣蓋
150	NG86-58-1	1	方墳	12	円筒、人物
152	NG86-58-2		方墳		家、衣蓋
155	NG86-66	1	方墳	10	馬
160	NG86-70	1	方墳	9.5	水鳥
161	NG86-70	2	方墳	9.5	家
162	NG86-70	3	方墳	11	衣蓋

※ CENT.NGは大阪文化財センター調査(『長原』1978)

表9 形象埴輪出土古墳一覧表

さらに、表8で示したように2・3期の古墳で形象埴輪を出土した32基の小型方墳のうち墳丘規模が判明する27基の墳丘規模は一辺長約10.4mを平均値とするが、これは全体の平均値より2m近く上回っている。このことから、2・3期において、小型ながらも古墳が急増する現象は、形象埴輪をもち、相対的に墳丘規模の優れたものと、そうでないものを内包するものであったということができよう。しかし、これを被葬者間の格差とみるとても、等しく古墳を造営し得るという点でそれほど大きな差とはいえない。いわば、基本的には同じ立場にありながら、やや優位な位置を占めていた階層が存在していたということであろう。

長原古墳群にみられる形象埴輪の出土状況を現段階で整理すれば、上記のような事実を見いだすことが可能であろう。今後の整理作業の進展をまって、後考を期したい(註8)。

(京鷗)

註)

- (1) 長原古墳群の形象埴輪の出土状況については【桜井久之1987】でもまとめられている。
- (2) 【高橋克昌1988】の分類によれば革製盾を模倣した二類に属し、5世紀以後にみられるという。
- (3) 顔面には入墨があり、この点について考察したものに【森浩一1972】【伊藤純1984】がある。
- (4) 中西靖人・石神幸子氏のご好意により資料を実見した。
- (5) 1号墳(塚ノ本古墳)周濠内から出土した馬形埴輪は1号墳に伴うものではないが【長原遺跡調査会1978】、周濠外周に分布する小型方墳は2期に属するものが多く、2期の古墳に伴っていた可能性がある。後述するように、5世紀中葉にはすでに馬形埴輪が登場していたわけだが、長原古墳群においてはこの時期に確実な例はない。
- (6) 【川西宏幸1980】によれば馬・人物形埴輪はIV期から新たに加わるという(P.106)。IV期は5世紀中葉から後葉とされている(P.117)。
- (7) 2期、3期は古墳群の時期区分であるが、ここでは須恵器を基準にして集落にも適用している。
- (8) 形象埴輪の出土状況については独自に資料を整理し、研究を進めている「長原古墳群研究会」の活動成果に負うところが大きい。

### 第3節 円筒埴輪の検討

ここでは、本来ならば長原古墳群の円筒埴輪全体の分類や編年の案を提示すべきであろうが、最近の出土資料の整理がまだ充分でないことに加えて、すでに公表されたいいくつかの案〔鈴木秀典1978・猪熊朝美1978・田中清美1982〕もある。そこで今回は、必要に応じて朝顔形埴輪にもふれながら、2・3の問題点に限って述べることにする。

#### 1. 須恵器との共伴関係

問題のひとつは、川西宏幸氏がV期とした円筒埴輪である。これは外面調整がタテハケのみの埴輪で、その初現は須恵器のTK23型式であるとされている〔川西宏幸1978〕。ところが、B種ヨコハケをもつ埴輪とともにこの埴輪が多数を占めている45号墳の場合、出土した須恵器はTK73～TK216型式なのである。同様にタテハケの埴輪が出土した50号墳ではTK216型式などの須恵器が出土している。このような事例は『長原報告II』の〔京嶋覚1982〕でもすでに指摘されてはいるが、川西氏の見解と大幅に食い違うため、合理的な理解に苦しむところである。

この場合、須恵器とこの種の埴輪は併行しないとして、何らかの解釈を考える立場もあるだろう。例えばB種ヨコハケを施した少數の資料を重視し、他は後に混入したと考える等々である。しかし、これらは須恵器とともに、周溝埋土や墳丘斜面から出土しており、混入の可能性は少い。その点では、図25-111・113のように45号墳の削平されたマウンドの直上で出土した破片に混入の可能性はあるが、その埴輪はヨコハケである。よって、ここでは、そのような考えをとるべきではない。

そこで、あらためて摂河泉の例をもとに考えてみたい。

外面調整がタテハケのみの円筒埴輪が、ヨコハケの円筒埴輪とともに同一古墳から出土する例はさして珍しいわけではない。無黒斑の埴輪の場合、河内では長原15号墳(註1)・29号墳(註2)・100号墳(註3)・104号墳(註4)・太平寺5号墳〔大阪府教育委員会1980〕・さば山古墳〔大阪文化財センター1987〕等の他、古市古墳群では、岡ミサンザイ古墳〔笠野 輝1976〕をはじめ15例にものぼる〔田中和弘1986〕。瓜生堂上層遺跡〔東大阪市教育委員会1979〕や玉手山遺跡の古墳周濠と推定されている溝〔柏原市教育委員会1983〕なども同じ例である。和泉では百舌鳥古墳群の田出井山古墳(註5)・ニサンザイ古墳〔堺市教育委員会1978・堺市教育委員会〕・赤山古墳〔堺市教育委員会・水野正好

1974]・龍佐山古墳〔森村健一・白神典之1987〕や經塚古墳〔吉田恵二1973・森村健一1981〕・大園古墳〔宇田川誠一・神谷正弘1986〕、また摂津でも打出小槌古墳〔森岡秀人1986〕等がある。もっとも、B種ヨコハケが主流の田出井山古墳やニサンザイ古墳から、ほとんどがタテハケの太平寺5号墳まで、両者の比率は様々である。

このように、この種の円筒埴輪がB種ヨコハケの円筒埴輪と共に伴する例は河内を中心に広く摂河泉に存在することはおおむね認めてよいであろう。こうしたことは、川西編年のIV期とV期の過渡期には当然おこりうる(註6)とも考えられるが、問題はその時間幅であろう。そこで、須恵器との共伴例を検討してみたい。

外面調整がB種ヨコハケの埴輪とタテハケのみの埴輪がセットをなし、しかもこれに須恵器が共伴する例はあまり多くない。やや新しい例としては古市古墳群の青山2号墳(註7)でTK47型式、太平寺5号墳ではTK23型式頃の須恵器が出土している。和泉ではニサンザイ古墳にTK10型式(註8)、經塚古墳にTK23型式〔川西1978〕、大園古墳にもTK23~TK47型式の須恵器がある。

一方、古い須恵器との共伴例は、長原古墳群に集中している。今回報告の45号墳(TK

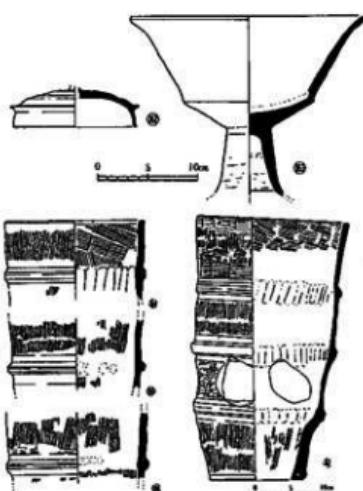


図71 長原100号墳出土土器、円筒埴輪実測図  
〔大阪文化財センター1986〕より)

73~216型式)、50号墳(TK216型式)の他に29号墳ではTK208型式の甕が出土している。大阪文化財センターの調査例では15号墳の須恵器は陶邑編年〔中村 浩1978〕のI型式1段階と報告されている。100号墳(図74)の杯蓋はTK73型式(註9)であろう。他に、摂津・住吉宮町3号墳・7号墳〔神戸市教育委員会1988〕では、B種ヨコハケを欠くものの、タテハケの埴輪がTK208型式の須恵器より層位的に古く出土していること、畿外であるが、伊勢・八重田16号墳〔松阪市教育委員会1981〕でも、タテハケのみの埴輪とTK216型式頃の須恵器が共伴していることなどは、上述の時間幅内の古い時期にタテハケのみの埴輪が存在する有力な例であろう。

以上のように、外面調整がB種ヨコハケの埴輪とタテハケのみの埴輪が共存する例は須恵器のTK73～TK216型式からTK47型式までの比較的長い時間幅におよぶと考えられるのである。

## 2. 編年上の位置づけ

続いて、この種のタテハケをもつ埴輪の編年上の位置を考えてみたい。

45号墳の当該埴輪が小型であることをもって型式的に新しいと理解するむきもあるかもしれない。確かに円筒埴輪の小型化という流れは、大勢としては事実である。しかし小型の円筒埴輪は古くは古市古墳群中の岡古墳[天野末喜1986]にすでに存在しており、その築造時期は津堂城山古墳と相前後するものである。ここでは外面がタテハケのみで、口径の平均が27cm、底径の平均が19cm程度の円筒埴輪が多く検出されており、概して大型品の多いこの時期においては目立つ存在である。この種の小型品はその後の古市・野中宮山古墳[上田睦1986]、長原85号墳(一ヶ塚古墳)[横山洋1983]や摂津・大塚古墳[豊中市教育委員会1987]等、中期の初めごろの古墳の他、土師の里埴輪窯(註10)でもごく少数ながら検出されており、古くからその系譜をたどることが可能である。

ところで、長原古墳群の資料のうち、外面がタテハケで小型の円筒埴輪だけを時期別に並べてみたのが表10である。これを型式的にみると、一ヶ塚古墳の埴輪には黒斑があり、スカシには方形・三角形のものがある。タガも高く突出するという点で、他より古く位置づけられる。27号墳(註11)の埴輪はタガの突出が低く、また最下段にタガを貼りつけただけでヨコナデを行わない技法(註12)を用い、器壁は厚く、スカシの形状も乱れているなど、粗雑なつくりが目立つ点で、他より新しい。

45号墳の埴輪は黒斑がないこと、一ヶ塚古墳の小型品(表10-1)より更に小型化していること、タガの突出度等々から一ヶ塚古墳より後出である。また、内外面のハケ調整幅の狭い部分的な横方向のナデを行ったり、内面全体におよぶハケ調整の後、最上段部分に、あらためてハケメを施す例もあるなど、粗雑化しているなかにもていねいなつくりが残っている。57号墳等の埴輪には最下段タガに簡略化された技法がなく、器壁の厚みなどをみても27号墳の埴輪より古いと考えられる。

共伴遺物からこれを検証すると、一ヶ塚古墳には外面を一周する長いヨコハケが施され、黒斑をもつ円筒埴輪や、いわゆる壺形埴輪・船橋O-I式墳の壺を伴うなど、古い傾向を帶びている。45号墳ではB種ヨコハケの円筒および朝顔形埴輪とTK73～TK216型式の須恵器が伴う。前節で述べられているように、形象埴輪も須恵器と矛盾しない。57号墳には

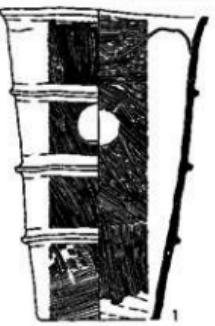
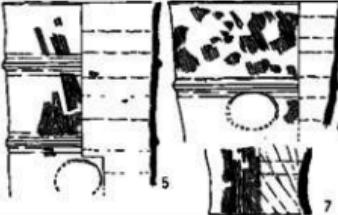
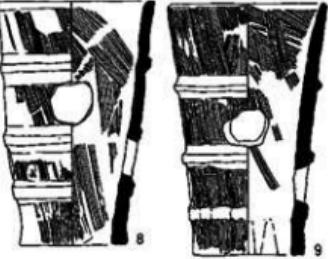
長原 1 期	85号墳 (一ヶ塚古墳)		ヨコハケ な し	須恵器
長原 2 期	45 号墳		TK 73 1 TK 216	一 周 する ヨ コ ハ ケ
長原 3 期	57 号墳		TK 208 1 TK 23	B 種 ヨ コ ハ ケ
長原 3 期	27 号墳		TK 47	な し

表10 長原古墳群出土 外面タテハケ(小型)の円筒埴輪

ヨコハケの有無は不明(註13)だが、須恵器はTK208~TK23型式である。27号墳ではTK47型式の須恵器が伴出している。以上のよう、型式的検討と併存遺物の検証から表10のような編年的序列が想定される。

なお、44号墳・50号墳のタテハケのみの埴輪は、口縁部内面にあらためてヨコハケを施すなどの点で、45号墳に近い。53号墳は円筒埴輪にヨコハケがなく、朝顔形埴輪のプロポーションや外面調整から45号墳より新しいことは確実である。器壁の厚みを考慮すれば、27号墳に近いとも思われる。

このように見てくると、川西編年に従えばV期とせざるをえない円筒埴輪が、実は少量といえども長原45号墳のようにB種ヨコハケの埴輪とともに存在していること、更にこの系譜は有黒斑の時期にまで遡りうることが了解できるであろう。川西氏は、円筒埴輪の「2次調整」の変化を跡づけ、

タテハケ（I期）→A種ヨコハケ（II期）→B種ヨコハケ（III・IV期）→2次調整省略（V期）として編年の大綱を述べられた。確かに外面調整は、非常に重要な編年の指標であるし、その変遷は氏が明らかにされたとおりである。しかし、すでに見たように、他方ではそうした「2次調整」の変遷とは別の次元で製作された円筒埴輪の一群が存在するということも、重要な事実である。すなわち、時期の変化を敏感に反映し、編年の指標となるヨコハケなどを施された埴輪とともに、タテハケのままの埴輪が少しずつ変化しながらも、セットで存在しているわけであり、こうしたあり方こそ、古墳時代中期における「古墳埴輪様式」[都出比呂志1981]の一例として把えるべきであろう。

その点で、注意されるのは、このようなセット関係は全長200m以上の大形古墳には見られず、100m以上でも野中宮山古墳（長154m）のみで、他は中小古墳に多く見られるごとであろう。なかでも須恵器のTK208型式までに限れば、有黒斑の埴輪をもつ摂津・大塚古墳（径56mの円墳）や長原85号墳（一ヶ塚古墳・長40～45mの帆立貝形古墳）の他は岡古墳（1辺33m）を初現として、すべて小規模な方墳である（註14）ことが注目されるのである。古墳の墳形・規模の格差と、小型・タテハケの円筒埴輪を含む「古墳埴輪様式」に何らかの関連があるとすれば、興味深いところである（註15）。

### 3. 黒斑のある埴輪

今回報告の第2の問題点は、50号墳・57号墳の円筒埴輪である。図37-157・159、図55-255～257・259・267～269の9点のほか、さらに複数の破片には黒斑（註16）が認められ、注意される。これらの外面調整はいずれもタテハケのみであり、黒斑をのぞけば川西編年ではV期にあたる。通常は黒斑がなく窯窓焼成とされる時期のものである。

この場合、この時期でもなお、散発的には埴輪を野焼きすることがあったとするのが自然な解釈とも思われる。そうすると埴輪生産が、窯窓を媒介とする生産体制（註17）とは別の次元でも行われた可能性を示唆することになる。

しかし、別の解釈もありうる。古市古墳群の一角にある野々上埴輪窯〔羽曳野市教育委員会1982〕では、川西編年V期の1号窯出土遺物中3点に黒い斑点が付着しており、しかもそのうちの1点は床面から出土している。この例から察すると、窯窓で焼いた場合でも、まれには黒斑がつくことがあると考えられる。その直接の原因はわからないが、野々上埴輪窯の場合、酸化焰で焼成されたと推測されていることと関係があるかも知れない。あるいは、窯窓焼成の埴輪でも、完全な須恵質のものはあまりないことから、窯体内的焼成温度が須恵器ほどには高くなかったと思われるなど、何らかの技術的要因によるのであろう。

今回の報告例が野焼きによるのか、それとも窯窯焼成なのかとなると、ただちにはわからないが、当時、野焼きが行われることもあったという可能性は考慮しておくべきであろう。

#### 4. タガの接合とハケ調整

第3の問題点は、タガ接合時のヨコナデとハケメとの切合い関係である。44号墳・45号墳・50号墳・53号墳において、外面がヨコハケの円筒および朝顔形埴輪の肩部では、ハケメがタガのヨコナデによって切られている。この場合も、2つの理解がありうる。

ひとつは製作の最終工程でタガの接合が行われたという考え方である。実例としては古市古墳群のはざみ山古墳〔藤井寺市教育委員会1986〕にあり、円筒部のタガ剥落面にB種ヨコハケが残っている。また〔赤堀次郎1982〕によれば、新沢千塚175号墳〔奈良県立橿原考古学研究所1981〕ではヨコハケの前にタガを接合するグループが多いなかで、ヨコハケの後にタガを接合するグループもあるとされている。長原古墳群でもタガ位置の内面にハケメなどがあるばかり、指頭痕やナデがそれを切っていることは、そうした可能性をより高めるものであろう。そうすると、タガ接合以前の調整を一次調整、接合後の調整を二次調整とする区分原理〔川西宏幸1973〕そのものに反対例を提示することにもなりかねない。しかし、逆にヨコハケがヨコナデを切っている例も少なくないようであり、更に多くの事例を検討すべきであろう。

あるいはタガ接合→二次調整ヨコハケ→タガを再びヨコナデしたと考えることも可能である。図26-119、図27-123のように、45号墳の朝顔形埴輪の口縁部のタガにそのような例があるからである。これはタガの2度目のヨコナデが、タガの上面にも及んだタテハケを完全に消してしまわなかったために確認できたことであり、摂津の大塚古墳や御獅子塚古墳〔田上雅則1987〕、また和泉の田出井山古墳でも同じ例が報告されている。ただ、119・123の口縁部のタガは比較的ていねいに接合されているのに対して、123ではタテハケが、タガ下面と円筒部のヨコナデの隙間にはっきりと残っており、2度もタガをヨコナデしたとするには、接合の粗雑さが目立ち、理解しにくい。

いずれにしろ、現状では結論は出しにくく、今回は「一次調整」「二次調整」の用語使用を差し控えたわけであるが、ヨコハケとタガの接合の順序についてあまり固定的に考えない方がよいのではないだろうか。今後の課題として記すにとどめておきたい。

(積山)

註)

- (1) [大阪文化財センター1978] の15号墳
- (2) [長原遺跡調査会1978] の2号墳
- (3) [大阪文化財センター1986] の城山7号墳
- (4) [大阪文化財センター1986] の城山3号墳
- (5) [堺市教育委員会1981] ただし、ここでは小破片ばかりが出土しているため、タテハケの破片がヨコハケの破片と同一個体である可能性も残っている。
- (6) [田中和弘1986] は「大部分、あるいは比較的高い割合で（川西編年の）V期の円筒埴輪に変わっているが、それと共にIV期の円筒埴輪を伴う場合」を「古市V期」として、時期を設定している。
- (7) [渡辺昌宏1985] なお、大阪府教育委員会大井事務所で復元した円筒埴輪を実見したが、外面がタテハケのみのもの7個体、B種ヨコハケのもの5個体であった。
- (8) 当該型式の杯蓋がニサンザイ古墳二重壇の底から出土したことであるが、さらに資料の増加を待ちたい。なお、[森村健一・白神典之1987] や [白神典之1987] によれば、ニサンザイ古墳ときわめて密接な関係にあるとされるコクジ山古墳 [堺市教育委員会1973] の須恵器はTK47型式という。ここでは円筒埴輪はヨコハケで、川西編年ではIV期である。
- (9) 担当の岩瀬 透氏によれば、両者はともに周溝内から出土し、須恵器は埴輪よりも上位で検出されたとのことである。
- (10) [藤井寺市教育委員会1987] の窓2と埴輪ブロック1で各1点ずつ出土している。他の埴輪は最下段をのぞいてすべてヨコハケである。
- (11) [大阪文化財センター1978] の27号墳。
- (12) いわゆる断続ナデ技法 [川西宏幸1978] とはまた別の、簡略化された技法である。
- (13) 57号墳ではB種ヨコハケの埴輪は出土していないが、29号墳ではTK208型式の須恵器と共に出土している。
- (14) 各古墳の規模は以下のとおりである。  
長原15号墳 (1辺7m)、29号墳 (1辺6m以上)、45号墳 (8.5m×8.6m以上)、50号墳 (9.1m×9.8m)、100号墳 (1辺6m以上)、八重田16号墳 (1辺16m)、住吉宮町3号墳 (1辺約12m?)。なお、墳丘が調査地外にひろがるため、確實に方墳とは断定できないのは、長原29号墳、45号墳、100号墳、住吉宮町3号墳などであるが、いずれも密集する方墳群中に存在しているので方墳である可能性が高い。
- (15) もっとも、TK23型式以後は、川西氏がいうように、タテハケが主流となるため、このようなセット関係は方墳に限定されるわけではない。
- (16) ここでは「黒斑」を、炭素を吸着して生じた黒い斑点と考えておく。黒斑の生じる原因是焼成中や焼成直後に木・布等の有機物や地面と接触することによるとしている [小林行雄・佐原 真1964、前田千津子1979]。
- (17) 審窓の導入とは、大量生産の問題である。従ってその背景には、窓を媒介して埴輪工人の集団間で再編・統合が進んだものと考えられる。なお、この点に関しては、[赤堀次郎1979] のように、「製作技法の單一性」という視点から、この時期の工人達が「専門的の集団」に統合されたとする指摘もある。

参考文献

- ・赤堀次郎1979、「円筒埴輪製作覚書」：『古代学研究』第90号
- 1982、「はにわと製作者」：『古代学研究』第98・99号
- ・天野末喜1986、「岡古墳」：『藤井寺市史』第3巻
- ・新東晃一・伊藤晃・間壁蔵子1974、「VI西の平古墳」：倉敷考古館『倉敷考古館研究集報』第10号
- ・綾部市教育委員会1984、「聖塚・萬葉塚試掘調査概報」
- ・伊藤純1987、「古墳時代の顔面」：『季刊考古学』第20号
- ・猪熊朝美1978、「円筒埴輪について」：大阪文化財センター『長原』
- ・上田睦1986、「野中宮山古墳」：『藤井寺市史』第3巻
- ・宇田川誠一・神谷正弘1986、「大園古墳」：『高石市史』第2巻
- ・大阪市文化財協会1982、「長原遺跡発掘調査報告」II
- 1984、「発掘された大阪」
- ・大阪文化財センター1978、「長原」
  - 1986、「城山 その1」
  - 1987、「太井遺跡 その1」
- ・大阪府教育委員会1978、「青山遺跡現地説明会資料」
  - 1980、「太平寺古墳群」（大阪文化財センター1981、再版）
- ・笠野毅1976、「仲哀天皇陵外構設置区域の事前調査」：『御陵部紀要』28
- ・柏原市教育委員会1983、「玉手山遺跡82-5次調査」：『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1982年度』
- ・川西宏幸1973、「埴輪研究の課題」：『史林』第56巻第4号
- 1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64巻第2号
- ・北野耕平1976、大阪大学文学部「河内野中古墳の研究」
- ・京嶋党1982、「長原遺跡古墳群—まとめにかえてー」：大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告』II
- ・神戸市教育委員会1988、「住吉宮町遺跡-第2次調査-」：『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- ・小林謙一1975、「弓矢と甲冑の変遷」：『古代史発掘』6
- ・小林行雄・佐原真1964、「紫雲出」
- ・斎藤清秀・林部均1988、「福原市四条古墳の調査」：日本考古学協会「日本考古学協会第54回総会研究発表要旨」
- ・堺市教育委員会1973、「こうじ山古墳（跡）調査報告書」
  - 1978、「ニサンザイ古墳—重石及び二重掘削跡確認調査概要」
  - 1981、「向井神社跡遺跡発掘調査報告書」
- ・堺市教育委員会、「百舌鳥古墳群の調査」I 図版編
- ・桜井久之1987、「埴輪と中・小規模古墳—長原古墳群の形象埴輪—」：『季刊考古学』第20号
- ・白神典之1987、「百舌鳥野の古墳時代序説」：『横田健一先生古稀記念 文化史論叢』上
- ・鈴木秀典1978、「IV-5-Ⅳまとめ」：長原遺跡調査会『長原遺跡発掘調査報告』（大阪市文化財協会1982改訂）
- ・埼玉県政情報資料室1988、「はにわ人の世界」

- ・横山 洋1983、「長吉瓜破地区土地区画整理事業に伴う長原遺跡発掘調査(NG82-27)速報」:「大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第8回)資料」
- ・高石市教育委員会1977、「大體遺跡」高石市文化財調査概要1976-1
- ・高橋克暮1988、「器財埴輪の編年と古墳祭祀」:「史林」第71巻第2号
- ・田上雅則1987、「桜塚古墳群の円筒埴輪」:豊中市教育委員会「抵津壹中 大塚古墳」
- ・田中清美1982、「埴輪」:大阪市文化財協会「長原遺跡発掘調査報告」II  
1985、「長原古墳群」:古市古墳群研究会「古市古墳群とその周辺」
- ・田中弘1986、「古市古墳群における小古墳の検討」:「考古学研究」第32巻第4号
- ・樽野博幸1978、「VII-3 大原遺跡出土の哺乳動物遺体」:長原遺跡調査会「長原遺跡発掘調査報告」
- ・都出比呂志1981、「埴輪編年と前期古墳の新古」:「王陵の比較研究」
- ・豊中市教育委員会1986、「御術子塚古墳調査概要報告」:「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1985年」  
1987、「抵津壹中 大塚古墳」
- ・長原遺跡調査会1978、「長原遺跡発掘調査報告」(大阪市文化財協会1982改訂)
- ・中村 浩1978、「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」:大阪府教育委員会「陶邑」III
- ・奈良県立都原考古学研究所1981、「新沢千塚古墳群」  
1988、「恒原市四条古墳発掘調査現地説明会資料」
- ・西川 宏1960、「造出し」:月の輪古墳刊行会「月の輪古墳」
- ・野上丈助1982、「泉北考古資料館友の会『大阪府の埴輪』」
- ・羽曳野市教育委員会1982、「野々上埴輪窯跡群」:「古市遺跡群」III  
1984、「古市遺跡群」V
- ・原口正三1973、「高槻市史」第6巻考古編  
1977、「II 考古学からみた原始・古代の高槻」:「高槻市史」第1巻本編!
- ・東大阪市教育委員会1979、「瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡」
- ・棚本誠一1967、「前方後円墳の造出について」:和歌山市教育委員会「岩橋千塚」
- ・藤井寺市教育委員会1986、「古市古墳群」藤井寺の遺跡ガイドブックNo.1  
1987、「土師の里遺跡の調査」:「石川流域遺跡群発掘調査報告」II
- ・本宮町教育委員会1984、「天王塚古墳」本宮町文化財調査報告書第8集
- ・埋蔵文化財研究会1985、「形象埴輪の出土状況」
- ・前田千津子1979、「土器焼成実験から覗いた黒班」:東奈良遺跡調査会「東奈良発掘調査概報」I
- ・松阪市教育委員会1981、「松阪市八重田・藤之木町 八重田古墳群発掘調査報告書」
- ・水野正好1974、「絵のある円筒埴輪」:「古代史発掘」?
- ・森 浩一1972、「第三節 人物埴輪にみられる習俗の問題」:和歌山市教育委員会「井辺八幡山古墳」
- ・森岡秀人1986、「抵津-打出小穂古墳周縁の発掘調査」:「第4回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会・資料」
- ・森村健一・白神典之1987、「百舌鳥の巨大古墳」:「ヒストリア」第115号
- ・森村健一1981、「出土円筒埴輪について」:堺市教育委員会「向井神社跡遺跡発掘調査報告書」
- ・八尾市文化財調査研究会1987、「八尾南遺跡(第8次調査)一般公開資料」
- ・吉田恵二1973、「埴輪生産の復元」:「考古学研究」第19巻第3号
- ・渡辺昌宏1985、「青山古墳群」:古市古墳群研究会「古市古墳群とその周辺」

## あとがき

長吉瓜破地区で土地区画整理事業に伴う発掘調査が開始されたのは、前にも記したように、1981年のことである。当初から、遺跡の発掘調査とは、報告書の作成・刊行を経て初めて完了となるものであるということについては、区画整理事業所の担当者とも合意されていたことであった。しかし、当協会では、日々の発掘調査に追われ、翌年から直ちに、ということにはならなかった。そういうしている内に、年月が過ぎてしまい、区画整理事業の側でも、報告書作成の必要性に対する認識が、一時、薄れかけていた。区画整理事業そのものは、ともかく当初の予定どおりとはいわないまでも、まず順調に進んできたといえるのではないかと思う。ところが、報告書の作成は、資料が未報告のまま蓄積されるいっぽうで、記憶の限界も自覚され、早急に着手する必要性が身にしみて感じるようになった。周囲から、報告書刊行の要望もたびたび聞こえるようになった。あらためて、数年前より区画整理事務所と協議を重ねた結果、本書を発行することになった。

本書のタイトルを表紙のようにしたのは、この区画整理事業の対象地域が、長原のみならず瓜破遺跡の範囲にもおよぶこと、これまで、長原遺跡については、地下鉄谷町線の延長工事その他に伴う発掘調査の報告書が『長原遺跡発掘調査報告』として「I」から「III」まで刊行されており、瓜破・瓜破北遺跡については、「瓜破遺跡」「I」と「瓜破北遺跡」の「II」まで刊行されているので、それらと区別するために、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』の「I」とした。

ここで、内容にかかわって若干触れておくと、報告書作成の仕方については、旧石器時代、縄文時代などの時代別という案、全体の地域を西北部とか東南部とかにわける地区別案なども提出され、協議もしたが、結局、本書のようになしに、発掘調査した年度別に順次刊行してゆくことにした。ただし、本文記述に際しては、当時の資料と知見にタイムスリップして記述するということは不可能で、あくまで現時点での認識と知識に基づくことにした。したがって、例えば図6や7のような長原遺跡の古墳分布図は、最新のデーターということである。ただし、地層に関しては、現在、協会として共通認識されているような「長原基本層序」が確立されていなかったため、調査現場での記録と記述に不十分な点があったことは認めざるをえず、第Ⅲ章第1項のような記述にとどめざるをえなかった。

その他、本書において、まだまだ不備はあり、課題は残しているが、次年度以降に期して、むすびのことばとしたい。

(永島岬臣慎)

# 図 版



I区全景  
(東から)



I区全景 (西から)



44号墳全景（西から）



45号墳全景（東から）



45号墳全景（北東から）



46号墳全景（北から）



47号墳全景（北から）



48号墳全景（北西から）



49号墳全景（北から）



50号墳全景（南西から）



50号墳全景（南から）



51号墳全景（南から）



51号墳全景（東から）



52号墳全景（左下はSE401）（南から）



53号墳全景（東から）



53号墳全景（南から）



54号墳全景（南東から）



54号墳全景（南から）



56号墳全景（西から）



56号墳全景（東から）

57号墳全景  
(西から)



57号墳出土状況 (西から)



57号墳造出し遺物出土状況（東から）



57号墳造出しに埋設された須恵器の底部（南から）



57号墳造出し南側遺物出土状況



58号墳全景（西から）

58号墳とNG第6A層上面検出水田畦畔



58号墳円筒埴輪  
出土状況（北から）



II区南トレンチNG第6A層上面検出水田畦畔（西から）



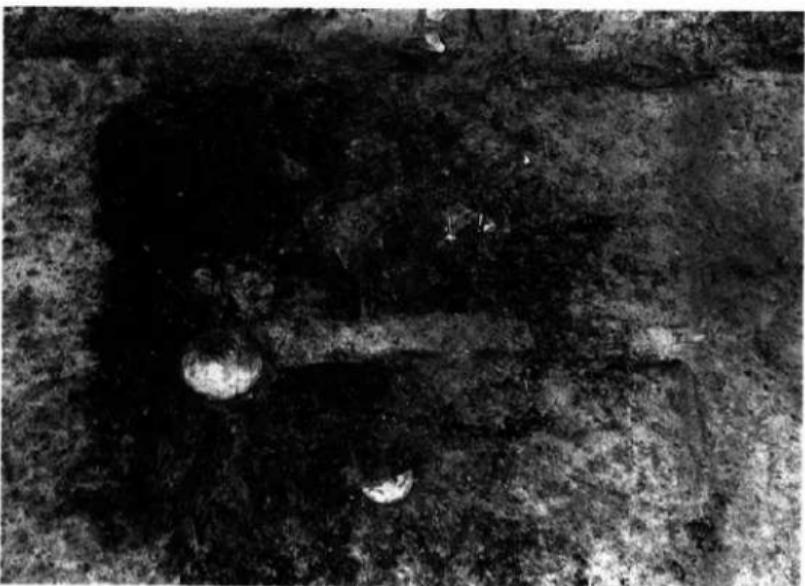
NG第6A層上面検出水田畦畔SR01断面（南から）



NG第6A層上面検出水田畦畔SR02と50号墳（南から）

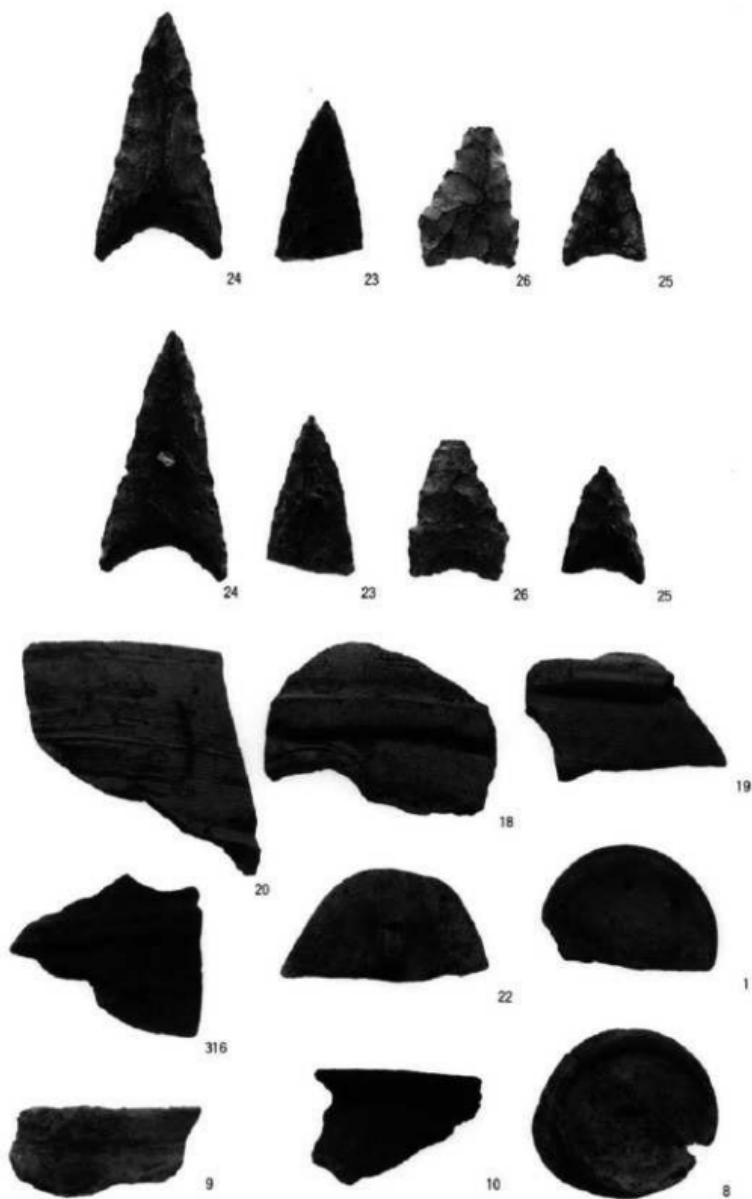


平安時代井戸S E 401全景（北から）



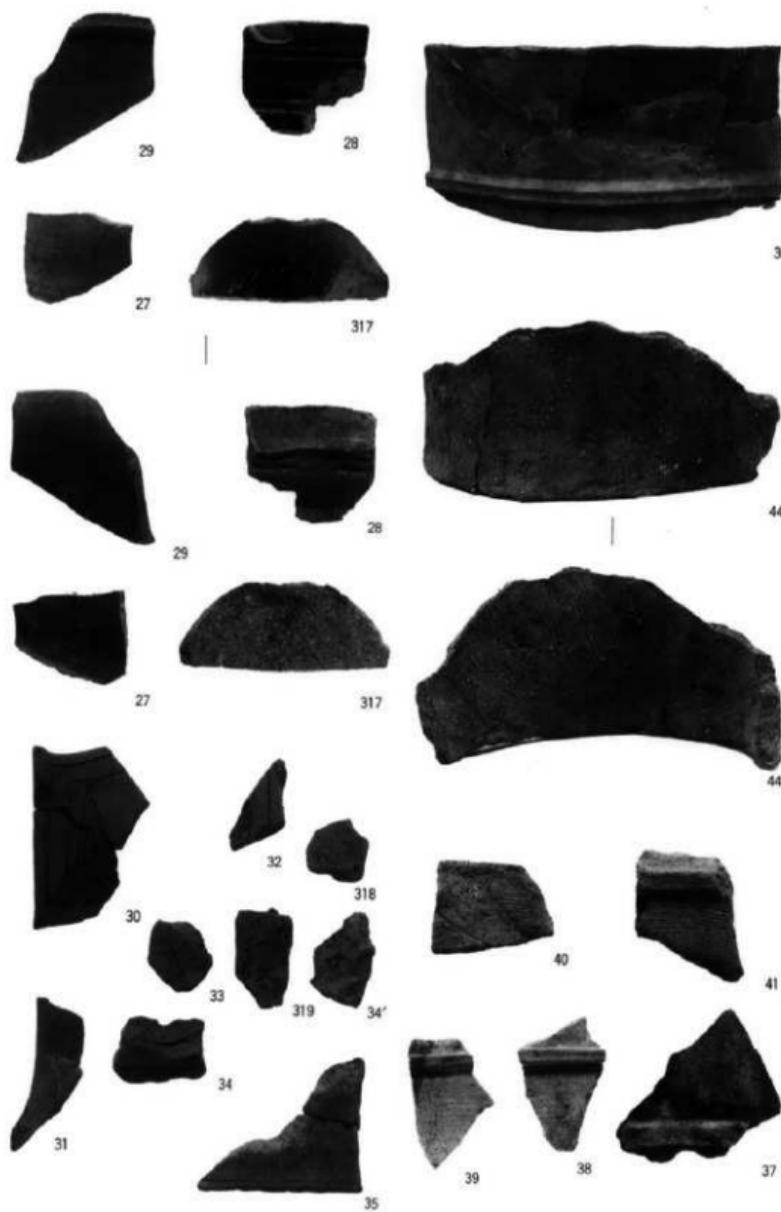
平安時代火葬墓S X 401全景（南から）

圖版一七 包含層出土遺物



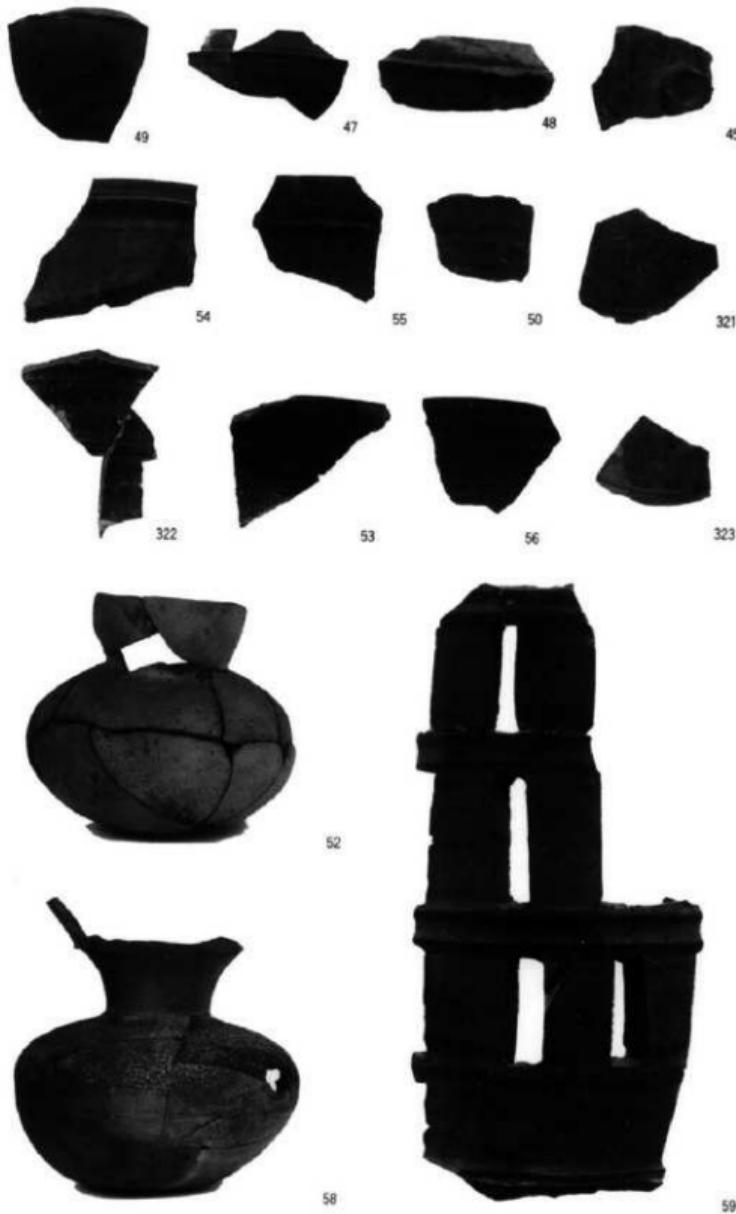
第4層(1·8·9·10), 第7層(18~20·23~26·316)

圖版一八 44號墳出土遺物



44號墳(27~44·317~319)

圖版一九 45號墳出土須思器



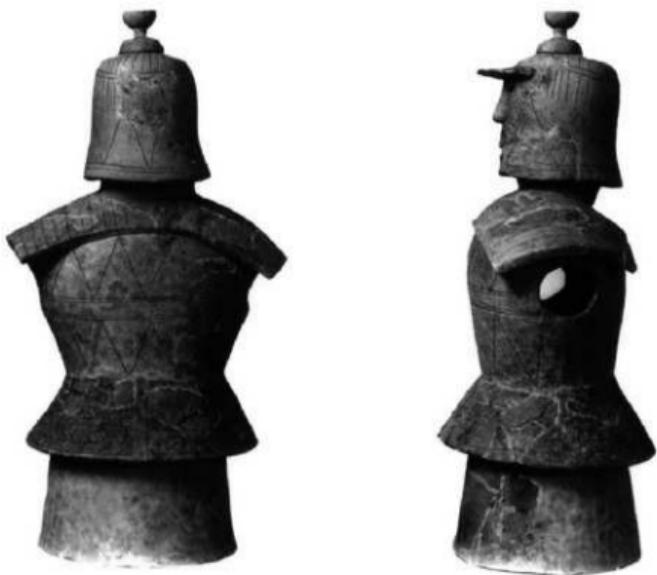
45號墳(45·47~50·52~56·58·59·321~323)

圖版一〇  
45號墳出土須惠器

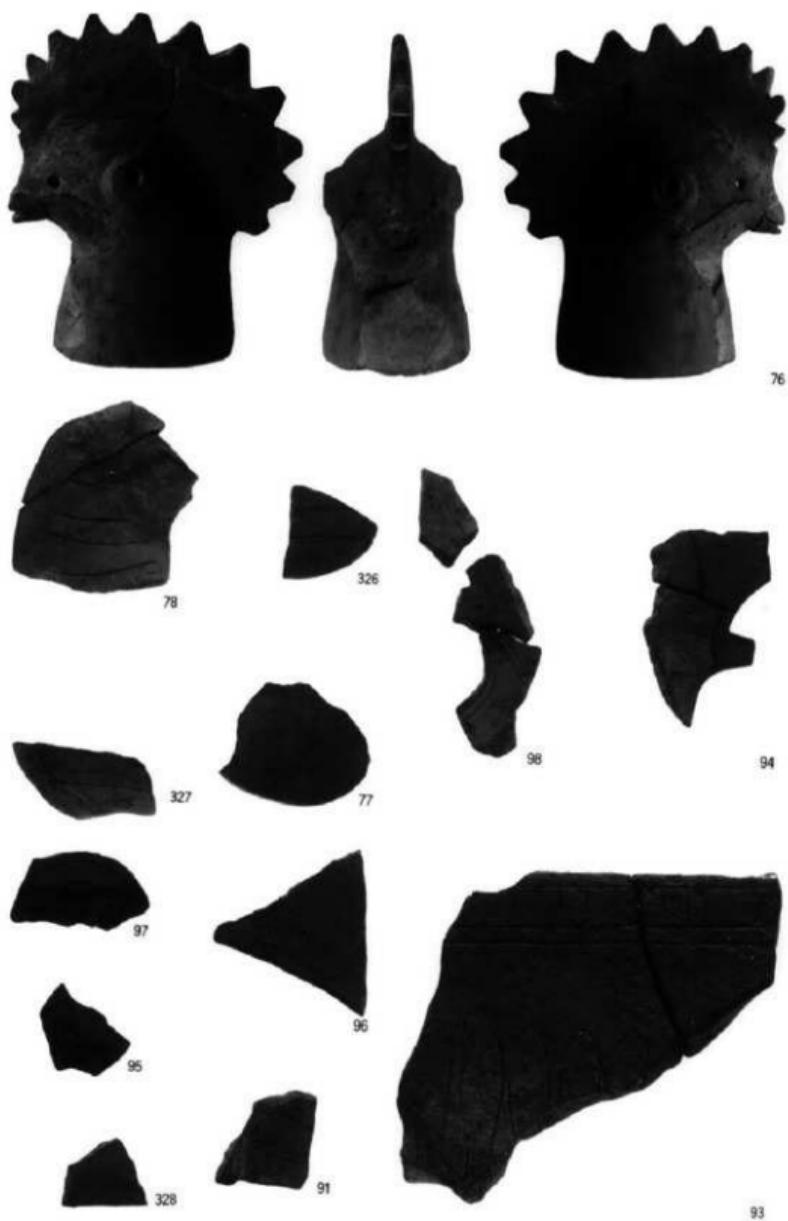


45號墳(61~64·66·68~70·74·324·325)

圖版二一 45號墳出土武人形埴輪

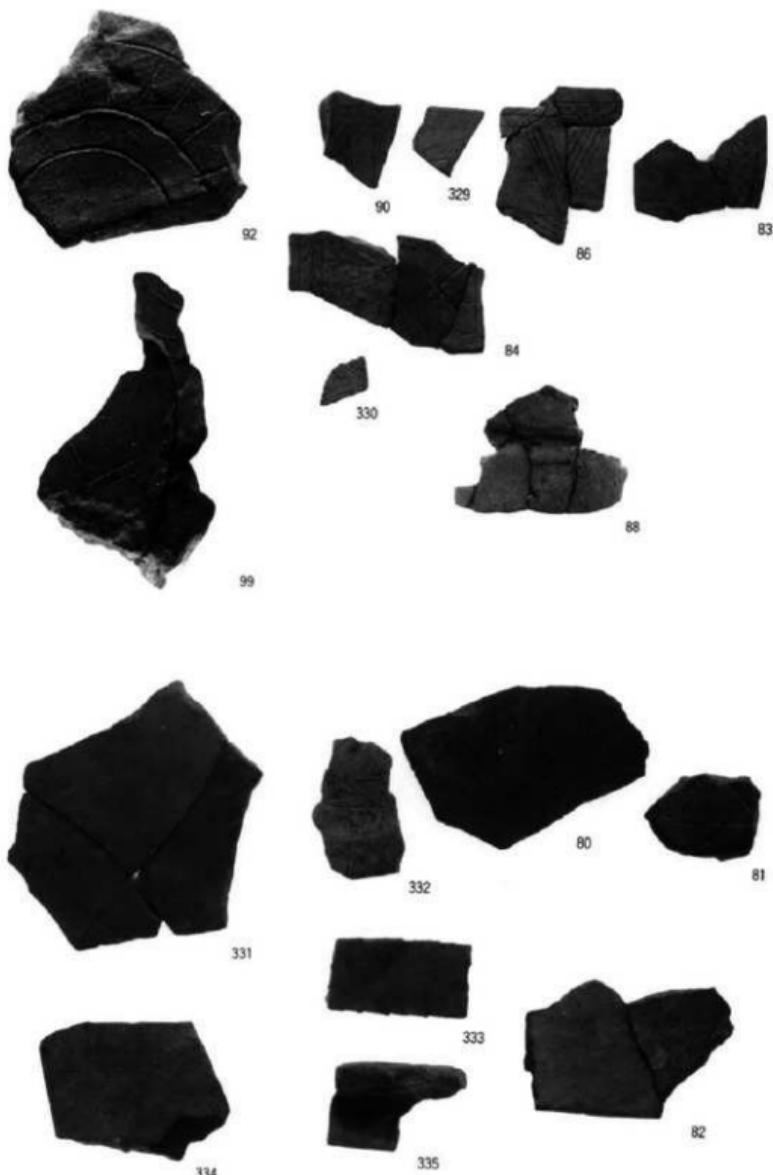


圖版二三 45號墳出土形象埴輪



45號墳(76~78·91·93~98·326~328)

圖版二三 45號墳出土形象埴輪



45號墳(80~84·86·88·90·92·99·329~335)

図版二四 45号墳出土凹筒埴輪



45号墳(100~103・106~114)



115



120



116



121



117



118



122



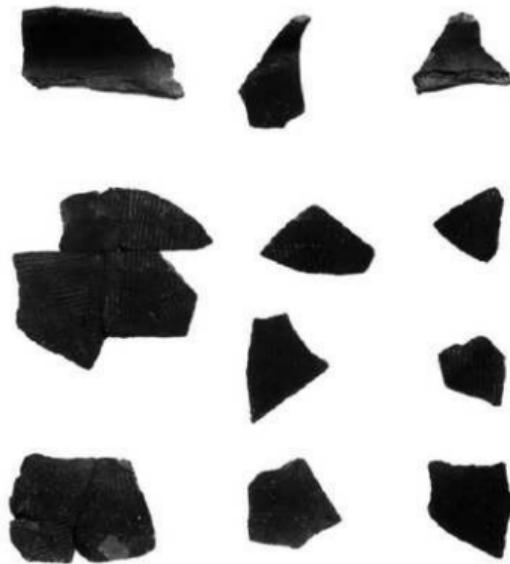
119



123



124



126



125



128



129



179



181

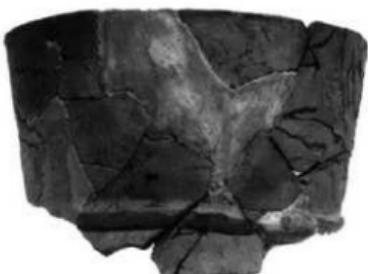
180

47號墳(125), 49號墳(128·130), 52號墳(179~181)

圖版二八  
50號墳出土圓筒埴輪



136



155



339



159



154



340

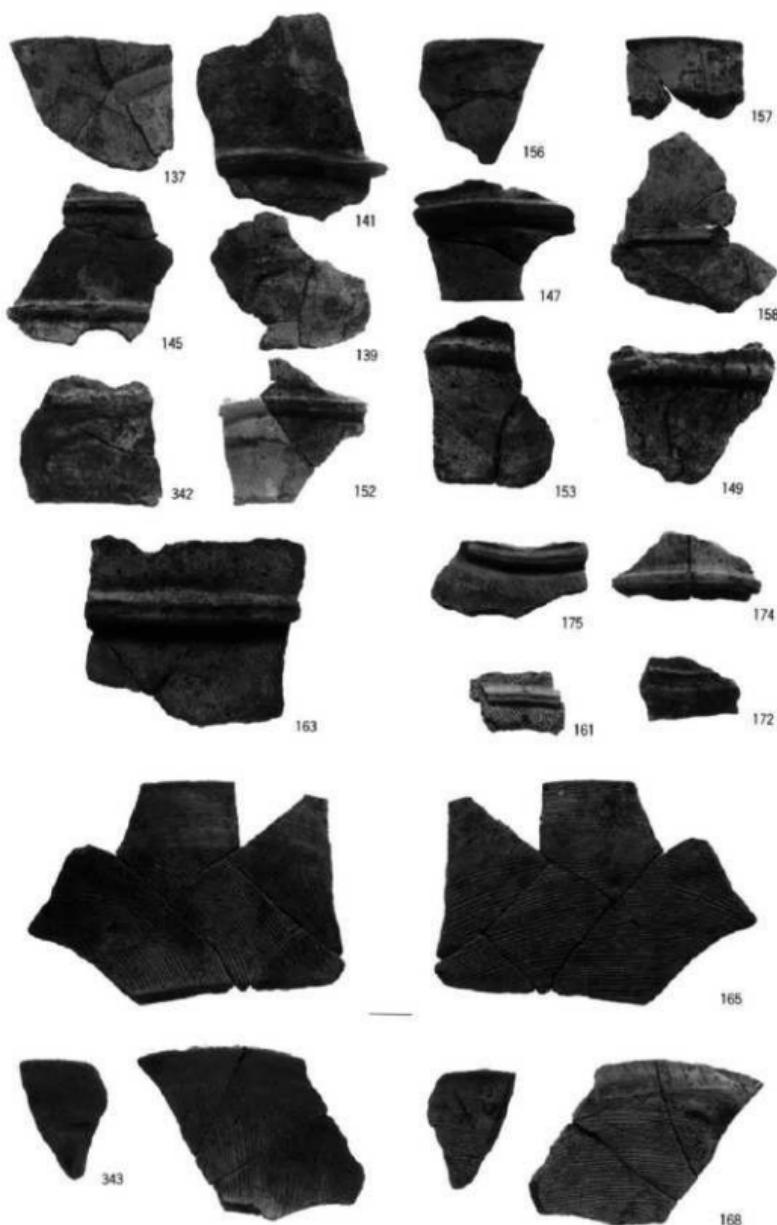


336



341

50號墳(136·154·155·159·336·339~341)



50號墳(137·139·141·145·147·149·152·153·156~158·161·163·165·168·174·175·342·343)



188



190



189



191



183



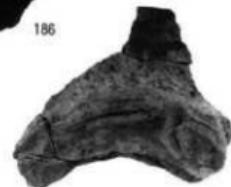
186



184



185



187



193



199



194



200



202



201



232



233

54號墳(193·194·199~202), 57號墳(232·233)



206



207



208



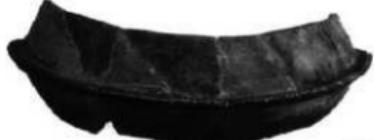
209



210



211



222



229



345

圖版三三  
57號墳出土須惠器



57號墳(210·212~215·219~221·223·227·232~244)



231



230



234



234

57號墳(230·231·234)



235



238



240



241

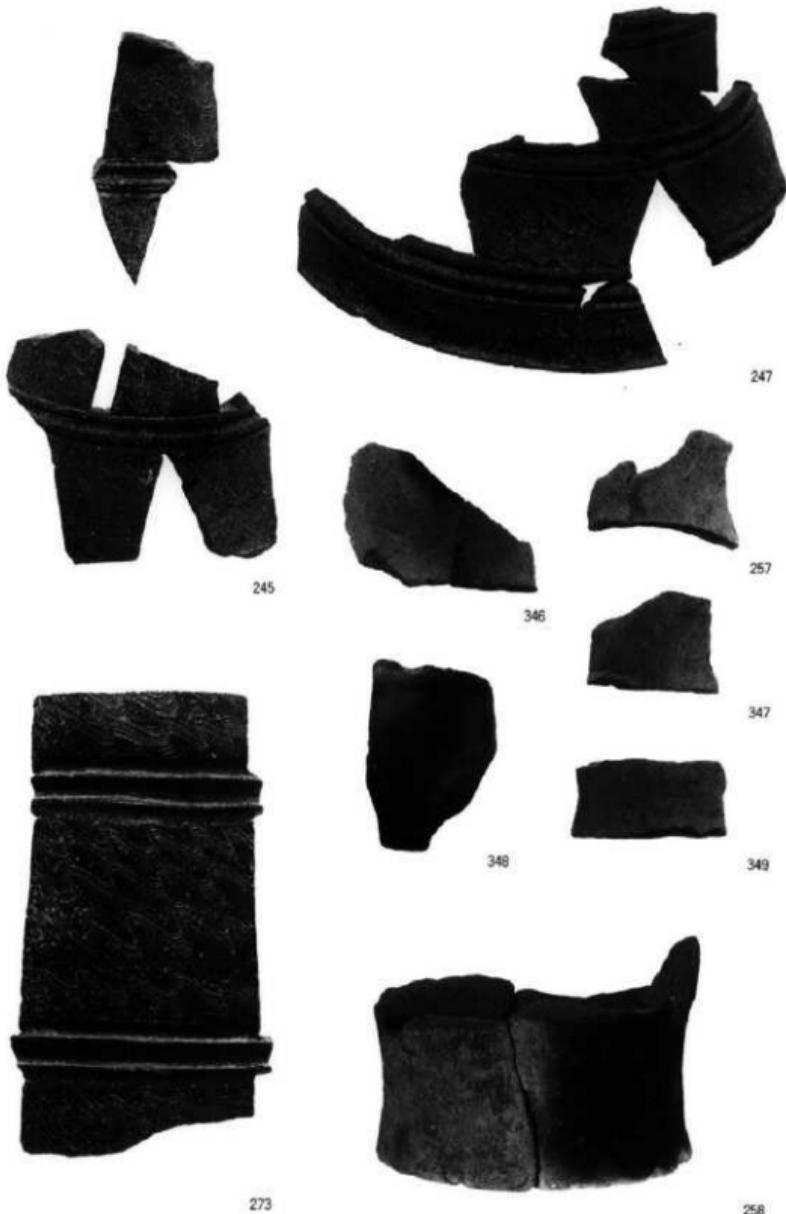


245



246

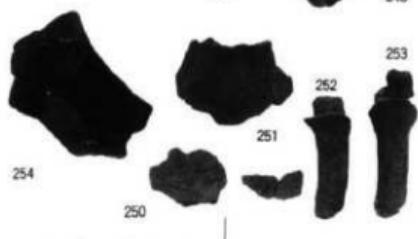
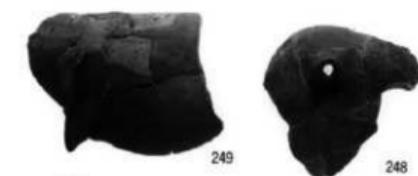
圖版三六  
57·58號墳出土遺物



57號墳(245·247·257·258·346~349)、58號墳(273)

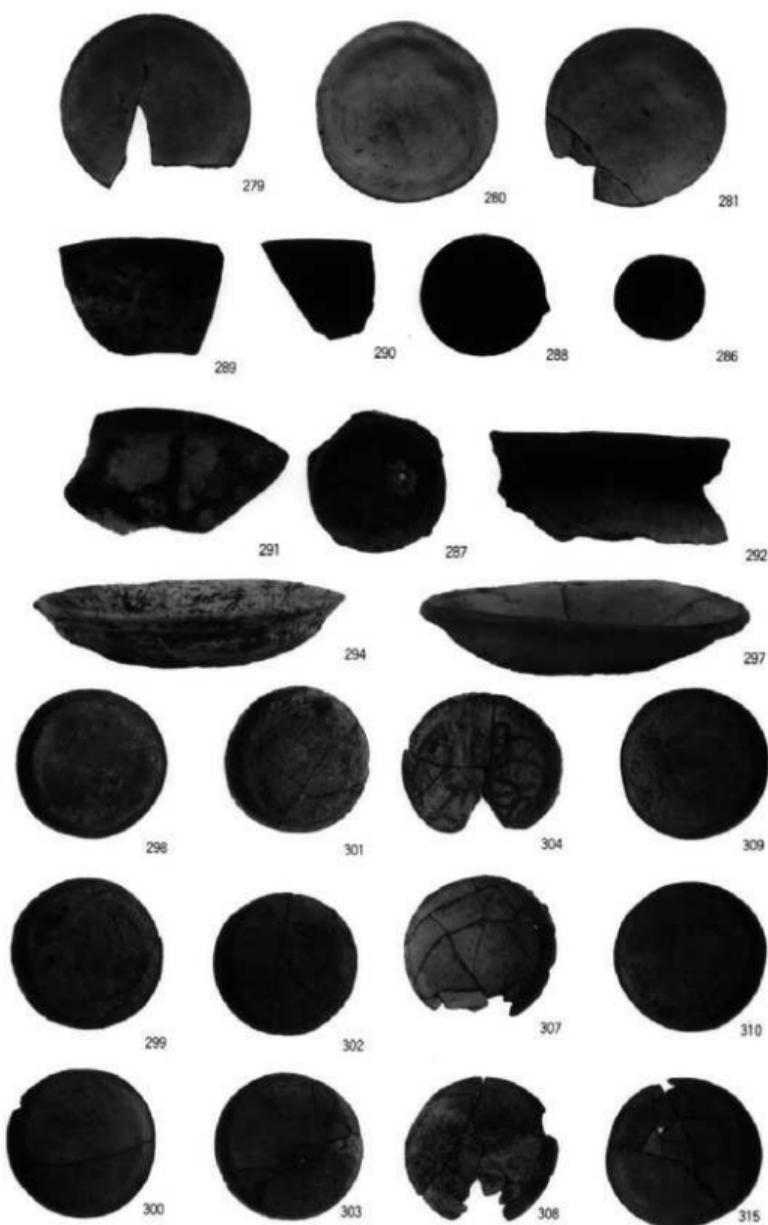
圖版三七

57·58號墳出土形象·圓筒埴輪



57號墳(248~256)、58號墳(274·275·277)

圖版三八 平安時代遺構出土土器



S E 401 (279~292), S X 401 (294·297), S X 402 (298~304·307~310·315)

大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告 I

発行所 財團法人 大阪市文化財協会  
〒540 大阪市中央区法円坂1-6-48 (TEL 06-943-6833)  
発行年月日 平成元年3月31日  
印刷・製本 中島弘文堂印刷所

